

鈔一分。寄余處存稿。此外黎所未鈔之文。寥寥無幾。尤不可發刻。送人不特篇帙太少。且少壯不克努力。志充而才不足以副之。刻出適以彰其陋耳。如有知舊刻余集者。婉言謝之可也。切囑切囑。余生平畧涉先儒之書。見聖賢教人修身。千言萬語。而要以不伎不求爲重。伎者嫉賢害能。妬功爭寵。所謂怠者不能修。忌者畏人修之類也。求者貪利貪名。懷土懷惠。所謂未得患得。既得患失之類也。伎不常見。每發露於名業相伴。勞位相埒之人。求不常見。每發露於貨財相接。仕進相妨之際。將欲造福。先去伎心。所謂人能充無欲害人之心。而仁不可勝用也。將欲立品。先去求心。所謂人能充無穿窬之心。而義不可勝用也。伎不去。滿懷皆是荆棘。求不去。滿腔日即卑污。余於此二者。常加克治。恨尙未能掃除淨盡。爾等欲心地乾淨。宜於此二者。痛下工夫。并願子孫世世戒之。附作伎求詩二首錄左。

歷覽有國有家之興。皆由克勤克儉所致。其衰也則反是。余生平亦頗以勤字自勵。而實不能勤。故讀書無手鈔之冊。居官無可存之牘。生平亦好以儉字教人。而自問實不能儉。今署中內外服役之人。廚房日用之數亦云奢矣。其故由於前在軍營規模宏闊。相沿未改。近因多病。醫藥之資漫無限制。由儉入奢。易於下水。由奢反儉。難於登天。在兩江交卸

時。尙存養廉二萬金。在余初意不料有此。然似此放用去。轉瞬卽已立盡。爾輩以後居家。須學陸梭山之法。每月用銀若干兩。限一成數。另封秤出。本月用畢。只准贏餘。不准虧欠。衙門奢侈之習。不能不徹底痛改。余初帶兵之時。立志不取軍營之錢。以自肥其私。今日差幸不負始願。然亦不願子孫過於貧困。低頭求人。惟在爾輩力崇儉德。善持其後而已。孝友爲家庭之祥瑞。凡所稱因果報應。他事或不盡驗。獨孝友則立獲吉慶。反是則立獲殃禍。無不驗者。吾早歲久宦京師。於孝養之道多疏。後來屢轉兵間。多獲諸弟之助。而吾毫無裨益於諸弟。余兄弟姊妹各家均有田宅之安。大抵皆九弟扶助之力。我身歿之後。爾等事兩叔如父。事叔母如母。視堂兄弟如手足。凡事皆從省嗇。獨待諸叔之家。則處處從厚。待堂兄弟。以德業相勸。過失相規。期於彼此有成。爲第一要義。其次則親之欲其貴。愛之欲其富。常常以吉祥善事代諸昆弟。默爲禱祝。自當神人共欽。溫甫季洪兩弟之死。余內省覺有慚德。澄侯沅甫兩弟漸老。余此生不審能否相見。爾輩若能從孝友二字切實講求。亦足爲我彌縫缺憾耳。

附伎求詩二首

善莫大於恕。德莫凶於妬。妬者妾婦行。瑣瑣奚比數。已拙忌人能。已塞忌人遇。已苦無事

功忌人得成務。己苦無黨援。忌人多助。勢位苟相敵。畏偏又相惡。己無好聞望。忌人文名著。己無賢子孫。忌人後嗣裕。爭名日夜奔。爭利東西驚。但期一身榮。不惜他人污。聞災或欣幸。聞禍或悅豫。問渠何以然。不自知其故。爾室神來格。高明鬼所顧。天道常好還。嫉人還自誤。幽明叢詭忌。乖氣相迴互。重者裁汝躬。輕亦滅汝祚。我今告後生。悚然大覺寤。終身讓人道。曾不失寸步。終身祝人善。曾不損尺布。消除嫉妒心。普天零甘露。家家獲吉祥。我亦無恐怖。有不悛。

知足天地寬。貪得宇宙隘。豈無過人姿。多欲爲患害。在約每思豐。居困常求泰。富求千乘車。貴求萬釘帶。未得求速償。既得求勿壞。林壑比椒蘭。磐固方秦岱。求榮不知鑿。志充神愈汰。歲煥有時寒。日明有時晦。時來多善緣。運去生災怪。諸福不可期。百殃紛來會。片言動招尤。舉足便有礙。戚戚抱殷憂。精爽日凋瘵。矯首望八荒。乾坤一何大。安榮無遺欣。患難無遺怒。看看十人中。八九無聊賴。人窮多過我。我窮猶可耐。而況處夷途。奚事生嗟悔。於世少所求。俯仰有餘快。俟命堪終古。曾不願乎外。有不求。

左記筆記十二篇二十七則中より數則を節録す

才德

司馬溫公曰。才德兼全。謂之聖人。才德兼亡。謂之愚人。德勝才。謂之君子。才勝德。謂之小人。余謂德與才不可偏重。譬之於水。德在潤下。才即其載物。溉田之用。譬之於木。德在曲直。才即其舟楫。棟梁之用。德若水之源。才即其波瀾。德若木之根。才即其枝葉。德而無才。以輔之。則近於愚人。才而無德。以主之。則近於小人。世人多不甘以愚人自居。故自命每願爲有才者。世人多不欲與小人爲緣。故觀人每好取有德者。大較然也。二者既不可兼。與其無德而近於小人。毋寧無才而近於愚人。自修之方。觀人之術。皆以此爲衡可矣。吾生平短於才。愛我者。或謬以德器相許。實則雖曾任艱鉅。自問僅一恐人。幸不以私智詭譎鑿其恐。尙可告後昆耳。

君子小人

陳容有言曰。仁義豈有常。陷之則爲君子。遠之則爲小人。大哉言乎。仁者物我無閉之謂也。一有自私之心。則小人矣。義者無所爲而爲之謂也。一有自利之心。則小人矣。同一日也。朝而公正。則爲君子。夕而私利。則爲小人。同一事也。初念公正。則爲君子。轉念私利。則爲小人。惟聖罔念作狂。惟狂克念作聖。所爭祇在幾微。君子無終食之間違仁。造次必如是。顛沛必如是。一不如是。則流入小人而不自覺矣。所謂小人者。誠見小耳。度量小耳。非

底之蛙。所窺幾何。而自以爲絕倫之學。遠東之豕所異幾何。而自以爲蓋世之勳。推之以子子爲義。以礪礪爲信。以礙礙爲廉。此皆識淺而易以自足者也。君臣之知。須積誠以相感。而動疑主恩之過薄。朋友之交。貴積漸以相孚。而動怨知己之罕觀。其或兄弟不相容。夫婦不相信。父子不相亮。此皆最福而易以滋疑者也。君子則不然。廣其謙。則天下之大。棄若敝屣。堯舜之業。視若浮雲。宏其度。則行有不得。反求諸己。己所不欲。勿施於人。烏有所謂自私自利者哉。不此之求。而詡詡然號於衆曰。吾君子也。當其自詡。君子深信不疑之時。識者已嗤其爲小人矣。

兵

凡用兵。主客奇正。夫人而能言之。未必果能知之也。守城者爲主。攻者爲客。守營壘者爲主。攻者爲客。中途相遇。先至戰地者爲主。後至者爲客。兩軍相持。先吶喊放鎗者爲客。後吶喊放鎗者爲主。兩人持矛相格鬪。先動手殺第一下者爲客。後動手即格鬪而即殺者爲主。中間排隊迎敵爲正兵。左右兩旁抄出爲奇兵。屯宿重兵。堅紮老營。與賊相持者爲正兵。分出遊兵。飄忽無常。伺隙狙擊者爲奇兵。意有專向。吾所持以禦寇者爲正兵。多眼疑陣。示人以不可測者爲奇兵。旌旗鮮明。使敵不敢犯者爲正兵。羸馬疲卒。偃旗息鼓。本

強而故示以弱者爲奇兵。建旗鳴鼓。屹然不輕動者爲正兵。佯敗佯退。設伏而誘敵者爲奇兵。忽主忽客。忽正忽奇。變動無定時。轉移無定勢。能一一區而別之。則於用兵之道。思過半矣。

兵者陰事也。哀戚之意。如臨親喪。肅敬之心。如承大祭。庶爲近之。今以牛羊犬豕而就屠烹。見其悲號於割剝之頃。宛轉於刀俎之間。仁者將有所不忍。況以人命爲浪博輕擲之物。無論其敗喪也。即使倖勝。而死傷相望。斷頭洞胸。折臂失足。血肉狼藉。日陳吾前。哀矜之不遑。喜於何有。故軍中不宜有歡欣之象。有歡欣之象者。無論或爲和悅。或爲驕盈。終歸於敗而已矣。田單之在即墨。將軍有死之心。士卒無生之氣。此所以破燕也。及其攻狄也。黃金橫帶。而馳乎淄澠之間。有生之樂。無死之心。魯仲連策其必不勝。兵事之宜慘戚。不宜歡欣。亦明矣。嘉慶季年。名將楊遇春。屢立戰功。嘗語人曰。吾每臨陣。行間覺有熱風吹拂而上者。是日必敗。行間若有冷風。身體似不禁寒者。是日必勝。斯亦肅殺之義也。

名望

知識愈高。則天之所以責之者愈厚。名望愈重。則鬼神之所以伺察者愈嚴。故君子之自處。不肯與衆人較量長短。以爲己之素。所自期者大。不肯自欺其知識以欺天也。己之名

望素尊不肯更以鄙小之見貽譏於神明也。

居業

古者英雄立事必有基業。如高祖之關中。光武之河內。魏之兗州。唐之晉陽。皆先據此爲基。然後進可以戰。退可以守。君子之學道也。亦必有所謂基業者。大抵以規模宏大。言辭誠信爲本。如居室然。宏大則所宅者廣。託庇者衆。誠信則置趾甚固。結構甚牢。易曰。寬以居之。謂宏大也。修辭立其誠。所以居業。謂誠信也。大程子曰。道之浩浩。何處下手。惟立誠。纔有可居之處。誠便是忠信。修省言辭。便是要立得這忠信。若口不擇言。逢事便說。則忠信亦被汨沒動盪。立不住了。國藩按。立得住。卽所謂居業也。今世俗言興家立業是也。張子曰。執德不宏。信道不篤。焉能爲有。焉能爲亡。亦謂苟不能宏大誠信。則在我之知識。浮泛動盪。指爲我之所有。也不可。指爲我之所無。亦不可。是則終身無可居業。程子所謂立不住者耳。

英雄誠子弟

古之英雄。意量恢拓。規模宏遠。而其訓誠子弟。恆有恭謹斂退之象。劉先主臨終。敕太子曰。勉之勉之。勿以惡小而爲之。勿以善小而不爲。惟賢惟德。可以服人。汝父德薄。不足效

也。汝與丞相從事。事之如父。西涼李嵩。手令戒諸子。以爲從政者。當審慎賞罰。勿任愛憎。近忠正。遠佞諛。勿使左右竊弄威福。毀譽之來。當研覈真僞。聽訟折獄。必和顏任理。慎勿逆詐。億必。輕加聲色。務廣咨詢。勿自專用。吾蒞事五年。雖未能息民。然含垢匿瑕。朝爲寇讎。夕委心膂。庶無負於新舊。事任公平。坦然無類。初不容懷。有所損益。計近則如不足。經遠乃爲有餘。庶亦無愧前人也。宋文帝以弟江夏王義恭。都督荆湘等八州諸軍事。爲書誠之曰。天下艱難。國家事重。雖曰守成。實亦未易。隆替安危。在吾曹耳。豈可不感尋王業大懼負荷。汝性褊急。志之所滯。其欲必行。意所不存。從物回改。此最弊事。宜念裁抑。衛青遇士大夫。以禮。與小人有恩。西門安于。矯性齊美。關羽張飛。任偏同弊。行已舉事。深宜鑒此。若事異今日。嗣子幼蒙。司徒當周公之事。汝不可不盡祇訓之理。爾時天下安危。決汝二人耳。汝一月自用錢。不可過三十萬。若能省此益美。西楚府舍。略所諳究。計當不須改作。日求新異。凡訊獄多決。當時難可逆慮。此實爲難。至訊日。虛懷博盡。慎無以喜怒加人。能擇善者而從之。美自歸己。不可專意自決。以矜獨斷之明也。名器深宜慎惜。不可妄以假人。昵近爵賜。尤應裁量。吾於左右。雖爲少恩。如聞外論。不以爲非也。以貴凌物。物不服。以威加人人不厭。此易達事耳。聲樂嬉遊。不宜令過。補酒漁獵。一切勿爲供用。奉身皆有

節度。奇服異器。不宜與長。又宜數引見佐吏。相見不數。則彼我不親。不親無因。得盡人情。人情不盡。復何由知衆事也。數君者。皆雄才大略。有經營四海之志。而其教誡子弟。則約旨卑思。斂抑已甚。伏波將軍馬援。亦曠代英傑。而其誠兄子書曰。吾欲汝曹聞人過失。如聞父母之名。耳可得聞。口不可得言也。好議論人長短。妄是非政法。此吾所太惡也。寧死不願子孫有此行也。龍伯高敦厚周慎。口無擇言。謙約節儉。廉公有威。吾愛之重之。願汝曹效之。杜季良豪俠好義。愛人之愛。樂人之樂。父喪致客。數郡畢至。吾愛之重之。不願汝曹效之也。效伯高不得。猶爲謹敕之士。所謂刻鵠不成。尚類鶩者也。效季良不得。陷爲天下輕薄子。所謂畫虎不成。反類狗者也。此亦謙謹自將。斂其高遠之懷。即於卑邇之道。蓋不如是則不足以自致於久大。藏之不密。則放之不准。蘇軾詩。始知真放本精微。即此義也。

第二章 歴代の人物

第一編 宋代李芾 第二編 明代李東陽 劉大夏 楊一清 第三

綱 清朝李鳳沅 陳鳳年 胡林翼 羅澤南 王夔 李榕 曾國華 李榕宜 劉松山 陶澍 羅經典 陳大受 江忠源 鄧紹良

第一編 宋代

李芾

李芾 字は叔章。衡山の人。天資聰敏。その齋に名けて無暴棄といふ。魏了翁一見之を禮し。謂ふ祖風ありと。名を易へて肯齋といひ。初め祁陽の尉たりし時より名聲あり。祁陽縣を攝し。縣大に治まる。湖南安撫司幕官たる時。盜永州に起る。之を招撫するも。歲餘下らず。芾乃ち參議鄧垌と千三百人を提げて。其巢窟を破り。賊魁將時選父子を擒へ。餘黨遂に平ぐ。湘潭縣を攝す。縣素より大家多く。前令袖手して敢て犯さず。芾至りて。賦課徵稅毫も貴勢を避けず。賦役大に平なり。入朝して。德清縣を差知す。會々浙西饑ゆ。芾保伍を置き。民を賑はす。爲めに活くるもの數萬。又德清に妖人あり。亂民を煽動す。蜂起之に附するもの數萬人に至る。芾を遣りて之を討す。賊其來るを聞き。衆立るに散ず。歸て司農寺丞に叙し。永州を歴知し。惠政あり。永人之を祠る。浙東提刑を以て。温州を知す。州海に瀕し。盜多し。芾至りて。盜息み。又前官

を以て浙西に移る。浙西亦盗多く、太湖中に群穴す。芾其出沒を探得して之を捕ふ、盗賊を散す。虎邱書院を作り、尹焞を祠り、學官を置き、親ら學規をつくり之を教ふ、學ぶ者甚だ盛也。咸清元年入て臨安府を知す。時に賈似道國政に當り、前尹は事鉅細となく先づ關白して始めて行ふ。芾獨り問ふ所なくして決行す。福王府の脅迫致死事件により賈似道と辨論し、又嘗て出でて火具を隠し、獨り賈似道の家人具を爲さず、立るに之を杖す。似道大に怒り、臺臣黃萬石をして誣ゆるに、賊罪を以てせしめ、之を罷む。既にして元軍鄂州を取る、乃ち起て湖南提刑となる。時に郡縣盜賊横行し、良民奔竄す。芾所部に令し、民兵を發し、自ら縣を衛らしめ、一幟を與へ令して曰く、亂を作す者は幟下に斬らんと、民始めて帖然たり。乃ち號令して兵を募り、壯士三千人を擇び、土豪尹奮忠をして之に將として、王に勤めしめ、別に民兵を召集し、衛の守備となす。未だ幾ならずして似道の兵蕪湖に潰ゆ、乃ち芾の官を復し、潭州に知らしめ、湖南安撫使を兼ね、時に湖北の州郡皆己に歸附す。其友芾に勸めて曰く、行く勿れ、已むなくんば、即ち身を以て行く可也と。芾泣て曰く、吾豈身を謀るに味からんや。たゞ世々國恩を受け、廢棄すと雖、猶報を思ふ、今や幸に我を

用ふ、我家を以て國に許すなりと。時に其愛女死す、一恫して行く。德祐元年七月潭に至り、潭兵を調し、盡くし、游騎更に湘陰、益陽諸縣に入り、倉卒召募三千人に滿たず、乃溪峒蠻に結び、以て聲援せしむ。器械を繕ひ、芻糧を備へ、江に柵し、壁を修め、劉孝忠に命じて諸軍を統べしむ。吳繼明湖北より至り、陳毅、陳元蜀より歸る。芾奏し、留て潭を守る、賊を推して之に任じ、皆死力を得。元の右丞相阿里海牙既に江陵を下り、軍を分て常德を成り、諸蠻を遇めて大兵を以て潭に入る。芾其將于興を遣り、兵を帥て之を湘陰に禦がしむ。興戰死す。九月再び調し、繼明をして出でて、禦がしむ。兵未だ出でずして、軍已に城を圍む。芾慨然陣に登り、諸將と地を分て守る。民も亦老弱皆出て、保伍を結て之を助け、令せずして集る。十月、兵西壁を攻む。孝忠等奮戰す。芾矢石を冒して之を督す。城中矢盡き、故矢あるも皆羽敗る。芾命じて民間の羽扇、羽具を集む。又食鹽なきに苦しみ、芾庫中貯鹽の蓆を取り、之を焚きて鹽を取り、以て給す。傷者は躬ら之を撫勞し、激勵す。將士死傷相繼ぎ、血を啜つて殊死して戰ふ。來り招降するものあり、芾斬て以て徇ふ。十二月、城圍益々急なり。孝忠礮風に中りて起つ能はず。諸將泣て請て曰く、事急なり、吾等邦家の爲め死する素より其

の所獨り民を如何。帝罵て曰く、國家平時に於て厚く汝等を養ふ所以のものは今日の爲め也。汝等たゞ死守せよ。後言ふ者あらば吾先づ之を戮せんと。除夕元兵城に登らんとし、戦ひ少く卻く旋て蟻附して登る。衛守尹毅及其家人等自焚す。帝酒を命じて之を酌し、因て賓佐を會飲し、令を傳へ盡忠の字を手書して號となし、飲且に達す。諸賓佐出で、參議楊選池に赴て死す。帝熊湘閣に坐し、帳下沈忠を召し之に金を遺て曰く、吾が力竭きたり、分當に死すべし。吾家人亦俘に辱めらるべからず。汝盡く之を殺し而る後に我を殺せ。忠地に伏し叩頭し、醉するに能はざるを以てす。帝固く之を命ず。忠泣て諾し、酒を取て飲む。其家人盡く醉ふ乃ち悉く之を刃す。帝亦頸を延べて刃を受く。忠火を縱つて其居を焚き、家に還て其妻子を殺し復た火所に至り大に慟哭して自刎す。潭民之を聞き多く家を舉げて自盡し、城に虛非なく、林木に縊るゝもの累累相接す。繼明等城を以て降る。陳毅固を潰して閩に奔らんとし中道にして戦死す。事聞す、端明殿大學士を贈り、忠節と諡す。帝初め潭に至り其子裕孫出を遣り出して曰く、汝を存して以て奉祀する也と。其孫輔叔時亦親しく温に迎へられ皆死せざるを得。帝人となり剛介、暹を畏れず、事に臨んで

精敏姦猾も欺く能はず、強力人に過ぐ。且より事を治め暮に至て倦色なく、夜は概ね三鼓に至て始て休し、五鼓に復起きて事を視る。之を望めば慨然神明の如く、而かも賢を好み士を禮す。之に即けば温然一藝小善と雖亦拳拳之を獎勵す。平生官に居り極めて廉潔家に餘貨なし、また宋末の一人物也。

第二綱 明代

李東陽

李東陽 字は賓之、茶陵の人、父に従ひ京師に居る。四歳にして能く徑尺の書を作る。景帝召して之を試み甚だ喜び膝上に抱置し、果鈔を賜ふ。後兩ひ召されて尙書大義を講じ、命じて京學に入る。天順八年、年十八進士となり、庶吉士に選ばれ、編修を授け、侍講學士に累遷し、東宮講官に充つ。宏治五年、憲宗實錄成り、左庶士兼侍講學士より太常少卿に進む。五年早災あり言を求む。東陽孟子七篇大義を條摘し、附するに時政の得失を以てし、縷々數千言、之を上る。帝善しと稱す。禮部右侍郎兼侍講學士に擢て内閣に入り、誥敕を典る。八年本官を以て文淵閣に直し、機務に參與す。謝遷と同日の登用也。之を久うして太子少保、禮部尙書、兼文淵閣大學士に進む。

十七年關里廟を重建して成る命を奉じて往て祭り。還て上書していふ、臣使を奉して過行し、適ま亢旱に遇ふ、天津一路夏麥已に枯れ、秋禾未だ種ふず、舟を曳くも、の完衣なく、鋤を荷ふ者菜色あり、盜賊縱横し、青州尤も甚し、南來の人言ふ、江南浙東は尤甚しく、戸口消耗、軍伍空虚、庫に旬日の儲なく、官に累歳の俸を缺く、東南は財賦の出づる所にして一歳の饑已に此に至る、北地は皆瘠、素と積聚なし、今秋再び歉せば何を以て之に堪えん、事變の生ずる恐くは測るべからず、臣自ら其地を經過するにあらざれば、則ち久しく官曹に處し日に章疏を理すと雖、猶其詳を得ず、況んや陛下高く九重の上に居るをや、臣之を訪ふ、道路皆言ふ、貪官太だ衆く、國用經なし、差役頻煩にして、科派重疊、京城の土木繁く興り、軍士を供役し、財力を殫す、班操に遇ふ毎に寧ろ死すとも赴かず、勢家巨族往々郡縣を連ねて跋扈、猶已まらず、親藩の供億、二三十萬に至る、游手の徒名を皇親の僕從に託し、毎に關津都會に於て大に市肆を張り、商税を網羅す、國家都を北に建て給を東南に仰ぐ、商賈靡き散し、大非細故、更る有り、或は内官と偽り稱し、羣小を縱つて、關河を接弊し、官吏は奔駭錯愕し、窮民は所在に騷然たり、此又臣の目撃する所のもの、臣山東にありし

とき陛下に聞するに、災異を以てし、羣臣も亦言を盡して諱むなし、然れども詔旨頻に降り、章疏畢陳して、事内廷に關し、貴戚者動もすれば、掣肘をなす、累歲經時、寸效を見ず、誠に恐る、今日言ふ所、又虛文とならんを、乞ふ、從前の内外條奏をとり、詳に採擇を加へ、斷じて必ず行はんことをと、帝嘉嘆し、悉く所司に付す、是時帝屢閣臣を召して、政事を面議す、東陽、首輔劉健等と心を竭して、獻替す、明年劉健謝遷と同じく、願命を受く、武宗立ち、劉瑾入て、禮を司る、東陽、健遷と即日辭任す、旨あり、健遷を去つて、東陽獨り留まる、東陽之を恥とし、再び疏すれども、許されず、瑾既に志を得、務めて、縉紳を摧抑す、而して、焦芳、閣に入て、之を助け、老練忠直の士を虐げ、放逐殆ど盡く、東陽、悒悒として、志を得ず、而かも、亦委蛇禍を避く、而して、焦芳、其位己の上にあるを、嫉み、日夕之を瑾に構ふ、瑾兇暴日に甚しく、訕侮せざる所なし、而も東陽に對しては、猶陽に禮敬せり、凡そ瑾の爲す所の亂政、東陽其間を彌縫して、補救する所多し、劉健、謝遷、劉大夏、楊一清、及平江伯陳熊の輩、幾んど危禍を得、皆東陽によりて、解くを得たり、其潛移默奪、善類を保全したるは、天下陰に其庇を受くるも、而も氣節の士多く之を非とす、五年の秋、瑾誅せらる、東陽乃ち上疏し、自ら黜か

んと請ふ、帝之を慰留す。時に豹房の役興り、寺觀を禁中に建つ、東陽等上章切諫す。七年京師及山西、陝西、雲南、福建相繼て地震ふ、而して帝講筵を廢し、朝政を視ず、宗社を曠くし、祭享親まず、禁門の出入度なし、屢々上疏して極諫すれども聽かれず、九載秩滿ち、老疾を以て休を乞ひ、前後數々上り是に至て始めて許さる、敕して廩隸を給する故の如し、又四年にして卒す、年七十、太師を贈り、文正と謚す。

東陽父淳に事へて孝なり、初め翰林に官たりし時、嘗て飲酒し夜深に至る、父寢に就かず、寒を忍んで其歸るを待つ、此より終身外に夜飲せず、その文典雅流麗、朝廷の大著作多く、其手に出づ、篆隸書並に碑版、籀、翰、四裔に流播す、後進を獎成し、才彦を推挽す、士大夫其門に出づるもの悉く、粲然成就する所あり、明興てより以來、宰臣文章を以て摯紳に領袖たるもの楊士奇と李東陽とあるのみ、朝に立つ五十年、清節遷らず、既に政を罷めて家に居る、詩文書、篆を請ふ者、戸牖に填塞す、一日、夫人方に紙墨を進む、東陽倦色あり、夫人笑て曰く、今日客を設く案をして、魚菜無からしむべけんやと、乃ち欣然筆を命じ、時を移して罷む、其風藻概ね此の如し。

劉大夏

劉大夏 字は時雍、華容の人、年二十にして郷試第一に擧げらる、天順甲申の歲、進

士となり、庶吉士に選ばる、成化の初、自ら吏を試みんと請ふ、乃ち職方主事に叙す、郎中に轉じ、兵事を明習し、宿弊を一掃せり、奏する所多く、上意に當り、尙書之に倚頼する、股肱の如し、福建右參政に遷り、政蹟を以て聞ゆ、宏治二年、廣東右布政使に遷り、田州泗城靖からず、大夏往て諭し、遂に命に順ふ、後山賊起り、檄を承けて討征す、令して曰、賊を獲るも必ず生還せんと、乃ち生を得るもの過半、改めて浙江に移る、六年春、黄河決す、秋、右副都御史に擢んじ、以て治水の事を行はしむ、乃ち黃陵岡より浚し、賈魯河をも復浚す、孫家渡、四府營の上流は水勢を分ちて、長堤を築き、昨城に起り、東明、長垣を歴て、徐州に抵る、三百六十里に亘り、水大に治る、孝宗之を嘉し、譽書、優美を賜ひ、召して左都御史となす、戸部左侍郎を歴、左僉都御史を兼ね、往て理宣府を理む、兵餉初め塞り、上糶必ず粟千石、芻萬束を買ひ、乃ち納を告ぐるを得、故を以て中官の武臣の家利權を操るを得、大夏令して芻粟ある者は百束十石以上より皆許す、勢家利をとらんと欲するも得る所なし、兩月ならずして積儲充實し、邊人其利を蒙る、明年秋、三疏疾を以て歸臥し、草堂を東山下に築き、讀書して居る、越て二年、廷臣交々薦め起て、右都御史となり、兩廣の軍務を總制し、吏治を清

め供億を捐て内外鎮守官の私役を禁ず、軍士盜賊之がために衰止せり、十五年兵部尙書に拜す、會々南京、鳳陽、大風木を抜き、河南、湖廣大水に苦しむ、京師亦霪雨沈陰に艱む、大夏上書請ふて曰く、凡そ事祖宗の舊にあらずして民を害するものは悉く釐革せんと、帝有司に命し實に據て以て開せしむ、乃ち廷臣を會し十六事を條上す、皆權倖に便ならざる所のもの、相與に力めて之を沮み、帝決する能はず、大夏等再議して旨を得、制下り、舉朝歡悦す、再ひ兵政の十害を陳へ、南北軍轉曹、番上の苦及邊軍の困敝、邊將侵尅の狀を極言す、乃ち詔を下して大同小警を嚴禁す、帝中官苗達の言を用ひ將に出師せんとす、大夏閣臣劉健等を諫めて之を止む、武宗嗣て立つ、請ふて傳奉の武臣六百八十三人を汰す、正徳元年鎮守中官董讓等の貪殘を按治せんと乞ふ、帝悦びず、大夏自ら言の用ひられざるを知り、數々上章して骸骨を乞ふ、其年五月詔して太子太保を加へ、廩隸を給する制の如し、大夏忠誠懇篤、孝宗の知遇を受け身を忘れて國に徇ひ、權倖を裁抑する所多し、嘗て奏章ある毎に乃、劉瑾の惡む所となる、劉宇亦大夏を憾み、遂に焦芳と瑾に譖し、大夏の家を藉せんと欲し、三年九月田州岑猛の事に假り、逮捕獄に繋ぐ、瑾律を激

變して以て死刑に坐せんと欲す、都御史屠滸持して可かず、李東陽爲めに婉解す、瑾亦大夏の家實に貧なるを思ひ、乃ち肅州を成らしむ、大夏年已に七十三、布衣徒歩して大明門下を過ぎ、叩首して去る、觀る者大息泣下る、父老筐を攜へ、食を送り、至る所爲に市を罷め、焚香して劉尙書の生還を祝す、戍所に至る頃、諸司瑾を憚り、餽問を絶つ、儒學生徒之に食を餽る、團操に遇へは輒ち、戈を荷ひ伍に就く、所司固く辭す、大夏曰く固より軍役に當るべき也と、五年夏赦されて歸り、瑾誅せらるるに及て致仕す、歸て子孫を教へ、方田食を謀り、稍贏して之を故舊親族に散す、預しめ自ら墳志を爲りて曰く無使人飾美、懷愧地下也と、年八十一にして卒し、太保を贈り、忠宣と諡す、

楊一清

楊一清 字は應龍、本と雲南安寧の人、父景官化州の同知たり、家を巴陵に徙す、一清少にして文を能くし、奇童を以て薦められ、成化壬辰の進士に登第す、山西按察僉事を歴、副使を以て陝西督學たり、宏治十五年左副都御史に擢んじ、陝西の馬政を督理す、十七年河套急を告ぐ、命じて陝西に巡撫たらしめ、卒を選ひ兵を練り、紅古等の城を創しめ、以て固原を援く、時に劉瑾、一清の己れに附せざるを憾み、一清

を誣めるに邊費を冒破するを以てし逮へて錦衣獄に下す、大學士李東陽、王鏊力救して解かるゝを得、乃ち致仕して安化に歸る、王寘錡反す、詔して一清を起こし軍務を總制せしむ、太監張永と共に師を出し、寘錡擒に就く、又永と計りて劉瑾を誅す、戸部尙書に拜し、少傅を加ふ、尋て致仕し歸る、世宗世子の時、獻王嘗て言ふ、楚に三傑あり、劉大夏、李東陽、及一清也と、世宗位を嗣ぎ、詔して兵部尙書を以て三邊の軍務を總制せしむ、故に相にして邊に行くは一清より治まる、後復た入閣す、上方に勵精治を圖り、中外の事一に一清に咨委す、晚年張璁、桂萼の軋する所となり、恩禮を獲すして終る、然れども其才一時に並びなし、或は之を姚崇に比す、卒して文襄と謚し、太保を贈る、

第三編 清朝

李星沅

李星沅 字は石梧、湘陰の人也、父は疇字は壽田、優貢生、桂東縣の訓導たり、星沅年十二、童試に應じて聖童の譽あり、道光壬辰の進士にして編修を授けられ、甲午四川の郷試を典る、遂に旋て廣東に督學たり、戊戌漢中府の知府を授けられ、郡に抵

るの日、堂に座し直ちに牘を受け立るに、斷す、匝月にして頤聲大に起る、河南糧儲道に擢てられ、庚子の歲、陝西按察使を授け、四川、江蘇に調せらる、江西布政使に遷り、仍ほ江蘇に調し、臬篆を兼ね、壬寅の歲、陝西巡撫に擢てらる、時に朝議下り、陝省當五、當十の錢を鑄る、星沅情弊の事を疏陳して中止す、十年ならずして各路改鑄し、重錢の圓法遂に止む、既にして冤獄を斷し、優叙を得、乙巳の歲、江蘇を調撫す、漕務の積弊を疏陳し、大小戸の名目を革む、疏出づ、吳民之を傳誦す、會々緬寧の回匪靖からず、雲貴總督に擢し、往て師を督せしむ、首として騰越の鎮將某を効し、別に檄して銳師兜勦し、三月ならずして緬境平らく、太子太保を加へ、花翎を賞戴す、移て兩江を督し、河督を兼攝す、兩江の財賦は天下に甲たり、加ふるに鹽政、漕運、河道の重任を以てす、實に民命國帑の繫がる所かり、時に部議、南漕を改折せんとす、星沅力めて持し、事寢むを得たり、又水師を整飾し、鹽課を清め、河員を飭して各工所に駐り、萃り處るを得ざらしめ、江浦の政令を一新す、星沅寒素に起り、十年封疆の職を踐み、以て民困を蘇息す、事に遇へば、振迅夕に籌して且に發す、筭縮する所無く、河、精鉢慮少しも衰へず、強陽を病み、己酉四月休を乞、己年を踰へて、宣宗升遐す、

疾を興して梓宮に謁し慟哭起つ能はず、文宗召して病を詢ひ、母衰へ且多疾なるを以て歸養を乞ひ許さる、未だ幾ならずして粵西の盜起り、金田の勢甚た猖獗也、侯官林則徐軍に卒す、乃ち星沅を起して欽差大臣となす、疏を拜し、即ち道に就き桂林に抵り、兵を調へ餉を集む、襄事者の意見岐出し、累月にして功無く、憤激宿疾を發し、密疏帥を易へんことを請ふ、猶強起、期を刻して將に出巡せんとし、卒に支へず、乃遺疏を口授して曰く、賊を平くる能はず、之を不忠といひ、養を終る能はず、之を不孝といふ、軍中の宿將に及ひては、乃ち惟た向榮倚るへし等の語ありと、之をいふて再びし、遂に卒す、時に咸豐元年四月十二日也、年五十有五、詔して優卹し、文恭と謚す、

陳鵬年

陳鵬年、字は滄洲、湘潭の人生る、時母大烏の青衣童子を挾んで來ると夢み、故に名く、少にして異才を負ふ、康熙辛未の進士、浙江西安縣を知す、兵燹後にして、小民流離轉徙、豪右多く兼并す、鵬年屢畝丈勘して、逋賦を除かんと請ふ、是より流民業に復す、烈婦徐氏か十載の沈寃を雪き、首惡を誅し、又惡風を匡正し、地利を開拓し、縣大に治る、山陽に調し、復關吏の苛征を釐革し、民をして務て力田せしめ、汚俗

悉く改まる、遷して海州を知し、旨を奉して山左の饑を賑し、法を立て、散給し、勺命皆窮民に逮ふ、江寧知府に進む、微行して郡衙に至り、重斂の弊を知り、亟かに之を革む、江寧に惡風多し、鵬年禮を以て其俗を變し、數々寃獄を平らけ、盜魁を擒治し、浮浪を捕役し、之を法に置く、後上官に忤ふを以て落職せしとき、士民數萬人號泣して官に詣り、陳太守に代つて罪を受けん事を請ひ、薪米酒炙を致すもの趾相接す、詔して其罪を赦し、武英殿に入りて書を修めしむ、又出て、蘇州府を知す、歲饑疫に値ひ、力請して發米平糶し、躬ら方藥を製し、小舟に駕して村墅を歷巡し、口を計りて之を授け、且量りて錢米を給す、至る所疫癘之全治するもの無數、又貨を捐て、城河を浚へ、匝月ならずして、舊獄數百案を一清し、咸情實を得、嘗て出て、維亭に至る、水滙を浮ふるを見、心動きて探視し、無名の屍を獲たり、乃ち窮治して、姦殺の狀を得、男婦皆法に伏す、洞庭の山豪子を殺して屍を匿す、人知る莫し、鵬年親ら往き發掘して之を得、豪を獄に斃す、因て誣劾せられ、鎮江に錮せらる、士民奔走呼籲すること、江寧府にある時の如し、特旨して解錮し、復武英殿に入て書を修め、出て、弼昌道の副使を署し、豪右跡を斂む命して、張鵬翮と同じく河工を辦理

せしむ時に河武陟に決す、鵬年請て河を廣武山下に開きて南趨せしむ、又疏し下流に河を引て以て水勢を殺かんと請ひ之を許す、命して河道總督を署し、總漕の事を兼攝せしむ、會ま運河淺澀して糧艘艱阻す、幹吏を遣り、疏報を待たずして庫銀を發し、丁壯を募り、漕運乃ち滞り無し、又奏して王家溝官莊峪を開き、河を引く、晨夕工を鳩め、親ら河干に露次し、或は終日食はす、勞を以て疾を得、雍正元年河道總督を授く、疾篤きに及び、恩賚稠疊、幾ならずして工所に卒す、上聞て震悼し、其母を一品夫人に封し、卹蔭を予へ、金二千兩を賜ひ治喪せしむ、恪勤と諡し、賢良祠に祀る、明年性介特然、人と交る極めて和易、喜んで後進を引汲す、博學にして詩文書法に工なり、人其片紙を得るも之を珍藏す、

胡林翼

胡林翼 字は潤芝、益陽縣の人、幼時父達源に隨ひ京師に居り、才氣英發、嶄然頭角を抜く、道光十六年進士となり、庶吉士に選ばれ、編修を授けられ、江南に典試す、事に坐して降調せられ、明年父の憂に丁り、闋に服す、又起て内閣中書となり、知府に遷り、安順府を署す、巨盜三百餘人を除き、義學十數區を修め、積案三百餘牘を清む、節孝を探採すると八百餘人、會ま黃平革夷等の處の苗民亂る、兵を帶び往て勦し

其案を平らぐ、功を叙し、知府に任ぜられ、花翎を賞戴す、後道員となり、尋て思南府を署し、咸豐元年蔡平に補す、二年檄を奉じて烏沙古州八寨の逆苗を勦辨し、之を平らぐ、四年貴東道に補す、雲貴總督吳文鎔改めて兩湖を督し、疏して林翼を調す、遂に黔勇千人を以て行く、會々賊湘潭を陥れ、湖南巡撫駱秉章林翼を調回して省を援はしむ、時に安化の土匪黃國旭亂をなす計つて之を擒へ、常德の竄賊を追勦す、四川按察使に擢ぜられ、湖南按察使を調す、時に曾國藩已に武漢を克復し、進んで九江を攻め、林翼に檄して會剿せしむ、五年湖督楊滯の師黃梅に潰ゆ、林翼回つて武昌を援ひ、沌口に次し、湖北布政使に擢せらる、而して武昌又陥り、營を金口に退き、遂に命を奉し、湖北巡撫を處理す、師參山に潰ゆ、是年秋羅澤南江西より來り、援け、軍を金口に會して水陸進攻の策を議す、林翼は中路より省城の南に出て堤上に營し、澤南は東路より出て、洪山に營し、總督官文は吉林騎兵を以て衆軍を合し、北岸に營す、是より餉道日に通し、勢漸く振ふ、六月羅澤南軍に卒し、李續賓代て其衆を領す、七月大に江甯の援賊を破り、追逐百里に到る、會々襄陽の土匪連りに樊城穀城等の縣を陥れ、川匪を合して宜昌を陥る、林翼將を遣りて之を勦平し、十

一月武昌を克復す、頭品頂戴を賞し、巡撫を授く、遂に兵を分て武黃の各屬縣を收復す、時に續賓の全軍九江を圍み、林翼自ら武昌に駐して調度し、慎て賢能を選び、民に蘇息を與ふ、湖北の漕務久しく敝し、官民交も困む、乃ち上下の漕規を裁革し、連疏入告し、定章を酌減す、是に於て民輸を樂しみ、軍餉頼て以て匱からざるを得、八年四月九江破れ、賊萬餘を殲し、逆首林啓榮を斬る、捷を上り、太子少保銜を加ふ、李續賓此より太湖、潛山、桐城を規復し、都興阿と相犄角す、而して林翼母憂を以て歸り、十月李續賓の師三河鎮に潰ゆ、都興阿、官文具疎し、力請して復林翼を起す、林翼信を聞て躍起し、痛哭武昌に啓行す、未だ武昌に入らずして、黃州に抵る、各軍林翼の至るをさゝ心稍定まる、九年石達開湖南を犯し、寶慶を圍む、林翼李續賓を遣り、擊て之を走らす、官文疏して請ふ、林翼、曾國藩と力を併せて皖を圍り、乃ち四路進攻の策を定めんと、或は林翼に請ふ、黃州に駐まり、境を出つる毋れ、可かすして曰く、某討賊のために出つ、土を守るにあらざる也、敵に赴かされは、則ち名無しと、十月營を英山に移す、十年春大に賊を小池驛に破り、遂に潛山、太湖を復す、是時に當り曾國藩、兩江を總督し、弟國荃に命して安慶を圍攻せしめ、將軍都興阿亦旨を

奉じ、淮陽を赴き、援く、兵餉は皆林翼に給を取る也、十月多隆阿、李續賓大に賊を掛車河に破る、賊路を分て西犯す、林翼賊の意皖の圍を解くにあるを策し、乃ち續賓を遣り、一軍を以て回援せしめ、皖を攻むこと益々急也、十一年八月遂に安慶の諸州縣を克復し、賊先後に殄滅して、楚境肅清す、曾國藩上疏功を林翼に推す、太子少保銜並に騎都尉の世職を賞加す、林翼積勞血を嘔き、兼ねて文宗の升遐をさゝ病益々劇し、二十六日武昌に卒す、年五十、上聞て震悼し、總督銜を追贈し、總督の例に照して卹を賜ひ、賢良祠に入祀す、文忠と謚し、湖北の省城及湖南の原籍に專祠を建立せしめ、子子助に舉人を賞給す

林翼、銀鉅を肩任し、例文を以て拘束せず、其滅漕革弊、皆手づから擘畫し、職の繁簡地の肥瘠に準して之を裁制し、益陽私家の穀、皆出して以て軍を濟ふ、尤も心を人才に留め、千里招致、其餽遺を厚うし、其宜しきを度りて之を用ゆ、人敢て欺く莫く亦輕進する能はず、曾て將才を論して、大體に明かに進退の機宜を知るを以て上となし、陣法を知るもの之に次ぎ、敢勇なるもの又之に次ぐとす、又曰く、將の露なる者は疲れざるなく、將の貪なる者は怯ならざるなしと、平生善く諸將を調護す、

羅澤南

當時會、左と並稱して湖南出身の三傑と爲せり

羅澤南。字は仲嶽、羅山と號す。湘郷の人。咸豐元年廩生を以て擧げらる。二年髮賊長沙を犯す。澤南諸生を率ゐて起ち團練を力辨す。時に曾國藩命を奉して團防を督治し、衡州に駐まる。澤南湘勇を以て麾下に隸し、草市及桂東の土匪を勦討す。三年夏江西を援け、泰和、安福に克ち師を還して永興、油榨等の股匪を平らぐ。四年衡州に回り再び草市の土匪を平らぐ。初め澤南帶ふる所の湘中營僅に三百六十人なりしが此時之を増して五百人となす。會々賊鄂より上竄し湘潭を陥れ、既にして敗れて岳州に通る。時に楚軍水陸東下之を攻め、澤南獨り大橋を扼して賊衝に當り連戰皆捷ち、岳州を復し、進んで江夏に駐す。曾國藩と紙坊に會して進取を商る。澤南建議して提督塔齊布の軍を洪山に出でしめ自ら請ふて花園濱江の堅壘を攻め水師と並に之を蹙む。七日にして賊城を棄て、走り、武漢皆復す。先に訓導より知府に擢せられ花翎を賞戴せしか是に、至て浙江甯紹台道に補し、田家鎮半壁山の捷を以て按察使銜を加へ、又廣濟、黃梅を克復し、葉普鏗、額巴圖魯を賞せらる。既にして南に渡り九江を攻め湖口を覘す、而して北岸の諸軍利を失ひ、賊小池

口に據り連りに黃廣の諸縣を陥り、武漢復失す。五年曾國藩南昌に駐まり、撤して饒州を援はしむ。是に於て、弋陽、廣信、浮梁、義甯の諸城次を以て克復す。布政使銜を加へ、特に封典を給ひ、並に珍物を賜ふ。澤南義甯に克つの後、東南の大局を打算し、先づ崇通を平らげ、武漢を復して後、始めて九江下すべしとし、曾國藩に上書す。因て奏して回援せしむ。過ぐる所の通城、崇陽、蒲圻、咸甯皆之を復す。遂に武昌に達し、巡撫胡林翼と路を分つて進攻し、附城の賊壘を鏟除して殆ど盡く。一夕勝に乗じて賊を追ひ、直ちに城下に薄り、霧中に搏戰して額に槍傷を受け、六年三月八日軍に卒す。享年五十。事聞す、巡撫の例に照して卹を議し、忠節と諡し、湖北、湖南、江西三省に專祠を建つ。同治元年祭一壇を賜ふ。三年金陵を克復す、特旨一等雲騎尉を加ふ。澤南篤志好學、時務に通達す。軍にあつて毅然、賊を滅すを以て自ら任じ、陣に臨みては堅忍を以て勝を制し、著述する所亦少からず。澤南の門人先後難に殉するもの多し。王鑫、李續賓、李續宜等の諸俊英皆其門に出づ。著して羅山全集あり。澤南經義に達く、其德行は品性と共に遠く時流に超越せり。

曾國藩の羅忠節公神道碑銘に曰く、公少就學。王父屢典衣市米。節縮於家。專餉於塾。

年十九。即藉謀徒取貨自給。喪其母。又喪其兄。旋又喪其父。十年之中。連遭期功之戚。十有一嘗。以試罷徒。步夜歸。家人以歲饑。不能具食。妻以連哭。三子喪。明公益自刻厲。不愛門庭。多故。而愛所學。不能拔俗。而入聖。不恥生事之艱。而恥無術以濟天下。其後年逾三十。乃補學官。附生。逾四十。乃以廩生舉孝廉。方正。假館四方。窮年汲汲。與其徒講論。濂洛關閩之緒。瘖口焦思。大暢厥旨。未幾。兵事起。湘中書生多拯大難。立勳名。大率公弟子也。』
 』と又曰く。公在軍。四載。論數省安危。皆視爲一家骨肉之事。與其所注西銘之指相符。其臨陣審固。乃發。亦本主靜察幾之說。而行軍好相度山川脈絡。又其講求輿圖之效。君子是以知公之功所蓄積者夙也。非天幸也。國藩深く澤南を知り。少かりしより。學行を以て相助め。又金革に相從ひ。又其子女と婚姻を通せり。墓道に銘して曰

漸車之澗 積潦縱橫 崇朝即澗 卷勢收聲 大江西來
 其源萬里 澤溥寰區 不矜厥美 無本者竭 有本者昌
 羅公淵默 所蓄孔長 洞徹天人 潛牖往聖 一物未康
 終虧吾性 提師苦戰 荆楊二州 斧彼凶豎 爲民復讐
 矯々學徒 朝出塵兵 暮歸講道 洛閩之術 近世所捐

姚江事業 或邁前賢 公愼其趨 既辨其詭 仍立豐功
 一雪斯耻 大本內植 偉績外充 慈謂豪傑 百世可宗

以て澤南の爲人を見るべし。嗚呼澤南も亦人傑なる哉

王

王 字は樸山。湘郷の人。諸生也。母疽を患ふ。口膿血を吮ひ。舌之を舐む。幼時父其志を探るに語を出せは。輒ち人を驚せり。父曰。此子異日其れ將に國家の用をなさんとする乎と。咸豐二年。髮賊長沙を犯す。知縣朱孫詒團練を舉行す。益精壯の士を募り。戰陣を教へ。號して湘勇といふ。八月營を馬北舖に進む。賊敢て犯さず。三年檄して郴州の竄匪を剿し。行て桂東に抵る。江西龍泉。上猶諸縣の賊甚た熾なり。と聞き勇を率ゐて馳せ撃ち。次第に剪滅す。師還る。復興甯の股匪を剿平す。四年進て湖北を規し。蒲圻に次す。賊大に至り。羊樓峒に戰ひて利を失し。退て岳州を保つ。岳城殘破守るべからず。賊遂に湘潭に上竄す。水陸の官軍。湘潭に克つに及び。益潰散を收集して。賊を雲湖橋に撃ち。軍以て再び振ふ。時に髮賊衡。永。郴。桂の閉を分竄し。賊蹤あらざる處無し。益所部を率ゐて進勦し。搜て廣西富川縣印を永明に獲。僞王胡其祿を東安に擒へ。逆首何祿を郴州に斬り。朱洪英の家を連州に殲し。陳金剛を陽

山に破り、二年にして諸城皆復す、賊其威を懼り呼て王老虎といひ相避遠するに至る、六年湖北を援ふ時に官軍武昌を圍攻して而かも賊援絶えず、竇乃ち軍を上圻、通山四縣に勝つ、鄂軍以て力を併せて攻撃するを得、遂に武昌を復す、是より先、竇積功により道員に擢せられ花翎を賞戴し、竝に特に封典を給ふ、是に至て湖北に留まり按察使銜を加ふ、七年江西を援く時に賊吉安に據る、我軍之を圍むと急也、賊渠衆を悉して來援す、竇臨江より師を進め大に之を水東に破り、僞平東王を斬り、再ひ之を沙溪に破り、胡壽階を斬る、已に賊を追ふて東し、連りに之を樟都、廣昌に敗り、其頭目百人を斬る、會々派遣せる別軍已に樂安を復し、遂に永豐に駐る、七月楊逆宜黃より來り、石逆崇仁より來り、合して樂安を攻む、乃ち兵を分て永豐を守らしめ、雨を冒して疾馳し兵を縱つて大に戰ひ、連日皆捷ち賊大に潰ゆ、竇贛江に入りしより九十月にして大捷十二、而して此戰功はその最なるもの也、是に於て江西、湖南の巡撫交々奏して其功を上る、優旨褒獎し、愛什蘭巴圖魯を賞す、積勞を以て疾を成し、八月樂安に卒す、年三十三、事聞す、詔して布政使の例により

卹を議す、尋て内閣學士銜を贈り、壯武と諡す、湖南江西各專祠を建て、同治元年祭一壇を賜ふ、

竇少にして羅澤南に従て遊び、志正學にあり、嘗て出山の太だ蚤きを以て憾となし、軍中偶暇あれば即ち讀書す、亦時に軍士を呼んで大義を講明し、時人儒將と稱す、而して性極めて機警、用兵神の如く能く少を以て衆に勝つ、岳州の挫後、益々持重し、營制最も嚴なり、其麾下後多く名將となり、皆其成法を守り、其營を名けて老湘營といふ、髮賊の亂に際して人物の輩出せる湖南省より多きはなく、而して湖南省中又湘郷より多きはなし、會國藩、羅澤南は實に其二大明星にして、自餘幾多の俊傑が或は鋒鏑に、或は積勞に斃れて中興の後僅に什一を存せざりしは洵に惜むべき哉

李績賓

李績賓 字は廻菴、湘郷の人、父は登勝、貢生也、行誼に敦し、二子軍中にあり、毎に書を寄せて必ず忠義を勤むべきをいふ、咸豐三年羅澤南江西を赴援す、績賓は其弟子也、父の命を奉じ往て之に従ひ、湘右營を領す、遂に澤南と同じく吉安の圍を解き、泰和、安福に克ち、還て永興を復す、明年岳州を復し、轉戦して北行、連りに蒲圻、崇

陽成寧を下し、八月武漢を復す。十月大に田家鎮に戰ふ。鎮の南岸を半壁山となす。山峻にして水駛く。賊舟を布て江を蔽ひ貫くに鐵纜を以てし、勢張ること甚し。我軍怯にして逃ぐるものあり。乃ち手つから三人を刃して以て徇へ。次日連りに賊壘を破り、水師と合して之を蹙め、其纜を斷ち其巢を焚く。是より先き功を累て知府に至り、花翎を賞戴す。是に至て、墊勇巴圖魯を賞し、安慶知府を授く。初め陸師南北に分れて進勦し、鄂軍は北岸に屯し、湘軍は南岸に屯し、南軍は屢捷つて而かも北軍振はず。乃ち軍を引て北渡し、廣濟黃梅を掃蕩して南岸に復し、九江を攻む。十二月水師利を失ひ、南軍潯陽に孤立す。賊北岸の空虚に乗じ、衆を悉くして上竄し、武漢再び陷る。五年二月江西警を告げ、羅澤南と同じく九江より馳せ援ひ、連りに弋陽、廣信、浮梁、義寧の四城に克ち、八月武漢を回援して連りに通、崇、蒲、咸の四縣を復し、遂に武昌に達す。六年三月羅澤南卒す。命を奉じて湘中營を兼統し、督攻益々急に遂に保安門外の賊壘を踏平し、又援賊石達開を魯家港に敗る。是より城賊堅閉屈せず。乃ち長濠を掘り、江水を灌き、以て之を困しむ。十一日再び武漢を復し、按察使となる。遂に九江を攻むるに、城堅くして久しく下らず。七年正月亦濠を掘つ

て之を困め、又兵を分て安廬の援賊を迎撃し、連りに小池口、湖口、梅家洲等の偽賊を破り、浙江布政使を授く。八年四月九江に克ち、黃馬褂を賞穿し、巡撫銜を加へ、專摺事を奏するを許す。是に於て浙人疏請す。續賓浙に赴き、以て浙難を救はん事を而して湖北巡撫胡林翼疏して之を留め、以て皖を圍り、鄂を固めんと請ふ。詔して之を許す。乃ち其弟續宜を留めて湖北に駐軍せしめ、八月整旅して皖に入り、連りに潛太、桐、舒の四縣を下し、進んで廬州に趨く。九月師三河鎮に次す。所部僅に五千人。十月二日賊の九壘を破る。忽ち逆首陳玉成等道を分つて來援し、衆十餘萬。初十日我軍迎へ撃ち、竟自力戰す。賊四面合圍して軍遂に潰ゆ。日暮賊營を攻むる益々急也。續賓事の爲す可からざるを度り、所持の廷旨及批摺を取つて之を焚く。曰く宸翰をして賊手に入らしむべからずと、夜半壁を開き、怒馬陣を陥れて之に死す。疏入る。上震悼し、手詔して曰く詳覽奏牘。不覺隕涕。惜我良將。不克令終。尙冀忠靈不昧。他年生申甫以佐予也。と總督を贈り、總督の例に照して卹を議し、忠武と諡し、湖北、江西、安徽、湖南各專祠を建てしむ。同治元年祭一壇を賜ふ。三年江寧を克復し、二車都尉を賞す。

等輕績賓既に九江に克ち、假を乞ふて親を省せんことを思ふ。廬州救援の爲めを以て果さず、營を抜くに及び、胡林翼の手を握つて痛哭して曰く、吾れ復父母に見ゆるに由なしと、左右皆泣く。其卒するや、舒城の難民千里を遠しとせず、來りて忠骨を送りしといふ。蓋し至誠日を貫くものか。

曾國華

曾國華、字は溫甫、湘郷の人。曾國藩の弟、監生たり。國藩等五人の弟兄中最も偉器なりしと傳へらる。惜い哉、早く戰亂に死して大器を完成するに由なかりき。咸豐六年、髮賊江西を犯し、連りに六郡を陷る。兄國藩師を督して賊を剿し、國華をして援を湖北巡撫胡林翼に乞はしめ、奏して湘軍を帥ゐて赴き、援けしむ。時に江西湖南、湖北と驛路梗塞せり、師行を啓くや、賊又咸寧、蒲圻に竄入して、援軍を阻遏す。國華沿路迎へ撃つて、皆之を破り、道を萬載に取り、攻めて上高、新昌等の縣に克ち、并に陰岡嶺、傅家墟の踞賊を分剿して、驛道始めて通ず。遂に瑞州を圍み、困むるに長壕を以てし、其城を復す。先きに功を以て同知に擢せられ、藍翎を賞戴す。是に至て、當事其功を上らんと欲す。丁艱を以て辭せり。八年、李績賓、旨を奉して鄂中に赴き、軍務を襄理す。國華同じく其幕に在り、績賓の命を奉じて皖に赴くに及び、遂に借

に行く尋て、潛、太桐、舒を復し、進んで廬州に趨き、軍三河鎮に次す。鎮は舒、廬の衝要に當り、賊偽城を築くと一、堅壘を築くこと九、皆之を抜く。會々大股の髮逆、捻匪を糾合して來り、援け、衆十餘萬、直ちに金牛鎮に走て、我後路を抄む。我軍僅に五千人、各路の援兵未だ至らずして、賊已に逼る。迎へて之を撃ち、賊稍卻く、忽ち逆匪霧に乘じて左路より來り、撲つに會ひ、腹背敵を受け、遂に奈何ともなす。能はず、績賓と同じく難に殉す。疏入る。道員を贈り、道員の例に照し、優に従て、卹を議し、太常寺卿を贈り、感烈と謚す。特に父母に封典を給す。同治三年、江南平らぎ、祭一壇を賜ひ、雲騎尉の世職を賞加す。

曾國藩の母弟、溫甫、哀詞に曰く、溫甫既出嗣叔父、以咸豐八年二月、降服期滿、復出抵李君績賓、廵軍中。李君與溫甫爲婚姻、益相與講求戎政。晨夕諮議。是時九江新破、強悍深根之寇、一掃而絕。李君威名聞天下。又克麻城、蹙黃安、喋血皖中。連下太湖、潛山、桐城、舒城、四縣、席全盛之勢。人人自以無前。師銳甚。溫甫獨以爲常勝之家氣、將竭矣。難可深恃。時時與李君深語、悚切、以警其下。亦以書告予、卬上。竟以十月十日軍敗。後李君殉難。廬江三河鎮、嗚呼痛哉。曩吾弟以新集之師、千里赴援、摧江西十萬之賊、而無所頓、今

以皖北百勝之軍。萃良將勁卒。四海所仰望者。而壹覆之。而吾弟適丁其厄。豈所謂命耶。常勝之不足深恃。吾弟之智既及之矣。而不肯退師以圖全營壘。以十三夜被陷。而吾弟與李君。以初十之夕。併命同殉。又不肯少待以圖免。豈所謂知命者耶。遂綴詞哭之。詞曰。

曠曠我祖。山立絕倫。有蓄不施。篤生哲人。我君爲長。
魯國一儒。仲父早世。有季不孤。恭惟先德。稼穡詩書。
小子無狀。席此慶餘。粲粲諸弟。鴈行以隨。吾詩有云。
午君最奇。挾纓千人。百不一售。彼蟲穢者。乃居吾右。
抑塞不伸。發狂大叫。雜以嘲談。萬花齊笑。世不吾與。
吾不世許。自謂吾虎。世乘如鼠。相舛相背。逝將去女。
一朝奮發。仗劍東行。提師五千。往從阿兄。何堅不破。
何勁不摧。躍入章門。無害無災。墮旆鼓角。號令風雷。
吳天不弔。鮮民銜哀。見星西奔。三子歸來。弟後季父。
降服以禮。匪歲告闕。靡念苞杞。出陪戎幄。匪辛伊李。
既克滹陽。雄師北邁。剗潛剗桐。羣符是曠。豈謂一蹶。

震驚兩戒。李旣山頹。第乃梁埃。覆我湘人。君子六千。
命耶數耶。何辜於天。我奉簡書。馳驅嶺嶠。江北江南。
夢魂環繞。卯慟抵昏。酉悲達曉。莽莽舒廣。羣凶所窟。
積骸成岳。孰辨弟骨。骨不可收。魂不可招。吟糜廢壘。
雪漬風飄。生也何雄。死也何苦。我實負弟。茹恨終古。
と哀切悽慘の情多讀に堪へず所謂情の弊にして賊の至れるもの乎。
李續宜 字は希菴。湘郷の人。續賓の弟也。少にして兄續賓と共に羅澤南に従て游
ひ。遂に隨て同じく江西を援ひ。功を以て同知に擢せられ。花翎を賞戴す。尋て湖北
を援け。武漢に克ち。知府となる。咸豐七年。鄂撫胡林翼軍を黃州に駐むるに當り。續
宜と騎を並へて形勢を周覽し。凡そ蕪黃の各賊壘。六戰して皆之を破る。伊勒達蒙
額巴圖魯を賞す。旣に小池口に克ち。又湖口の援賊を擊退し。并に黃安。麻城の竄賊
を剿す。而して續賓乃ち力を專にして九江を攻め之に克つことを得たり。會々廬
州警を告く。胡林翼奏請し。續賓を以て皖北を廓請し。續宜を留めて以て楚疆を固
む。未だ幾ならずして續賓三河の難に殉ず。續宜潰卒を拊循し。諸將失律の罪を正

して其良を選用し、湘軍復振ふ、九年逆倉石達開湖南に竄し、寶慶を圍む、賊衆數十萬時に續宜新に荆宜施道の命を奉じ、鄂より赴援し、軍を資西に進め、四戰して圍を解く、師還て安慶の青草壩に駐まり、大に逆首陳玉成を挂車河に敗り、安徽按察使に擢せらる、又懷桐を剿して二品頂戴を加へ、安徽巡撫に晉む、時に大軍安慶を包圍して援賊は輒ち鄂に竄し、以て我師を分綴す、因て奏請して武昌を援はんとし、未だ皖に赴くに遑あらず、馳せ至る、比、賊已に黃州、德府の兩府五縣を陥れ、又連りに興國、大冶等を陥る、七月を閱して始て次第に掃除するを得、安慶亦因て以て克復せり、功を上りて黃馬褂を賞穿す、會々胡林翼任に卒し、湖北巡撫を調補すること、なり、移て安徽を撫す、苗沛霖の叛服常無きを以て剿撫の機宜を詢ふに覆疏して曰く、宜しく明かに其罪を正して其黨を寛にすべし、孤立必ず禽と成らんと朝廷之を懸とす、初め安慶に臨み、繼て六安に駐し、尋て潁州を救ひ、寔邱を復し、各墟陰を撫し、捻黨を散す、同治元年命して欽差大臣となす、母の憂に丁るを以て未だ事に任せず、仍ち命して巡撫を署理せしむ、三疏陳謝して乃ち給暇を得、喪を治む、既に里に歸り、先後六次詔を奉して起復を促がす、續宜哀慕嬰疾を以て、懇ろ

に辭職を乞ひ、久しくして乃ち之を許す、二年十月家に卒す、疏入る、總督の例に照して卹を議し、太子少保を贈り、勇毅と謚す、湖南、湖北、安徽及資慶府、湘鄉縣各專祠を建つ、湘鄉出身の將士世曾、李二家の昆弟を稱す、

劉松山

劉松山 字は壽卿、湘郷の人、咸豐間湘軍に従て楚、粵、江、皖に轉戦し、向ふ所皆捷つ、景德鎮の役我軍勝に乗して賊を追ひ、浮梁に至り、將に半ば渡らんとするに方り賊忽ち回撲、勢甚だ危し、松山東橋に力戦し、以て賊鋒を遏む、賊遁れ、師乃ち濟る、尋て徽州を攻めしに賊夜、營を撲ち、諸軍驚き潰ゆ、松山獨り陣を整へて以て待ち、諸將を遮て曰く、我は第四旗劉松山也、と軍心乃ち定まり、咸營に歸る、功を以て總兵に擢て花翎を賞し、竝に志勇巴圖魯を賞す、同治元年老湘營を分領して甯國に駐まる、時に疾疫大に作り、兼ねて餉に乏し、松山日夜拊循し、一呼齊しく、振ふて城守完きを、功を上り、特に封典を給ふ、四年肅州鎮の總兵に補し、旋て皖南に調す、是年會國藩檄して捻逆を征し、又奏派して靈淮の營務を總理し、竝に老湘全軍を統領せしむ、江蘇、山東、河南等の處に馳驅し、民情を連絡し、兵食を廣籌し、屢ば勝を得、而して捻首張總愚五年の冬、陝西に竄入す、別將遷延進まず、松山疾く趨せて關に

入り、歩兵數千を率ゐて十餘萬の賊衆に當り屢々奇功を奏す、明年廣東陸路提督に補し逆賊同朝を追ふて全勝を獲、朝廷賜ふに小刀一口を以てす、七年捻逆陝より晉に入り竄して直隸清苑縣境に至り、畿輔大に震ふ、松山星夜兼程賊前を繞越して保定より横出截撃し大に之を破る、達桑阿巴圖魯を賞す、時に左宗棠大軍を總統し回捻を督辦す、奏して歩軍翼長に充つ、遂に諸軍を會同して力を合せて兜勦し捻速を蕩平す、黃馬褂を賞穿し、三等輕車都尉の世職を給ふ、是年長驅西に向ひ、行て綏德に抵り土回を勦し、董福祥等十七萬人の降を收む、八年甘肅の回逆を勦し、靈州を克復し、進んで金積堡、老巢を規し、先後攻めて附近の寨壘百餘を破り賊餉を斷ず、九年正月進んで馬五の寨を攻め已に其外卡を破る、松山馬に策つて將攻すること甚だ急也、忽塞中の飛子、左乳を洞し、傷重くして馬より墜つ、親兵扶掖して先づ歸る猶大呼して曰、隊を整へて行列を亂す毋れと、既にして寨破れ馬五擒に就く、諸將入つて視る、目を張りて曰く、國恩未だ報ひず、我死すとも尸は速に歸す、母れ、當に厲鬼となつて賊を滅すべしと、言ひ訖て瞑す、年三十七、事聞す提督の例に照して優に従て郵を議し、太子少保銜を贈り、忠壯と諡す、京師の昭忠祠

に入祀し、原籍及陝甘の各省並に專祠を建つ、十年金積堡を削平して、祭一壇を賜ひ、十二年甘肅平いて一等輕車都尉を加賞す、前勞を念て也
松山田間より起ち、謀勇兼ね優れ、軍に在ること十八年、僅に一再里門に反る家居未だ嘗て月に彌らす、年三十を逾へて未だ娶らず、會々西征の勇を募り遂に洛陽に出づ、其婦の家、女を送る、乃遂に逆旅に至て婚を成し、未だ匝月に及ばずして關中警を告ぐるをさし、檄を奉じて即ち行く、其憂國忘家、率ね此の如し、劉錦棠は實に松山の兄の子也

陶澍

陶澍 字は雲汀、安化の人、嘉慶壬戌の進士、庶吉士に選ばれ編修を授けらる、四川の郷試を典し、御史となる、疏して部員の黨を樹て異を伐ち及び吏部の河工を輕視し外省の吏治を冒濫するの諸積弊を劾す、又三急五宜以て匪徒を靖すべきを條陳し均しく稱可せらる、中城を巡視して滯獄八百有奇を決し、給事中に晉み南漕を巡視して盡く陋規を革む、會々漕艘冰に高郵に阻まれしを露筋祠に禱り、一夕凍解く、爲めに奏して封號を請ふ、尋て川東道を授け、治行第一を以て山西按察使に擢せられ、入覲の時三案を親授せられ任に赴て審辦せしむ、後ち京に控獄多

きに遇ひ、直ちに臬司に交し、巡撫に由らず、従前未だ有らざる所也。道光元年安徽布政使に遷る、皖の省庫虧けり、五回清查して未だ要領を得ず、澍心を悉して鉤考し、輟輶一清す、三年巡撫に遷る、大水に値ひ、潁江の三十餘州縣皆淹沒す、澍親ら勸賑し、官を遣り上海に赴かしめ、米を買ふ十萬石、四十萬金を勸捐して民流亡せず、明年宿州懷遠大に蝗あり、澍劉猛將軍の廟に祈る、青蛙鳥雀無數あり一日にして蝗を食し盡す、乃ち大に水利を興し、壽州の芍陂、懷遠の郭塘、荊山口、鳳陽の花源湖、鳳臺の蕉岡湖及び沿江の圩垸堤壩次第に濬を完り、又豐備倉を創設して救荒の計をなす、略ほ社倉法の如く而かも其弊を去りたるもの也、後又江蘇に仿行す、五年移て江蘇を撫す、適々河淮、交も漕運の中阻に病む、疏して蘇松常鎮太倉の漕百六十萬石を改めて海運に歸せんと請ひ、躬ら上海に赴き商船を集め、雇借を定め、水程四千里、匝月にして悉く津沽に抵り、一の漂損する者なし、計銀米各十餘萬を節約す、優詔褒美し、孔雀翎を賞戴す、吳中、道光三年以來連歲水災あり、劉河漸淤して太湖より海に入るの水道暢びす、澍言ふ、水を治むるには當に先づ吳淞を治め、海口に通ずるを以て要となすべしと請ふて海運節約の漕項銀廿餘萬兩を以

て工を興し、工竣つて兩江總督に遷り、巡撫林則徐と合疏し、劉河、白茅を濬へ以て常熟昭文數州縣の田賦の命を全ふせんと請ふ、劉河の工値十六萬有奇、帑に借り攤徵して之を返す、白茅の工費十一萬、官民捐辦集成す、海口に各石壩を建て放水をなし、海に歸せしむ、適々太湖の水漲る、盡く海口の各壩を啓きしに三日ならずして水落ち、歲大に熟す、父老懼怖して百餘年來未だあらざる所なりと傳唱せり、澍尤も心を運河の利害に留む、曾て浚を猪婆灘に加へ、以て漕艘咽喉の梗を除く、是に至て上游に黄金關を復して練湖の關鍵となし、改めて丹陽に黃泥閘を建て、金湖の水を蓄へ、下游は則ち濬を加ふ、是に於て運河の上下皆治まる、時に私梟黃玉林法に伏す、戶部尙書王鼎、侍郎寶興命を奉して兩淮に赴き、鹽法を改めんと籌り、場窳に課するの計をなす、澍因て章程十五則を條上す、鼎等遂に疏して鹽政を裁し、總督の管理に歸し、以て事權を一にせんと請ふ、澍乃心を殫して弊を釐し、其著しく成效ある者四大端あり、一に曰く浮費を裁して以て成本の計をなし、鹽政の陋規を裁して十六萬有奇を輕くし、鹽政養廉の五千兩を繳還し、凡そ公費、匪費、岸費、窩價、悉く之を裁す、一に曰く出納を慎しみ、以て庫款を重んず、凡そ正項は内

庫に儲へて以て部撥に備へ、雜項は外庫に儲へて仍て總商を革め以て侵漁を杜く、永く減帖、印本の諸名目を禁す、一に曰く粗私、船私を禁し以て網銷を清む、一に曰く五棚十積を革め以て淮北を清む、北鹽十年課無く遍地皆私なり、樹計を決して票を改め、税を減し、費を裁す、數月ならずして塲鹽一空せり、初め淮南は十年を以て六綱を行ひ、淮北は十年を以て三綱を行ひ、幣を虧く七百餘萬、樹極弊の後を承け事に洩む八年、正雜銀二千六百四十餘萬を完くし、運庫常に銀三百餘萬を實存す、又辛卯以前の殘引百三十餘萬帯の徵還未銷のものを銷し、印本の積欠、薑價、銃引の殘課三百數十萬は以て前人の欠を代償す、論者謂ふ樹の奏行する所、皆一世の好範たり、而して海運、票鹽は尤も百世の利とするに足ると、眞に然り、樹特達の知を受け、屢召を承け、陳言して盡さるなし、印心石屋の四大字を御書して之を賜ひ、山川の部参照、又績を考へ優敘、幹國良臣の御書を褒賜す、年六十二にして位に卒す、太子太保を贈り、賢良祠に祀る、謚は文毅、敕して淮北板浦塲に專祠を建立し、並に名宦祠に祀る、

樹虬、髯山立、事に遇ふて奮發、義色に形はる、凡そ吏治に關して教養舉らざるはな

し、安徽を撫する時、創めて省志を修め、兩江の任内に忠節を表彰す、而して陽湖武進等の縣、題して節孝を旌すもの多き三千餘人に至る、創しめて總坊を建て、以て之を表彰せり、江寧、嘉定、海州に均しく書院を創建して、以て來學に惠し、京師に悅生堂を建て、以て窮民を惠む、在籍の漁税を捐し、罟罾を禁し、資江の舟楫暢行することを得せしめ、又先志を推し、捐して義學書院を建て、一郷之を徳とす、陶澍の如きは、清朝稀に見る所の能吏と謂ふべし

羅繞典

羅繞典 字は蘇溪、安化の人、道光己丑の進士、庶吉士に選はれ、編修を授けられ、四川の郷試を典り、平陽知府となる、平陽はもと多盜、獄訟繁く、猾吏多し、繞典一繩して法弊盡く、革まる、又積案千餘を斷せり、起洪洞の巨盜、陝に闖入す、豫しめ計りて、其魁、敖油、王濬等數十人を擒へ之を斬る、陝西糧道に擢せられ、山西按察使に遷り、冤獄二百餘案を平反す、而して杜悫の案尤も難し、初め悫人と闘ひ、夜逃ぐ、俄に死屍あり、路上僅に一足を暴はす、悫の母縣に控し、闘者を罪に坐す、繞典其冤を知り、役を遣りて求めしめ、山東磨坊に至りて悫を獲、冤乃ち明らか也、次で貴州布政使に遷る、貴州の地貧瘠にして、歲々外省の協濟による、繞典鉛廠の章程を變通し、庫

款を清め務めて節裁を加へ、頓に庫儲三十萬を増す、復備荒穀五萬石を置く、餉を發して民兵を募り、盜賊を捕誅す、下游苗爲めに跡を斂む、湖北巡撫に遷り、株連の平民二千人を釋き、礮船を製し、兵を設けて重湖の盜賊を巡緝す、憂を以て歸り服を闕り都に赴く、適々粵逆猖獗なり、旨を奉して湖廣の防務を辨理す、時に賊已に道州に踞す、繞典議して省城の南門外に土城を増築し、陝兵を以て石馬舖を扼守す、會々賊突至して陝兵を殲す、繞典遽に城に入り、關を閉して城中の文武と陣に登りて固守す、時に守城の兵少し、繞典文武を會同し、拊循激勵、重賞を惜まず、守者益々力む、各郷の奸民羣がりて劫掠を企つるあり、繞典郷人に團練せしめ、匪を禦ぎ、格殺論するなし、因てこの風頓に息む、而して賊已に天心閣に據る、新寧の江忠源師を率ゐて之を扼し、賊越ゆる能はず、則ち日夜穴を掘りて城根に抵る、繞典豫しめ月城を修めしめ、内濠を開き、健卒を遣りて外濠を鑿ち、其の穴を破る、賊城を蕪す、城凡三たび圯壞せられしも、皆我軍の堵する所となりて、城復た完し、賊計窮し、遂に夜其營を火て遁れ、長沙の圍解く、繞典圍城に居ること八十餘日、晝夜親ら巡視す、是の月雲貴に總督たるべき命あり、武昌淪陥せしを以て、賊の北竄を遏む

るため旨を奉して荆襄を防ぎ、遂に襄陽に駐まる、土逆郭太安、楊連科等竊に發す、二逆及び餘黨千餘人を擒へて之を斬る、南北の驛道通し、雲南に赴く、回逆馬二花、嶋を負ふて死拒す、計を以て隘を奪ひて入る衆懼れて二花を献し、東川平らく、而して廣西百色の土逆境を犯すにあひ、擊て之を走らせり、繞典滇兵弱きを以ての故に標兵を簡拔して四出せしめ、壯俊、廠民に結ひ、暗に防護をなす、ために回忠稍衰ふ、貴州の逆民楊隆喜、衆を糾合して遵義府城を圍む、繞典練勇を率ゐて攻めて、鳳山、螺螄山の賊壘を破り、數千を斬滅して圍立るに解く、將に師を督して雷臺山、老巢を攻めんとし、遽に疾んで卒す、年六十二、太子少保を贈り、謚を文愷と賜ふ、敕して遵義に專祠を建つ、

陳大受

陳大受 字は占威、祁陽の人、雍正癸丑の進士、庶吉士に選はれ、乾隆元年編修を授けらる、二年帝親ら翰詹諸臣を試み、大受第一席たり、侍讀とし、口講に充つ、少詹事に累遷し、三年再び詹事、内閣學士兼禮部侍郎に遷り、浙江の鄉試を主る、四年吏部右侍郎に遷り、冬出て、安慶巡撫となる、是の時廬鳳宿酒類、潯りに饑ゆ、大受至れば、則ち倉穀を發して之を賑恤す、穀盡さんとす、乃ち麥の熟地に麥を買はしめ、又

江廣に分糶し且つ發し且儲ふ、六年壽宿洪水麥無し乃ち買糶せる所のものを以て民に食せしむ、時に連歲饑饉にして盜賊多し、六十餘人を捕獲して之に訊問するに皆米麥を盜む者なり、大受其情を哀れみ奏して之を釋放す、夏江蘇巡撫に調す、時に太常鎮揚水のため秋禾盡く淹沒せらる、大受先づ令して餓る者を振恤する一月乃ち倉穀を糶し、疏して圩岸を築き、廬舎を修め、孥孥を斂め、鄰穀を糶し、今年の征を緩めんと請ふ、水退きて蝗種を遺すを恐れ乃ち民を募り冬に先ちて之れを捕へしめ種遂に絶ゆ、七年淮海徐の下田、麥を得ず、民草食するものあり、大受一月の糶を借らんと請ふ、帝命して江浙の漕七萬石を送りて之を賑恤せしむ、初め句容の黃堰壩は田約八千畝、郭西塘は數百頃を灌漑す、歲久しくして淤せり、大受乃ち社穀を貸し、民をして力を以て食に就かしめ、利復して民饑えず、秋河決し古溝再ひ決して石林、高寶、興泰、皆浸さる、大受以て聞す、帝命して漕米を截して撥せしめ、銀穀千百萬を計す、大受乃ち多く空船を爲くり、米の至るを候て則ち之を截せ、舳舻數百里一日にして徧し、是より先き温州商の來糶者を禁す、浙撫以て聞す、大受奏して曰く、溫商は海に泛んで來往す、臣浙の他處を禁せずして獨り溫を

禁するものは誠に海運の謹まざる可からざるを以ての故也と、帝之を是とす、十年部議、商圍を禁す、大受以爲らく商人の米を貯ふる少しく利を得れば則ち自ら散し、貯へ一歲に過ぎずして民も亦利す、請ふ禁する勿れと、便ち又奏す、城工核減の議は節用にあり、用を節するも工悪しく修すれば更に之に倍することゝなる、城郭は千百年の計、宜しく節を目前に求むべからすと、帝皆之れを是とす、十一年太子少保を加ふ、時に淮海徐屬の災を被るもの十の九、大受縣に行き海岸に至り、蒿實を食ふ者を見、取つて之を嘗む、苦澁甚し、乃ち粟を散し、之に種を借す、九月福建巡撫に轉す、閩地の民もと番と雜處して土音譯に非されは通せず、民人を殺して番罪に坐するあり、通事に賄して之を成す、大受其情を疑ひ再鞠して遂に白を得、冬兵部尙書を授く、十三年春帝東巡す、大受馳せて行在に至る、召見し問ふに、東土饑饉の事を以てす、大受見る所を以て對ふ、即ち命して營前に賑事を議せしむ、既にして命により京に還りて會試を主とり、吏部に轉す、夏軍機處に直し、協辦大學士たり、秋戸部を攝す、時に金川に兵を用ふ、帝憂へて方器を勅し、軍書織るが如く夜と雖も必ず達す、大受日に數々召見せられ、或は夜宿直す、凡そ大謀機事には

皆與る十四年の春金川平らぎ太子太保に晉み軍功三級を加ふ秋直隸總督を署す大受既に盡瘁し病甚し帝數々醫を遣りて存問せしむ冬稍間あり京に還る十五年出て、兩廣總督となる兩粵は京師を去ること遠し官偷民曉大受猛を以て之を易へんと欲し不法の吏を劾する虛月なし風俗遂に一變す秋任に卒す遺疏至る帝悼惜し命じて賢良祠に入祀せしめ三代の封典を與へ祭兩壇を賜ふ謚は文肅惟ふに陳大受は陶澍と相伯仲するの人物ならん湖南出身の二能吏と稱すべし

江忠源

江忠源 字は岷樵新寧の人道光丁酉の拔貢也是年鄉試に擧げられ甲辰大挑の二等たり里に歸り天下の將に亂れんとするを念ひ殊に楚粵の間山谷阻深にして奸枿多く其地に萌し邑民羶の穰處せるに注意し丁壯を集めて團練をなし陰に兵法を以て之を部勒す未だ幾ならずして雷再浩の變起る忠源即ち團丁を督し再浩を縛して事定まる功を敘して知縣となり藍翎を賞せらる道光二十九年浙江に揀發し秀水の知縣を署す歲餘にして丁艱により歸る時に廣西の賊徒猖獗也大學士賽尙阿出て、師を督す特に忠源を疏調し勞を敘して同知に擢し花

翎を賞す自ら新寧の勇五百人を率ゐて一軍となす湖南鄉勇の境を出て、賊を討つは此に始まる官軍の賊を永安に圍むや提督向榮議して古法に倣ひ一隅を缺き賊を出縦たしめて之を殲さんとす忠源然らずとなし書を作りて榮に抵り之を力諫し合圍せんと請ふ得る能はず因て病に托して引き歸る歸る比ひ永安の賊出て、大に官軍を敗り遂に桂林を攻む忠源急に兵勇千人を募り道を倍して馳せ援く是より獨り一隊を率ゆ賊中往往江家の軍を指目すといふ忠源既に桂林の圍を解き又大に蓑衣渡に捷つ賊舟を掠めて北するを得ず衡永以て安し咸豐二年賊長沙を攻む忠源至て城南天心閣外の地勢高く賊壘を築きて其の半に據るを見説いて曰く賊此に據る城其れ危い哉と即ち所部を督して之を力争し死傷二十餘人惡戰益々厲し賊遂に敗れ退き壘隨て成り城と相犄角す賊爲めに逞しきを得ず長沙以て完し巡撫張亮基奏して忠源を湖南に留む是冬賊目晏仲武を巴陵に破り徵義堂の會匪を瀏陽に勦平す明年の春湖北按察使を署し反民劉立簡を通城に剿し陳北斗を崇陽に殲す皆疲卒千餘を以て寇數千を蕩平す帝其功を嘉みし是より江南の軍務を幫辦すべきの命あり既にして行き道に

廣濟の宋關祐亂を作すを聞き、師を移して之を討し、事甫めて定まる、復朝命を奉し、急に鳳陽を救ふ、數日にして江西巡撫、又撤して南昌を援はしむ、忠源曰く、鳳陽は朝命ありと、雖然かも殘破の區、效速にして事易し、江西は朝命無しと、雖然かも完全の地、禍急にして事難し、吾當に其難きものを先にすべしと、遂に師を提げて九江より赴き、兩日に四百里を越て南昌城に入る、明日賊至る、則ち繕施畧ぼ備はり、官民恃んで以て恐るゝなし、賊晝夜環攻し、地道を穿ち、道を分て近傍の郡縣を擾し、以て我謀を眩せんとせしも、遂ぐるを得ず、凡そ九十日にして圍解く、帝その功を嘉みし、二品頂戴を賞す、時に賊九江より襲ふて富池口を破り、遂に興國、田家鎮を陥れ、防軍急を告ぐ、湖將張亮基、忠源に檄して回援せしむ、既に至る而して賊已に鎮の南岸半壁山に據り、防軍敗れ潰ゆ、忠源疾く江口を扼して搏戦せしも、所部少く又遠行して飢疲甚し、塵鬪時を移して殺傷過當、乃ち圍を突て出て廣濟に趨り、上疏して自ら劾す、詔して四級を降し、留任せしむ、賊德安を陥る、軍を移して之を撃つ、賊城を委棄して遁る、遂に漢川より渡江して武昌に至り、安徽巡撫の命を拜す、又詔す、楚皖一體常に緩急去留を爲すべく、必ずしも成命に拘らずと、忠源

曰く、廬州新立の行省を以て危きこと且夕にあり、法宜しく淮南を經營して以て吳楚の賊勢を分つべしと、遂に疏を拜して行く、其の將卒久しく奔命に疲れ、又淫雨を冒して多く道に病む、忠源も亦病む、六安に至て病甚し、六安の民道を遮て留らんと請ふ、許さず、疾を昇て竟に廬州に達す、部署未だ定まらずして賊大に至る、忠源策を設けて敵に應ずる、一に長沙、南昌を守る時の如し、賊三たび隘道を爲りて城を疎壞し、陣に登る、忠源力禦之を卻けて城復完し、事聞す、霍隆武、巴圖魯を賞し、優賚加ふるあり、而して是時軍廩、通懸、鉛藥俱につき、見兵千人に満たず、援軍四十里外に屯して觀望進まず、其弟忠濟楚より師を帥めて來り、援けしも亦賊の糧く所となりて咫尺達するを得ず、忠源病益々困しみ、食はざること數日、城遂に陥る、發憤水に投じて死す、實に咸豐三年十二月十七日也、年四十有二、事聞す、總督を追贈し、葬祭を賜ひ、廬州及湖南、江西に命じて皆專祠を立つ、騎都尉兼雲騎尉の世職を給ひ、諡を忠烈とす

忠源初め京にありて、曾國藩と交り最篤く、日に學行を以て相淬厲す、文宗の御極に國藩疏して之を薦む、南昌にある時嘗て奏請して曰く、三省舟を造りて水軍を

練らんと、又書を國藩に寄せ、礮船を廣置し江面を肅清することを堅囑せり、國藩の大怒を勘定せるは實に水軍の力に負ふ所多し、而して水軍は忠源に其端を發せる也。

忠源の部下に周昌發なるものあり、忠源の廬州に圍まるゝ時、契箭を持し出て、援兵を促す、未だ返らずして城陥り、忠源節に殉す、昌發入て忠源の尸を求めんと欲し、賊裝をなして城に入る、賊會某左右に留置して數日を過ぐるも未だ間諒あらず、如何ともするに由なし、偶々事を以て水西門に至る門は故と古塘にあり、積齒枕籍の中に忠源の尸を見る、昌發且拜し且泣く、四邊人無きを窺ひ乃ち僻處に徙置し衣を解て之を覆ふ、阮得勝なる者あり、賊中に陥り昌發と相識る、略はすに金を以てし、約して共に逃く、夜黒く雲四合、雪大なること拳の如く、諸賊皆休臥す、昌發急に尸を負ひ得勝と繼て下る、時に城外の竹簽、符の如し、且拔き且行き、諸賊の營を歴、大聲邏を作す者、行き且至るに會ふ、昌發默祝して曰く、事苟も敗れば昌發は郵むに足らず、獨り公の尸を如何、願くは公の靈之を護れと、俄に邏者他方に去て、犬吠も亦聞かず、乃ち出づるを得、主兵者賞するに千金を以てす、辭して受け

ず、乃ち其半を受け、又中分して以て得勝に與へしといふ。

鄧紹良 字は匡若、乾州の人、晚號を介槎といふ、父は士儼、歲貢生にして、平江縣の訓導たり、紹良幼にして屯丁に充てられ、道光の末、廣東に従征し、六品戴を賞せらる、新甯の土寇李沅發起る、紹良時に千總を以て、永綏廳屯守備を署す、檄を奉し兵を督して馳せ勦し、追躡して宜章營に至り、斬首二十級、明年沅發擒に金峯嶺に就く、紹良先登して都司に擢せられ、揚勇巴圖魯を賞し、花翎に換ふ、咸豐元年提督向榮に従て、廣西を征し、慶遠、索潭、陶鄧、墟、潯州、牛排嶺等に轉戦し、一月に凡そ四たび捷ち、永安州を復し、其圍を解き、楚雄協副將に擢せらる、二年秋、賊長沙を圍む、鎮筮の兵九百を率ゐて赴き、援く、九月二十三日、魁星樓側の地雷發し、城崩るゝこと數丈、賊鼓噪して登る、紹良手つから先登の賊數人を斬る、礮子左肩を洞し、血淋漓として衣袴を濕ほすも少しも卻かず、且撃ち且築き、城完きを待、遂に圍解けたり、三年賊を金陵に討ち、七瓮橋、朝陽門の賊壘を破り、轉して鎮江を攻む、會々援賊大に至り、我兵衆寡敵せずして皆潰走す、紹良先きに已に壽春鎮總兵より江南提督に晉みしか、是に至て職を奪はる、四年賊を太平に勦し、采石磯の險隘を奪ひ、蕪湖

の賊を黄池口に破り、斬馘萬人、五年二月詔して三品頂戴を給ひ、花翎を賞還す、師を率ゐて婺源を攻めて之に克ち、轉戦江甯鎮に至り、沿江の賊巢を破る、因て提督銜を賞還す、六月蕪湖の賊、老鴉山に萃り、甯國急を告ぐ、紹良馳せて之を援け、三戰皆捷ち、賊其旗幟を望んで皆返走す、遂に蕪湖を復し、沿江の賊壘俱に平らき、陝西提督に擢せらる、六年春揚州陷る、詔を奉して揚州を援け、雨を冒して江を渡り、環攻六晝夜、遂に之に克つ、十二月甯國を復し、沿途の賊柵を破る、七年二月蕪湖の賊、灣沚を犯し、四月復金陵の賊を糾合して、黄池灣沚を犯す、均しく撃て之を御く、八月南陵を復す、八年正月金陵の賊、捻寇を合して、また黄池灣沚を犯す、紹良南陵より星夜回援し、力撃之を御く、二月賊復南陵を犯し、勢尤も張る、游擊石玉龍、吳再升等共に相持すること數日にして決せず、會々總兵周天受の援軍至る、紹良乃ち親ら師を督して西河に出て、賊の後を襲ふ、賊腹背敵を受けて遁れ去り、南陵平らく、十月十四日賊復黄池を犯し、蕪湖の賊亦同時に來り犯す、時に紹良の所部萬六千人、多く各郡縣の要隘に分堵して、其灣沚に駐まる者、勢甚孤也、而して賊衆數倍、盡く河北三里に踞して、和尚橋等の處を梗く、二十七日和尚橋の賊進て灣沚に偪る、

明日賊黨を分ち壘を盤龍甸、灣黄の適中の地に築く、賊之に據らは、則ち灣黄道塞つて甯國危し、紹良乃ち檄を南陵に飛ばして來援せしめ、又總兵蕭知音に檄して嚴に黄池を扼せしむ、二十九日進て盤龍甸を攻め、略ほ斬獲あり、而して是時軍餉久しく缺き、其分堵孤山、壩等の諸營已に相繼て飢潰す、十一月朔蕪湖の太平賊復大股を率ゐて灣沚を犯す、紹良師を分て扼擊す、而して賊の至ること益々衆し、連夜壯士を遣りて賊營を襲はしむ、れとも皆克たす、金陵の援軍至るも亦敗れ潰え、總兵戴文英戰死す、十一日に至り、營中の糧粟彈藥皆盡く、賊攻むること益々急也、紹良勢の支へざるを知り、急に左右を揮つて去らしめ、衣冠を具し、北嚮再拜して自ら其營を火て死す、時に年五十八、

紹良舉止嫺雅、儒將の風あり、賞罰極めて嚴明、功有れば輒ち諸將を推し、自ら伐らす、曾て營にあつて母の訃をき、天を仰て呼號し、水漿口に入らざること累日なりしといふ、其陣に没するや、太子少保を贈り、葬祭を賜ひ、謚を忠武と與ふ、騎都尉兼雲騎尉の世職を賞し、甯國及原籍に各專祠を建てしむ、

第三章 學者と其編著

第一綱 唐代王璘—李羣玉—歐陽詢外四名 第二綱 宋代周子—
 易祓外二十四名 第三綱 元代歐陽元—劉一清外四名 第四綱
 明代何孟春—王介之外二十五名 第五綱 清朝楊昌光—朱文煊—
 易光燁—王夫之—丁善慶—邵嗣德—蕭寅顯外五十一名

第一綱 唐代

王璘

王璘 は長沙の人なり。詞學富贍、詹事崔鉉湖南を廉問し、表して朝に薦む。之を使院に試むるに璘十書吏に皆筆札を給せんことを請ひ、袷袴捫腹往來して口授す。吏筆を停めず、黃河賦三千字數刻にして成る。復た鳥散餘花落の詩二十首を爲くる。時に日未だ亭午ならず、忽ち風雨暴に至り、數幅廻颺の卷く所と爲り、泥滓に沾漬す。璘復た別に十餘篇を構へ、共に七千餘言なり。鉉試官に言つて曰く、萬言試に

限あらず、但請ふ召來飲酒せんと、黃河賦復た難字百餘あり、璘に請ふて衆に對して朗宣せしむ。傍ら人無きが若し、時に路巖軸に當る、一介を遣り之を召す。璘激して曰く、請ふ帝の來るを候ち見んと、巖大に怒り奏して萬言科を廢す。璘策を杖て歸り、盃酒の間に放曠す。一日李羣玉と嶽麓に遇ふ、羣玉曰く、公は何人ぞ。璘曰く、日に萬言を試むるの王璘なり、羣玉之を待つ甚だ淺し、因て相與に聯句す。羣玉破題して之を授く、璘佇思せず、直ちに筆を執り芍藥花開菩薩面櫻欄葉散夜叉頭に至て羣玉始めて屈すといふ。

李羣玉 字は文山、澧州の人、曠逸にして仕進を樂まず、専ら吟詩を以て自適す。詩筆妍麗、才力邁健、好んで笙を吹く、親友強て舉に赴かしむ、一上して止む。裴休湖南を廉察する時、厚く之を遇す、相となるに及び、詩論を以て羣玉を薦む、乃ち闕に詣り、詩を進むる三百篇賜ふに、錦彩器物を以てす。僕射令狐綯宏文館校書郎を奉授す。未だ幾ならずして、任を解き、潯陽に歸り、二妃廟を經て、詩を題す、恍として物あるが若く告ぐるに、二年の兆を以てす。後果して卒す。殷成式詩を以て之を哭す句あり云く、明時不作、禍衡死、傲盡公卿歸九泉、遺著李羣玉集三卷、後集五卷あり。

歐陽詢 は長沙の人勅を奉じて魏書、陳書を撰ぶ、又勅を奉じて藝文類聚一百卷、麟角百二十卷を撰ぶ、

釋齊己 は益陽の人風騷旨格一卷、流類手鑑一卷を撰ぶ、又白蓮集十卷、白蓮外編十卷をも撰述せり

劉蛻 は長沙の人、文泉子集十卷の撰あり

曹松 は衡陽の人、曹松詩集三卷を撰べり

房德光 は澧州の人、濮陽集十卷を撰ぶ

第二綱 宋代

周子 畧傳選述と共に人物傳にあり

易祓 は寧郷の人、周易總義三十卷、易學舉隅四卷、周官總義三十卷、周禮辨疑等を撰ぶ

周堯脚 は永明の人、詩說三十卷を撰ぶ

路振 は湘潭の人、勅を奉じて兩朝國史一百十卷を撰び、又九國志四十九卷、楚書

五卷を撰述せり

李杞 は平江の人、改修三國志六十七卷を撰ぶ

王容 は湘郷の人、勅を奉じて光宗日歷三百卷、甯宗日歷五百十卷を撰ぶ

鄭向 は衡陽の人、五代開皇紀三十卷を撰ぶ

孟瑜 は長沙の人、野史三十卷を撰ぶ

陳田夫 は南嶽の道士也、南嶽總勝集三卷を撰ぶ

譚世勛 は長沙の人、外制集五卷を撰ぶ

王觀國 は長沙の人、學林十卷を撰ぶ

戴埴 は桃源の人、鼠璞一卷を撰ぶ

羅璧 は平江の人、識遺十卷を撰ぶ

朱遵度 は衡山の人、群書麗藻一千卷、目錄五十卷を撰ぶ

劉芮 は長沙の人、順甯文集二十卷を撰ぶ

鄧友龍 も長沙の人、鄧中丞家集の撰あり

鄧深 は湘陰の人、鄧紳伯集二卷を撰ぶ

廖行之 は衡陽の人、省齋集十卷を撰ぶ

廖儼 は衡山の人、朱陵編一卷を撰述せり

侯延慶 も亦衡山の人、退齋居士文集の撰あり

趙葵 も衡山の人、趙忠靖集を撰ぶ

陶岳 は祁陽の人、陶康州文集十八卷、益州小集一卷の撰あり

楊枋 は武陵の人、字溪集十二卷を撰ぶ

梁棟 は湘州の人、隆吉詩鈔一卷の撰述あり

鄧忠臣 は湘陰の人、杜詩注二十卷を撰ぶ

楊齊賢 は甯遠の人、李太白詩注二十五卷を撰ぶ

第三編 元代

歐陽元 字は原功、龍生の子、長沙の人なり。幼にして郷先生張貫之に従て學び、日に數千言を誦す。黃冠あり、注視之を久らして曰く、此子當に文章を以て世に名あるべしと。部の使者縣に行き、元に命じて梅花詩を賦せしむ。立るに十首を成し、晚

歐陽元

に歸り増して百首に至る。年十四、益す宋の故老に従て學ぶ。文試を爲して輒ち高等を占む。延祐元年尙書を以て貢に與かる。明年進士と成り、平江州同知を授く。蕪湖縣尹を調し、疑獄を裁斷平定する所多し。而して飛蝗境に入らざりしといふ。改めて武岡縣尹となる。赤水太だ清む。兩峒の蠻獠、訟して得ざるを以て直ちに衆を聚め相攻殺す。元單騎往て諭すに禍福を以てし、且其訟を平らぐ。獠戈を投じて罪を請ふ。召して國子博士と爲し、翰林待制兼編修に陞る。日に内廷に直し、制詔書檄皆撰述を經、復た時政數十事を條陳し、多く之を推行す。明年新に藝文監を置き、文宗親署して、元少監となる。經世大典を纂修し、大監に陞る。改めて太常禮儀院事を治め、翰林院直學士に拜し、四朝實錄を編修し、國子祭酒を兼ね、召されて中都議事に赴き、侍講學士に陞る。至元五年足疾を以て歸を乞ふ。許さず。翰林學士を拜す。至正改元更に朝政を張る。不便なるものあり。元極言隱さず。科目の復沮む者尤も衆し。元之を力爭す。未だ幾ならずして南に歸る。詔して遼金元三史を總裁せしめ、凡例論贊皆元之を主とす。福建廉訪使に除す。中道にして疾作り、休を請ひ、南山に隱居して終るの志あり。十年復翰林學士に拜す。旨を承けて國律を撰定し、尋て歸

を乞ふ、特に湖廣行中書省右丞を授け、致仕俸を給し、其身を終へしむ、將に行かんとす、帝復た允さず、十四年汝穎盜起る、元招捕策千餘言を献ず、十七年天下を大赦するの詔を草す、旨を奉じて肩輿延春閣下に至る、蓋し異數也、是歲十二月崇教里の寓舎に卒す、年八十五、崇仁昭德、推忠守正、功臣大司徒柱國を贈り、楚國公を追封す、諡して文初と曰ふ、編述の書目を一括すれば左の如し

宋史、四百九十六卷、遼史、一百六十卷、金史、一百三十五卷、泰定帝實錄、明宗實錄、文宗實錄、甯宗實錄、經世大典、八百八十卷、目錄十二卷、公牘一卷、纂修通議一卷、太平經國、二百十二卷、至正條格二十三卷、圭齋集十五卷、附錄一卷、

劉一清 は武陵の人、錢塘遺事十卷を撰ぶ

蕭元益 は安仁の人、洙泗大成集を撰ぶ

李道純 は武岡の人、三天易髓一卷、中和集六卷を撰ぶ

陳泰 は茶陵の人、所安遺集一卷を撰ぶ

李祁 も茶陵の人、雲陽集十卷を撰ぶ

第四綱 明代

何孟春

何孟春 字は子元、説の子、郴州の人なり、少にして李東陽の門に遊び、學問該博通宏、癸丑の進士なり、兵部主事を授く、言官龐紳等獄に下る、疏して之を救ふ、詔して萬歲山毓秀亭、乾清宮、西室を修む、役工九千人、計費百餘萬、子元抗疏極諫す、清寧宮災するや、八事を陳じ、萬餘言を疏す、郎中に進み、出で、陝西を理む、馬政、條目畢く張る、還て鹽弊五事を上つり、竝に撫臣の不職を劾す、正徳初出で、河南參政となり、廉公威あり、太僕卿に擢んず、劾宣府に幸す、疏を馳せて諫む、尋て右副都御史を以て、雲南を巡撫し、十八寨叛蠻、阿勿阿等を討平し、奏して永昌府を設け、五土司、五守禦を増す、功は辭して受けず、世宗即位し、吏部右侍郎に遷る、會ま蘇松の諸府旱潦相繼ぎ、而も江淮北河水大に溢る、孟春漢の魏相に倣ひ、八事を條奏し、帝嘉納す、尋て左侍郎に進み、尙書の事を署す、是より先き大禮の儀起る、孟春雲南にあり、之を聞て、上疏し、官吏部に論及す、三たび上疏して皆省られず、帝益々張總、桂萼等の言に溺る、孟春九卿、秦金等と偕に具疏し、十三難を發して、以て璫を辨折す、疏入る、

中に留めて發せず、孟春衆に言つて曰く、憲宗の朝、百官文華門に哭して慈懿皇太后の葬禮を争ひ、憲宗之に従ふ、これ國朝の故事也と。是に於て九卿と俱に左順門に跪伏し、辰より午に至り、再三傳諭するも起たず、帝大に怒り、錦衣を遣り、首たるものを執へて、詔して獄に下す。修撰楊慎、王元正乃ち門を撼かして、大に哭し、衆皆哭し、聲闕廷を震はす。帝益々怒り、命して四品以下の官若干人を收繫し、孟春等をして罪を待たしむ。翌日、孟春が衆を倡へ、忿を逞うするを責め、大臣君に事ふるの道にあらずとし、宜しく重に従ふべきも、姑く輕きに從ひ、俸一月を奪ふ。旋て出て、工部左侍郎となる。孟春屢疏し、疾を引て退かんと請ふ、六年春に至り始めて許さる。明倫大典成るに及び、其籍を削られ、之を久うして家に卒す。隆慶の初、禮部尚書を贈り、文簡と諡す。孟春の居る所、泉あり、燕の去來の時を以て盈涸し、名を得、遂に燕泉先生と稱す。燕泉先生の撰述せるもの大約左の如し。

燕泉先生

易疑初筮告蒙約十二卷、何文簡疏議十卷、文集十八卷、燕泉舊稿十冊、燕泉雜集十二卷、燕泉詩集四卷、燕泉遺稿十卷、陶靖節注、批點李太白集、李文正擬古樂府注二卷。

王介之 は衡陽の人、易本質義四卷、詩傳合參二十卷、春秋四傳質二卷を撰ぶ。
劉三吾 は茶陵の人、救を奉じて書傳會選六卷、省躬錄十卷、寰宇通志を撰ぶ。
蔣又滋 は零陵の人、尙書合參三卷を撰ぶ。

夏元吉 は湘陰の人、救を奉じて太祖實錄二百五十七卷、太宗實錄一百三十卷、仁宗實錄十卷、明一統志、太祖實訓十五卷、太宗實訓十五卷、仁宗實訓六卷を撰び、又謙齋集四十卷、夏忠靖集六卷の撰述あり。

李東陽略傳前にありの撰述せし書目左の如し。

憲宗實錄三百九十三卷、孝宗實錄二百二十四卷、通鑑纂要九十二卷、明會典一百八十卷、以上奉救、燕封錄一卷、闕里志十三卷、李文正奏議求退錄九卷、懷麓堂集一百卷、聯句錄五卷、懷麓堂詩話一卷。

蓋し曾國藩以前、湖南の文學家にして而かも廟堂の大臣たる器量あるものは、指を先づ李東陽に厠せざるを得ず。

譚希思 も李東陽と同じく茶陵の人、明大政纂要六十卷を撰ぶ。
茹璠 は衡山の人、救を奉じて太祖實錄を撰ぶ。

陳思育 は武陵の人、敕を奉じて世宗實錄五百六十六卷を撰ぶ
車以遜 は邵陽の人、史繫を撰ぶ
嚴首昇 は華容の人、後三代史を撰ぶ
孫懋 は華容の人、唐紀及び唐史七十卷を撰ぶ
黎涓 は華容の人、敕を奉じて明一統志九十卷を撰び、又黎文僖集十七卷、龍峯集十三卷を撰述す
廖希顔 は茶陵の人、三關志を撰ぶ
陶汝鼎 は寧鄉の人、瀟山志八卷を撰ぶ
吳道行 は善化の人、嶽麓書院志十卷を撰ぶ
陳論 は攸縣の人、嶽麓書院志を撰ぶ
王大韶 は衡陽の人、石鼓書院志を撰ぶ
張治 は茶陵の人、敕を奉じて續會典五十三卷を撰ぶ
范永鑾 は桂陽の人、敕を奉じて大明律例三十卷を撰ぶ
周堪庶 は寧鄉の人、治河奏疏二卷の撰あり

楊一清畧傳前にありの撰述せる書目左の如し

楊文襄奏議三十卷、關中奏議十卷、綸扉奏議十卷、

人物李東陽と相雁行し、獻王の所謂楚の三傑の一たり

劉大夏畧傳前にありの撰述せるものは

劉忠宣奏議一卷、西行疏一卷、劉忠宣詩二卷、東山存疏二卷、劉忠宣公遺集十二卷、

あり、人物識見共に李東陽の壘を摩するに足る

車大任 は邵陽の人、澧蓋閣正續集二十卷の撰あり

艾穆 は平江の人、その詩青山到處皆吾土、豈必湘南是故郷は世人の歎賞する所

となれり、終太山人集十卷、熙亭集十卷の撰述あり

孫宜 は華容の人、洞庭漁人集五十三卷を撰ぶ

周冕 は道州の人、濂溪遺芳集五卷を撰ぶ

王偉 は攸縣の人、詩學正蒙を撰ぶ

李騰芳 は湘潭の人、批選王陽明文集の選あり

第五綱 清朝

楊秋遂

楊昌光 字は秋遂、湘陰の人、嘉慶癸酉の舉人なり。長沙の楊延亮と友とし善く、共に年少能文を以て當時に名あり。慷慨自ら期し、延亮と同く節烈を以て聞ゆ。昌光作る所の賦及詩海外に流傳し、日本高麗均しく争ふて之を購ひしといふ。年二十六にして卒す。著せる所のものを芸窗小草といふ。

朱慎甫

朱文休 字は慎甫、瀏陽の人なり。天資穎異、篤く性命の學に志し、宋の五子を以て依歸となす。嘗て曰く、讀書は道を明かにする所以也。未だ四子五經に通ぜずして能く道を明らかにするものあらず、亦未だ濂洛關閩の道を明らかにせずして能く四子五經に通ずるものあらずと。其學誠を以て本と爲し、敬を以て宗となし、精義集義を以て程途となし、明體達用を以て究竟と爲す。後益々心を易象、春秋に殫し、謂らく易象は内聖の學、春秋は外王の書、學は易象を明らかにせざれば、以て道の全體を窺ふなく、春秋に通せざれば、以て道の大用を極むるなしと。是より博考精思、能く諸儒の傳註中に聖人作經の本旨を探り、又凡そ天文、曆算、律呂、方輿及び

易問

諸子百家其の底蘊を究めて其得失同異をわかたざるなし。性至孝、父を武昌に省す。江陵の訓導、胡大章、監利王柏心と友とし善し。繼て兩親を奉じて南し還る。遺るに金を以てす、受けず、父の喪に居るに及び哀毀蔬食すること三年。善化の賀長齡書記に聘す、母の老を以て辭す。後家益々窘しみ、復た母を奉じて鄂にゆき、大章に依つて以て終る。著はす所大易粹言、春秋本義、中庸箋注、五子見心錄、聖學罪釋等あり。

易光焯 字は聞齋、醴陵縣の人、九歳にして怙を失ひ始めて讀書す。貧甚しく廢して田夫となり、牛を牧す、之を久うして伯兄光楫復た就學せしむ。深く自ら刻苦し、夜暗坐して背誦略に達す。弱冠にして弟子員に補し、道光乙酉の拔貢たり。是より郷里に教授す、易に於て尤も得る所あり、易說稿、經數易を作る。嘗て言ふ、秦漢よりして後易を言ふもの無慮數十、唯だ漢儒揚雄、謬らざるに庶幾しと。次て學府語孟詩書禮記春秋の解説を撰す、咸豐中永順縣訓導に選授す。利祿に淡に、兩載にして即ち歸る。學ぶ所改過、強恕、慎獨を以て要となす、而して義利辨析に於て、尤も精し、心に屑とせざる所は萬鍾と雖顧みず、年七十三にして卒す。

王夫之 字は而農、朝聘の第三子、衡陽の人也。少にして通博、意氣壯烈なり。朝聘之を嚴約す、乃ち心を盡して宋儒性命の學を究め、尤も横渠張子の書を喜び、禮を以て教となす。崇禎壬午、兄介之と同じく郷に擧げられ、未だ會試に與らず、會ま流賊衡州を陥れ、朝聘を執へて二子を求む。夫之自ら兩臂を刺して重創を作し、昇て賊庭に至り、用ゆべからざるを示し、父子並に免かるゝを得。順治三年、明の永明王、肇慶と稱號す。夫之郷兵を擧げて克たず、桂林に走る。州式紹の薦により、行人を授けられ、從て梧州に奔る。是時王化澄、諫官金堡等を構陷し、目して五虎となし、廷杖して之を獄に下す。夫之三疏して論救す、化澄等之を憾み、並せて夫之を殺さんとす。幸にして免かれ、疾を以て退隱歸臥す。時に湖南久しく亂る、永寶の朋を往來して、父母は既に前に卒し、介之とも亦相聞かず、牙身悲吟、行歌焦悴、杯を鑿て居り、始めて刻厲述作の志あり。既にして孫可望、將李定國をやり、衡州に出でしむ。湖南響應す。夫之を招く、夫之乃ち章靈賦を作りて、以て志を見はす。康熙十三年、吳三桂反して衡州を犯す、夫之が明の遺臣たるを以て之を官せんとす。夫之從はず。三桂の平らぐに及び、偏沅巡撫其名を聞き、餽るに粟帛を以てし、見を請ふ。夫之帛を反し、粟

を受け、老を以て辞す。乃ち縣西石船山に歸り、土室を築き、以て居る。學者船山先生と稱す。年七十四にして卒す。明の諸儒皆詞章性理を以て生命とし、經學に於て多く空疏なり。夫之天性高明、其學通ぜざる所なく、而して、關閩を以て宗となす。著書四百餘卷、總て八百餘萬言、論者以て千古の晦昧を發き、文士の駢陋を瀦ぐとなす。康熙より以來、名儒代る興り、易詩、三禮、爾雅、小學、皆古訓を求め、空言を斥く、而して夫之皆之が先闢者たり。其著書を概舉すれば左の如し

- 易神疏四卷、書經神疏四卷、尚書引義六卷、尚書攷異一卷、詩經神疏四卷、詩經攷異一卷、詩叶韻辨一卷、詩廣傳五卷、春秋神疏二卷、春秋家說三卷、春秋世論五卷、續春秋左氏傳博義二卷、近思錄釋正蒙解九卷、思問錄二卷、傲體詩一卷、落花詩一卷、遺興詩一卷、和梅花百詠一卷、船山詩賸稿一卷、詩釋一卷、夕陽永日緒論二卷、菴齋文集十卷、菴濤園初集、菴齋五十自定藁一卷、六十自定藁一卷、買薇蕨、菴餘集一卷。

丁善慶 字は伊輔、衡陽の人也。少にして孤、母は劉氏、大學士長沙劉權之の女、躬ら之を教ゆる嚴なり。癸未の進士、庶吉士に選び、編修を授けらる。後、數所に歷任し、遂に聘を受けて、嶽麓書院山長となる。咸豐二年、守城の功を論じ、三品卿銜を賞加す。善

慶性端介、公事に非されば州府を履まず、而して民生利病のある所、悉く言ふて隠すなし、捐輸に遇へば則ち首として數十金を納め、衆の倡となる、故に家中人の産なし、衣食を節縮して之に應じ、終身倦まず、嶽麓を主講すること二十餘年、日に諸生を傲しむるに修身立命の要を以てす、亦頗る陰險に精しく、往々感應あり、下問荅に及び成、改化を知る、弟子の著はるゝもの數十百人、曾國荃、劉長佑は其最なるもの也、同治八年八十歳にして卒す、卒するに先だつ一歳老病を以て山長を力辭し、士論之を嗟とす。

鄧顯鶴 字は湘泉、新化の人、嘉慶甲子の舉人、甯鄉訓導に官たる、凡そ十三年疾により退隠す、詩及古文に工み也、輯述の書目左の如し

資江耆舊集、沅湘耆舊集、明季周聖楷楚寶一書、寶慶府志、武岡州志、繪鄉村經緯圖、永明王播越事蹟、周子全書、元瀏陽歐陽元圭齋集、朱子五忠祠傳畧考、五忠祠續傳、明季湖南殉節諸人傳畧、召伯祠從祀諸人錄、易述毛詩表、玉篇廣韻札記、南村草堂詩鈔文鈔。

蕭寅顯 は善化の人、易象闡微五卷、大易圖解一卷を撰ぶ

羅典 は湘潭の人、凝園讀易管見十卷を撰ぶ

羅澤南 畧傳前に出づの撰著は

周易附說一卷、皇輿要覽十二卷、羅山遺集八卷、西銘講義一卷、人極衍義一卷、小學韻語一卷、姚江學辯二卷、讀孟子劄記二卷、周易本義衍言。

曾國藩曰く公之學其大者、以爲天地萬物本吾一體、量不周於六合、澤不被於匹夫、虧辱莫大焉、涼降衷之大原、思主靜以研幾、と其學の宗旨を窺ふべし

王澐 は安化の人、困翁易學を撰ぶ

孟光鄒 は新化の人、大易闡義三卷を撰ぶ

唐煥 は善化の人、尙書辯僞五卷を撰ぶ

胡錫燕 は湘潭の人、詩本音譜、資治通鑑校勘記十卷を撰ぶ

李文焯 は善化の人、周禮集傳六卷、近思錄集解十四卷、太極解拾遺一卷、通書解拾遺一卷、後錄一卷、西銘解拾遺一卷、後錄一卷、正蒙集解九卷、朱子語類約編、楚辭集注拾遺十七卷を撰ぶ

潘相 は安郷の人、周禮撮要三卷、禮記蓋編十卷、春秋尊孟、春秋比事參義、春秋應舉

輯要十二卷、琉球入學見聞録四卷を撰ぶ
 鍾顯英 は平江の人、律呂心得一卷を撰ぶ
 張學尹 は湘陰の人、春秋經義一百二十卷を撰ぶ
 夏大觀 は湘潭の人、説左約箋二卷、春秋左傳分類賦四卷、洞庭湖志十四卷を撰ぶ
 唐文華 は善化の人、孝經刊誤辨釋を撰ぶ
 魏源 は邵陽の人、遼史、元史新編を撰ぶ
 李芳華 は善化の人、通鑑綱目集義五十九卷、杜詩選注を撰ぶ
 張坊 は湘潭の人、東周紀年一卷を撰ぶ
 方之現 は臨湘の人、晚周多增六十年表説略を撰ぶ
 吳思樹 は新化の人、通史一千卷を撰ぶ
 丁取忠 は長沙の人、輿地經緯度里表一卷を撰ぶ
 胡林翼 (略傳前にあり)の撰述せるものは
 皇清一統輿圖三十二卷、胡文忠公全集八十六卷
 鄧可策 は新化の人、輿地全圖攷證を撰ぶ

楊丕復 は武陵の人、輿地沿革表四十卷を撰ぶ
 王榮蘭 は湘潭の人、歷代官闕記二十卷、三輔黃圖校注一卷を撰ぶ
 孫鼎臣 は善化の人、河防紀略四卷を撰ぶ
 最如燧 は澱浦の人、三省邊防備覽十四卷、苗防備覽二十二卷、洋防輯要二十四卷を撰ぶ
 陳价英 は長沙の人、山海經注釋四卷、韓詩編年箋注集成十一卷を撰ぶ
 唐仲冕 は善化の人、俗覽三十二卷、衡疏を撰ぶ
 彭之葵 は湘潭の人、炎陵志を撰ぶ
 余正煥 は長沙の人、城南書院志四卷を撰べり
 陶之典 は寧鄉の人、嶽麓書院志八卷を撰べり
 鄧瑤 は新化の人、潞河紀程四卷を撰ぶ
 魏源 は邵陽の人、海國圖志一百卷を撰ぶ
 宋本敬 は湘潭の人、廣西通志二百七十九卷を撰ぶ
 陶澍 (略傳前にあり)の撰著書目は

安徽通志一百七十五卷。陶文毅奏議七十六卷。陶文毅公全集六十四卷。陶淵明集輯注十卷。

傳へ云ふ陶澍は一代の偉才、その人物學識皆推服するに堪へたり。若し夫れ地方大官としての手腕に至ては或は曾國藩の上にあるべしと云ふ。

唐效堯 は辰谿の人。陝西通志一百八十卷を撰ぶ。

涂覺綱 は長沙の人。皇朝科例集覽四十八卷を撰べり。

李星沅 (略傳前にあり)の撰べるは

李文恭奏議二十二卷。

曾國藩 畧傳撰述と共に人物傳にあり。

唐鑑 は善化の人。朱子學案八十卷。國朝學案小識二十卷。四稔齊省身日課四卷を撰べり。

車无咎 は邵陽の人。辨類編三卷。切己錄を撰ぶ。

胡統廣 は武陵の人。此庵語類十卷を撰ぶ。

許伯政 は巴陵の人。全史日至源流三十二卷を撰ぶ。

陳鵬年 (略傳前にあり)の撰述せしものは

分類字錦六十四卷。物類輯古畧。月令輯要。以上奉敕。滄洲詩集。道榮堂文集六卷。道榮堂近詩十卷。

王文清 は寧鄉の人。攷古源流四百二十八卷。攷古略八卷。攷古畧補四卷。歷代詩匯一百卷。典制大文二百卷。古今粹玉を撰ぶ。

釋文暉 萬繼昌 は共に湘潭の人。一は妙法蓮華經箋三十卷を。他は金剛經解二卷を撰ぶ。

趙而忭 は長沙の人。虎鼠齋集。孝廉船の著あり。

王俗 は湘潭の人。了菴文集九卷。了菴詩十卷。且園近集四卷。且園近詩五卷。燕邸日錄四卷。浮槎文集十一卷。浮槎詩集六卷。溪上草堂詩文集を撰べり。

李穩 は衡陽の人。晴江草堂集八十卷の撰あり。

江忠源 (略傳前にあり)の撰は遺集八卷。

楊超會 (略傳前にあり)の撰は楊文敏集十六卷。

廖元度 は長沙の人。楚風補五十卷。楚詩紀二十三卷を撰ぶ。

王錫光 は長沙の人詩義標準六十卷を撰ぶ

第四章 技術家

湖南の地又技術上の名士を出せしこと尠からず、さばれ茲には繁を厭ひて最趣味あるもの二三を記すに止めん

第一網 晉代

區純巧思

區純 は衡陽の人甚だ巧思あり、元帝の太輿中木室を造り又一婦人を作りて其中に居らしむ、人其戸を叩けば婦人戸を開き去れば戸に當つて再拜し還つて戸内に入り戸を閉す、又中に鼠市を作る、四方丈餘、四門あり、而して門中に一木人あり、四五鼠を縦ちて門を出てしめんと欲すれば、木人輒ち之を推掩す、門門此の如く鼠出づるを得ず、又指南車及木奴を作り穀を舂て米となさしむ、元帝其巧を聞き詔して尙方左校に補す

梁新二妙

第二網 唐代

梁新 は武陵の醫士也、嘗て洛宮に舟次す、時に富商の船あり、同じく泊し、中夜暴かに死す、天明に至て猶氣脈あり、新之を聞き一診して曰く此れ乃ち食毒也、兩三日前外食せし耶、僕對へて曰く主人人を訪ふこと少し亦他人に食せしことあらず、新曰く尋常の食物何をか嗜む、曰く好んで竹鷄を食し、毎年數百羽を下らず、新曰く竹鷄は半夏を食す必ず半夏の毒也、命じて糞汁を搗て之を灌ぎ、良久して蘇す、時に崔鉉洛宮を鎮し、聞て之を異とし、贈るに僕馬を以てし入京せしめ、書を朝に致す、聲名大に振ふ、仕へて尙藥奉御に至れり、一朝士あり之に詣る、新曰く何ぞ早く來り示されざりし、風疾已に深し、請ふ速に歸て家事を處置し天命を待てと、朝士聞て惶遽告退、馬に策つて歸る、時に鄜州の馬醫趙鄂なるものあり、新に京師に到り通衢に自ら姓名を榜していふ、醫術を攻むと、朝士馬を下て之に自己の病を告ぐ、趙鄂亦言ふ疾危しと、梁新の説と相同じ、謂つて曰くたゞ一法あり、請ふ速に銷梨を喫せよ、多少に限らず咀乾し、涎汁に及ばずして飲まば、或は萬一を希

ふを得んと朝士馬に策つて歸り書筒を以て銷梨を求め馬上に咀齧しつゝ行いて家に到り旬日たゞ銷梨を喫し頓に爽朗を覺え恙遂に作らず返つて趙生を訪ひ感謝し又梁奉御を訪ひ且趙生の教へし所をいふ梁奉御驚異し且曰く大國必ず一人の相繼ぐものありと遂に趙生を召し贈るに僕馬錢帛を以てし廣く推獎をなし官太僕卿に至る省郎張庭之疾あり趙鄂に詣る纒かに脈を診て其疾を知り曰く宜しく生薑酒一盞地黄酒一杯を服すべしと仍ほ梁新に謁す説く所皆同し皆言ふ此を過たは即ち卒せんと此酒を飲みて疾癒ゆ他日其友のために一杯を盗まる之を求むるも得ず其夕乃ち卒す時人之を稱して二妙といふ

楊惠之

柳傑生助

楊惠之 は柳の人柳の通惠禪師院に惠之手塑の九子母一堂あり每軀地よりして坐立牀具を以せず装繪采飾に至ては皆鈍色を以てし甚た華采ならず戸を開けは儼然觀る者皆以て生動となす嘉祐中大卿解程柳に守たり僚屬を率ゐて同しく觀る程は朴野の士其生態を見具工をして之を采飾せしめ又俸錢を以て牀坐を作り之に薦めんと欲し主僧に命す主僧從はず解怒つて之に罪を加へんとす僧曰く喫棒辭する所にあらず惜むへし四百年の手迹を壞了して大卿好事の名を損せんと解竟に奪ふ能はずして止みしといふ

第三綱 宋代

易元吉

易元吉字 は慶之長沙の人善く畫く初め花鳥に工みなり趙昌の畫を見るに及んで曰く世其人に乏しからずと遂に荆湖に游び探奇訪古幾ど狼狽と同しく游び口傳心繫の妙一々之を毫端に寫す又長沙の舍後に圃を開き池を鑿ち亂石叢葦梅菊葭菼を散布移植して水禽山獸を馴養し其動靜を伺ひ以て畫意に資す故に動植物を寫して其右に出づるなし而して尤も猿狼を畫くを喜ぶ評者謂ふ徐熙以後たゞ一人と治平中詔して景靈宮迎蓋御狼に畫き又神遊殿に牙獐を作り皆其妙を極む未だ幾ならずして復詔して百狼の圖を畫かしめ粉墨貨を賜ふ纒かに十餘枚を畫き時疾に感して卒す或はいふ畫苑能を妬むものゝ鳩する所となると宣和御府藏二百四十五圖あり別に猿狼孔雀四時の花鳥蔬果の寫生等あり世に傳はる畫上多く自ら長沙時教易元吉の字を署す黃庭堅爲めに易生畫贊を作れり餘杭都監應もと燕巢二あり元吉屏風上に一鶴を畫く是より燕復た至

第四網 明代

鄭元龍 字は雲從、瀏陽の人醫を以て名あり、病者元龍の至ると否とを以て自ら其生死を決す、或人其術を問ふ、元龍曰く天地の氣常に餘りあり、而して人の氣は常に足らず、惟た足らず故に餘りあるもの恒に其金を奪ふて以て居る、是に於て縱横馳突其病百出す、粗工は之に驚て以爲らく是人の餘りある也と、遂に從つて之を損す、天地の餘りを損する能はずして恆に人の不足を損す、是猶盜者か人の室を調りて其主人を執撻するか如き也、吾恆に厚く其主人を恤れみて其客を治す、是を以て病四至するも之に應ずるは恆に一也と。

第五章 湖南に關係ある歴代の人物

第一網 漢代 賈誼 — 司馬遷 第二網 三國 漢代 諸葛亮 — 關羽 — 趙雲

統 第三網 晉代 謝安 第四網 唐代 李白 — 杜甫 — 王昌齡 — 元結
— 柳宗元 — 韓愈 第五網 宋代 范仲淹 — 蘇轍 — 黃庭堅 — 岳飛 — 李綱 — 韓世忠 — 朱熹 — 張栻 — 魏了翁 — 文天祥 第六網 明代 王守仁 — 何騰蛟 — 華克純 — 蔡道憲 第七網 清朝 趙寧 — 韓湯衡 — 林則徐 — 張亮基 — 潘錫

湖南出身人物の梗概は以上説きし所により畧ぼ之を、其略を盡せり、猶剩す所は古來湖南の地に官たりしもの若くはこゝに流寓せしものにして特に湖南と密接の干係あるものこれ也、今茲に之を述へんとす、たゞ本章に擧ぐる人物の多くは邦人の能く知悉せるものなるにより、勉めて簡畧に従ふ、覽者山川の部に掲載しある諸人の作物と對照するを要す

第一網 漢代

賈誼 は雒陽の人、文帝の時長沙王の太傅となり、湘水を度つて賦を爲り、屈原を弔す、三年鴟鳥あり飛んで舍に入り、座に止まる、楚人鴟を命して服といふ、賈生之を傷みて賦を爲り、以て自ら廣ふす

司馬遷

第五章 湖南に關係ある歴代の人物

四三四

司馬遷は、は龍門に生る、河山の陽に耕牧し、年十歳にして古文を誦す、二十にして南江淮に遊び、會稽に上り、禹穴を探り、九疑を闕ひ、沅湘に浮へり

第二綱 三國漢代

諸葛亮

諸葛亮 は瑯琊の人、劉備江南を收め、亮を以て軍師中郎將となし、零陵、桂陽、長沙の三郡を督し、其賦税を調して以て軍實に充てしむ、

關羽

關羽 は解の人、初め劉備に従て江南の諸郡を收む、劉備西益州を定め、羽を拜して荊州の事を董率せしむ

龐統

龐統 は襄陽の人、劉備荊州を領す、統從事を以て、耒陽を守る、吳將魯肅劉備に書を貽つて曰く、龐士元は百里の才にあらず、治中別駕の任に處らしめは始めて其驥足を展ふるを得んと、備乃ち治中從事となす

第三綱 晉代

謝安 は陽夏の人、幼より公輔の望あり、朝旨に累違し、東山に高臥す、朝士毎に相

李白

與に言ふ、安石にして出でずんば蒼生を奈何と、後進んで揚荆等十五州の軍事を都督す

第四綱 唐代

杜甫

李白 は隴西の人、乾元元年永王璘の事を以て、夜郎に流され、遂に洞庭湖上に泛ひ、三峡を上り、巫山に至る、二年春、未だ夜郎に至らずして、赦に遇ひ、釋を得、還つて岳陽に憩ひ、巴陵に登り、置酒望洞庭、水軍の諸詩あり

王昌齡

杜甫 は襄陽の人、永泰元年蜀に遊て、高適に依る、適卒し、蜀中大に亂る、甫亂を荆楚に避け、湄塘を出て、江陵を下り、沅湘に浜り、衡山に登り、耒陽に客たり、曾て嶽廟に遊ぶ、大水遠に至り、旬日食を得ず、縣令自ら船を楫し、迎へ、還る、二年、牛肉白酒を啗ひ、一夕にして耒陽に卒す、時に年五十九、子宗武、湖湘に流落して卒す、孫嗣業、元和、中耒陽より、甫の柩を遷して、偃師縣西北首陽山の前に歸葬す

王昌齡 は江寧の人、龍標尉に貶さる、往返、惟琴書一肩、蒼頭をして、敗葉を拾はしめて、自譽す、溪蠻其名を慕ひ、時に長跪して、詩を乞ふものあり

結元

第五章 湖南に關係ある歴代の人物

四三六

元結 は河南の人、道州刺史に拜す、初め西原蠻、居人數萬を掠め去り戸を遺す僅に四千、諸使の調發符牒二百函、結人困甚しきを以て賦を加ふるに忍ひず、即ち上言す、臣か州賊の焚破する所となり糧儲屋宅男女牛羊幾んど盡く、今百姓十にもあらず、耄孺騷離未だ安んずる所あらず、嶺南諸洲の寇盜盡きすして守捉侯望す、四千餘戸未だ一の安靖なるなければ湖南まさに亂れんとす、請ふ百姓負ふ所の租税及庸使和市雜物十三萬緡を免せんと、帝之を許す、明年元結又奏す、正租庸外の所率は宜しく時を以て増減せんと、詔して可とす、結民の營舎を爲り、田を給し、徭役を免し、流亡歸るもの萬餘

柳宗元

柳宗元 は河東の人、禮部員外郎より邵州刺史に貶され、半道ならずして又永州司馬に貶さる、既に竄斥せられ地又荒蕪なり、因て山澤の間に自放し其堙厄感鬱は一に諸を文に寓す、凡そ宗元の文にして瑰奇絶特なる者は皆零陵に居る時作る所のもの也

韓愈

韓愈 は直隸昌黎の人、貞元十九年の冬出て、陽山の令となり郴州を過ぎ、刺史李伯康を知る、二十一年正月陽山より還り命を郴州に俟つ、伯康之を館す留まる

こと三月に亘る、伯康を祭る文に俟新命於衡陽、見秋月之三澂とは之をいふ也、秋末に至り始めて江陵法曹の命を受く、時に郴州にありて祈雨の詩及榔口の諸詩あり、榔より衡に至りて合江亭及謁衡嶽廟の詩あり、衡より潭に至り陪杜侍御游湘西寺及湘中の諸詩あり、これより洞庭に泛ひ阻風贈張十一の詩あり、岳州に至りて別賛司直の詩あり

第五綱 宋代

范仲淹

范仲淹 は吳の人、二歳にして孤となる、少にして志操あり嘗て安郷に讀書す、後進士に擧げられ參知政事に至る、諡は文正、寧宗の時衢州の劉恐、安郷に令たり因て其讀書の地に繪像を爲り祠を立つ、

蘇轍

蘇轍 は四川眉州の人、官端明殿大學士に至る、哲宗の朝事を以て落職し雷州安置に貶され、徽宗即位して永州、岳州に徙さる

黃庭堅

黃庭堅 は分寧の人、崇寧三年宜州に遷る、道零陵に出て三月己卯舟を浯溪に泊す、進士陶豫、李格、僧伯新、道遵等と同じく元結の遺蹟を尋ね中興頌の厓下に至り

岳飛

留宿すること三日詩を賦して壁に題す、後人之を小磨崖といふ

岳飛 は湯陰の人、潭州を權知し、荆湖東路安撫總管を兼ね、賊曹成衆十萬を擁し、江西より湖湘を徑道州に據る、飛の將に至らんとするをき、驚て曰く、岳家の軍來ると即ち道を分て遁る、飛茶陵に至り詔を奉して之を招く、従はず、飛賀州境に入り陽に茶陵に反て潜に遼嶺に趨き太平塢に至りて、其砦を破り、兵を麾て掩撃す、賊大に潰えて連州に奔る、是に於て張寬は賀連より、徐慶は邵道より、王貴は郴桂より至り招降者二萬に達し、武安軍承宣使を授く、又湖南北制置使に除し、命じて湖賊揚兵を招捕せしむ、飛先づ使を遣りて賊黨を諭す、黃佐曰く、岳節使の號令山の如し、之に敵す萬生くるの理なしと遂に降る、飛表して黃佐に大夫を授く、遣て湖中に至り、其乗すべきものを視て禽へ、勸むべきものは招かしむ、佐、周倫を襲殺し、其統制陳貴等を禽ふ、任士安の軍功無し、飛士安を鞭つて賊に餌せしむ、賊力を併せて之を攻む、飛伏を設け、士安の戰急なるとき、四もに起りて賊を撃つ、賊走る、飛小圖を袖にして都督張浚に示して曰く、八日ならずして賊を破るべし、浚曰く、何ぞ之を言ふの易き、飛曰く、水戰は我短にして彼の長なり、若し敵將に因り敵

李綱

兵を用ゐる其手足を奪ひ其心腹を離さは八日の内當に諸囚を俘にすべき也と、遂に鼎州にゆく、黃佐、揚欽を招きて來降せしむ、飛表して欽、武義大夫を授く、復遣り歸して余端劉詵等を説かしめ其衆數萬を降す、公方に舟を湖中に浮へ輪を以て水を撃ち官舟之を迎ふれば、輒ち碎く、飛君山の木を伐りて巨筏を爲り、諸港汊を塞ぎ、腐木亂草を上流に浮べて下水淺き處を擇び善く罵る者を遣つて之を挑む、賊怒て來り追へば、則ち草木擁聚輪礙して行かず、飛急に之を撃つ、賊港に奔り乃ち筏の拒くところとなる、官軍巨木を擧げて其舟を撞き盡く之を破壊し、云水に投ず、牛鼻禽へて之を斬り、餘會俱に降る、飛親ら撫慰し老弱を縱つて田籍に歸し、少壯を止めて軍となす、果して八日にして賊平けり

李綱 は邵武の人、湖廣の宣撫使にして潭州を兼知す、この時荆湖江湘の流民潰卒羣聚、盜をなし多きもの數萬に至る、綱悉く之れを蕩平し、上言して曰く、荆湖は國の上流、地數千里、諸葛亮之を用武の國といふ、今朝廷其東南を保有して西北を控取す、鼎澧、岳鄂の如き荆南一帶の如き皆當に重兵を屯宿し、形勢に倚爲せば、四川の號令をして通ぜしむべく、襄漢の聲援接すべし、乃ち中原を恢復するあらん

韓世忠

と議未だ行はるゝに及ばずして罷む
韓世忠 は延安の人、荆湖の宣撫副使となる。劉忠衆を聚めて白面山に據る。世忠急に之を撃たんと欲す。宣撫使孟庾可かす。世忠曰く、兵家の利害之を策する審かなり。參政の知る所にあらず。請ふ半月を期して捷を效さんと。遂に賊と對壘奕棋。張飲し壁を堅うして動かす。衆測る莫し。一夕賊營を周覽し、伏を設けて夾撃し、大に之を破り、忠の首を斬る。

朱熹

朱熹 は安徽婺源の人、紹興中南嶽廟を監す。乾道五年張拭を湘水の濱に來訪し、留まること兩閱月。將に南山に道をとりにて歸らんとす。乃ち拭及林用中と南嶽の遊をなし、凡そ七日にして經行上下數百里、更る唱酬して詩を得ること百四十九篇。光宗の時潭州を差知す。再び辭す。旨あり。長沙は巨屏賢者を得て重をなすと。遂に命を拜す。會々峒僚屬郡を擾す。人を遣り諭すに禍福を以てし。皆降る。勅令を申へ。武備を嚴にし。姦吏を戢し。豪民を抑へ。學校を興し。教化を明かにし。四方の學者畢く至る。

張拭

張拭 は浚の子。紹興の閒浚潭州に知たり。拭湖湘に來往し。城南書院に寓居し。妙

魏了翁

高峰に朱子と講學す。劉珙長沙に帥たり。嶽麓書院を修め。士を養ふこと數十人。拭に屬して其間に往來せしめ。告ぐるに古人爲己の學を以てす。又學を胡宏居に衡山に受く。朱子と南嶽に遊び。唱和詩多く百四十餘篇に至る。

魏了翁 は蒲江の人。胡夢昱等と共に李和知等に陥れられ。三官を降し。靖州に居住し。靖湖に至る。湘の士千里を遠しとせずして來り。從學す。乃ち九經要義百卷を著す。訂定精密先儒の未だあらざる所なりといふ。

文天祥

文天祥 は江西吉水の人。咸淳九年湖南提刑に除す。疏して滯淹を決し。一路留獄なし。巨寇を剿平し。道路肅清なり。是年の夏。故相江萬里に長沙に謁す。萬里從容として語國事に及ひ。惘然として曰く。吾老たり。天時人事を觀るに當に變あるべし。吾人を閱する多し。世道の責其れ君に在らん乎と。居ること一年にして難作る。

第六綱 明代

王守仁

王守仁 は浙江餘姚の人。正徳の初兵部主事を以て貴州龍場驛丞に謫せられ。道念州に出づ。虎谿山の勝を愛し。僧房に宿して月に彌る。其軒に名けて松雲といふ。

何騰蛟

沅陵の進士唐愈實之に従て遊ぶ嘉靖の初又其徒錢王張繆と俱に南嶽に遊び日に衡の士子と講學す從ふもの百餘人に至る

何騰蛟 は黎平衛の人崇禎十六年湖廣に巡撫たり時に湖北の地盡く失し只九月武昌を存し左良玉の大軍を屯し專横甚し騰蛟良玉と交歡し相安きを得明年五月福王立ち八月騰蛟に兵部右侍郎を加へ兼ねて湖南を撫せしむ大駐六年正月清兵長沙を陷る騰蛟絶食七日にして殉す永明王之を聞て哀悼し祭を賜ふもの九中湘王を贈り文烈と諡す

華宛綸

華宛綸 は江蘇無錫の人崇禎の間歲貢を以て醴陵縣を知す督師何騰蛟府を長沙に開き宛綸を擢して長沙府に知たらしむ後長沙守を失し宛綸乃ち髮を被て山に入り往く所を知らず

蔡道憲

蔡道憲 は晉江の人崇禎中長沙の太守となる十六年五月張獻忠の亂長沙守を失ひ道憲賊に執へられ賊酋はすに官を以てす切齒して大に罵る其縛を釋て之上坐に延くも罵ること故の如し賊曰く汝降らざれば盡く百姓を殺さん道憲痛哭して曰く願はくは速かに我を殺せ我民を害する母れ賊遂に奪ふべからざ

るを知り之を磔す其心血直ちに賊面に濺ぐ健卒凌國俊等九人隨つて去らず賊並に之を殺さんとす卒奮然として曰く願くは主の屍を瘞めて死せん賊之を許す乃ち衣を解いて道憲の屍を裹み之を南郊醴陵坡に瘞めて遂に自刎す道憲死する時年二十九太僕少卿を贈り忠烈と諡す

第七綱 清朝

趙雍

趙雍 は浙江山陰の人康熙中長沙府の同知に任ず聽斷明允郡中の大獄多く決す民隱の上達する能はざる者は爲に力めて大府に申し可を得て乃已む尤も文雅を以て吏治を飾り諸名儒を召致して嶽麓書院に肄業せしめ毎に霜天白菊の時に閣を開て雅集す或は夜を以て江を渡り尊酒論文其身の吏たるを忘るゝに至る手づから麓嶽志を輯し嶽麓御書樓を建て諸亭榭を點綴し官にあること四年清白一節後松江知府に擢せられ士民之を思ふ

林則徐

林則徐 は福建侯官の人道光十七年湖廣總督に任ず奏して辰沅道屬の苗匪屯務の事宜を籌り皆議の如く行はる時に鴻臚卿黃爵滋疏して鴉片を禁じ以て漏

張亮基

扈を塞がんと請ふ旨を中外の大臣に下して議せしむ、則徐乃ち利害を條上し帝之を嘉納す、尋て疏して湖南北の奸民鴉片を興販するを孥獲せし情形を報ず、重書之を褒美す、明年入覲し移て兩廣を督し雲貴總督に終る卒して文忠と諡す

張亮基 は銅山の人、咸豐二年湖南巡撫に任ず、髮賊長沙を圍むにより城に絶つて入り事を視、湘陰の舉人左宗棠を招きて幕府に入れ諮るに軍事を以てす、時に賊悉く城の南門外に萃まり、北堅城に臨む、援師東南に集まり連營相望む、惟た河西に重兵なし、賊方に船筏を據り浮橋を造る、督師徐廣縉湘潭に止まつて進まず、亮基數々提督向榮福興を移調して河西、龍回潭、土牆頭の諸險隘に營せんことを求む、皆應ぜず、將に自ら軍を督して往かんとす、陝西の知府江忠源請ふて先づ所部の楚勇を率ゐる壘を築き以て相持す、會々賊地雷を以て魁星樓側の城根を轟し城壞るゝこと數丈、副將鄧紹良兵を督して塔禦し城始めて完し、忠源渡河す、亮基歎して曰く事迫らんとするに即ち渡河せば人將に謂はんとす、巡撫城を出て、自便を取ると、吾以て行く可からずと、乃ち忠源をして馳せて湘潭に抵り廣縉に謁して形勢を陳説し、速かに長沙に來て諸將を調せんことを請はしむ、廣縉卒に

至らず、己にして、賊糧盡き龍回潭より竄走して城圍解く、僚屬賀を稱す、亮基獨り謂へらく賊絶地に趨かば盡く殲くすべし、願ふに一面を空しくして之を縱つ、洞庭を渡つて北行するが如くんば、患天下に及ばん、吾屬大局を誤る賀を言ふに忍びんやと、未だ幾ならずして、賊果して益陽に趨り岳州巴陵を陥る、是より先き長沙の圍解くるや、亮基疏陳して曰く、湖南邇來土匪數ば起り、政刑久しく弛み、民法を知らず、今にして治めざれば、異日禍發して恐らくは廣西よりも更に劇しきを視ん、請ふ法文を寬にし、州縣の便宜をからんと、帝之を可とす、則ち撤して所屬地方の利病及辨理の情形を條舉し、反覆之を訓飾し、遠ふものは之を罪す、又士紳を延訪し上下の情に通ずるを以て務となす、其後湖南の鄰氛四偃して、士氣強固に内患生ぜず、屹然天下の望を爲すものは、亮基提倡の力多きをなすといふ、擢して湖廣總督を署せしめ、貴州巡撫となりしか、劾せられて落職し、同治十年家に卒す、湖南の士民專祠を建てんと請ふ、巡撫王文韶聞して允可せらる

第六章 故事逸聞

三苗 蒼吾 衡山 禹碑 郴州 酒香山 衡州 洞庭湖 紫陽道
 蹟 炎帝陵 苗民 苗民交易 苗人 打石 苗族 際子 京 朱子 勇
 斷 王廷珪 岳飛書 貞姬 秋胡妻 陶公題古雪居詩 裴休碎畫
 王陽明五星硯 斑竹 義猴 李滄 朱子和張敬夫城南二十詠 岳
 陽樓龍畫者 長沙酒 九江 舜陵 五月五日 關雎生動 周子知
 龍

本編には諸種の奇事逸聞を集む、禹碑苗俗或は地理風土に屬し或は歴史掌故に屬するもの拉雜之を收む、たゞ探風者の談柄に資すと云ふのみ

三苗 周景式云ふ、柴桑彭澤の間は古への三苗國、左は洞庭右は彭蠡、今の衡岳潭の境にして、南海に三苗國あり、(路史)

蒼吾 梧の蒼吾縣、元始六年に蒼吾郡を開く、地は廣東より湘潭に至る、(路史) 衡山 は即ち南嶽たり、盤繞八百餘里にして七十二峯を包絡す、内に十洞、十五巖、

三苗

蒼梧

衡山

三十八泉、二十五谿、九池、九潭、九井あり、其峯は惟祝融最高し、朱文公此に遊んで詩あり、云ふ、我來萬里忽長風、絕壑層雲許盪胸、濁酒三杯狂氣發、朗吟飛下祝融峯、と、公山水に遊ぶを好み、會心の處に至る毎に輒ち童を呼んで白を浮ぶと云ふ、(五嶽游記)

禹碑

禹碑 岫嶼峯は高さ一千五百丈、上に禹碑あり、明の楊昇庵云ふ、古今の文士禹碑を稱述する者一ならず、然して劉禹錫は徒に其名を聞きて未だ其地に至らざる也、韓退之は其地に至りて未だ其碑を見ざる也、崔融は則ち之を見たるに似たり、朱晦翁、張南軒、南嶽に遊び、尋訪獲ず、夫の韓と朱張と一見を求めて得可からず、余三公の後に生れて乃ち三公の未だ見ざる所を見るを得、亦奇なり、(五嶽游記)

禹碑の墓文は今長沙の嶽麓山巔にあり、最初の墓刻本に係る、傳へいふ帝禹の刻なりと、九行九字内終りの一行は五字也、一種の象形文字にして解すべからず、明の楊慎等の釋文あり、今楊慎のものを左に掲ぐ

承帝曰咨翼輔佐卿洲渚與登鳥獸之門參身洪流而明發爾興久旅忘家宿嶽麓庭
 智營形折心罔弗辰往求平定華嶽泰衡宗疏事稟勞餘仲禮鬱塞昏徒南嶺衍亭衣

制食備萬國其甯窳舞永奔

他の沈鎡楊時喬郎瑛の釋文も大同小異なり、

禹錫の詩にいふ傳聞祝融峯上有神禹銘古石琅玕姿秘文龍虎形。

退之の詩にいふ岫巖山尖神禹碑字青石赤形摹奇又いふ千搜萬索何處有森森綠樹猿採悲。

郴州

郴州 郴は山を環らして州をつくる豫楚粵三省の險阨にして武を用ふるもの必争する所たり故に始皇十五萬の兵を以て五嶺を守らしむ今郴城の深濠猶存す項羽謂ふ古への帝者は必ず上游に居ると因て義帝を郴に遷し更に觀衛颯をして桂陽郡を守らしむ山を鑿ち險を開き遂に粵地に通ずること五百里馬般郴州を得て遂に嶺外を兼收し號して覇府と稱す宋將潘美南伐し湖南より兵を進め先づ郴州を抜く而して嶺南膽落ちたり

酒香山

酒香山 岳陽に酒香山あり相傳ふ古へ仙酒あり飲む者は死せずと漢武帝之を得東方朔竊かに飲めり帝怒て之を誅せんと欲す朔曰く陛下臣を殺すも臣死せず臣死すれば酒も亦驗あらずと遂に免るゝを得方朔の數語圓轉簡明なり意ふ

衡州

衡州 衡州は岡隴將に盡きんとして忽ち一峯特起し大磯の江中に浸すが如し

蒸水は邵陽より來りて其左を繞り瀟湘は桂林零陵より來りて其右を繞る而して皆合江亭の前に合し大略春秋の覇主が諸侯に號令して勤王せしむるが如し蒸湘は兄弟の如く同奔來會稟令載書し乃ち軌を同じうして以て朝宗す蓋し其形勝此の如し(范成大勝覽錄)

洞庭

洞庭湖 は天下の大觀騷人墨客奇を搜る者尤も衆し好句水は天影を涵して瀾く山は地形を抜て高し四顧疑ふらくは地無きが如くして中流に忽ち山有り鳥飛んで墮るを畏るべく帆遠くして閑なるが如き皆世に稱せらる然れども孟浩然の氣蒸雲夢澤波撼岳陽城に若く莫し則ち洞庭の空曠無際氣象雄壯目前にあるが如し杜子美の吳楚東南拆乾坤日夜浮に至ては胸中幾雲夢を吞めるかを知らざる也(西清詩話)

紫陽遺蹟

紫陽遺蹟 朱文公年譜を考ふるに遺事の長沙に係れるもの命じて八題となす

曰く麓山講學、衡岳同游、安撫湖南、諭降洞猿、更建書院、節制虎軍、考正禮儀、錄旌忠節、每題年譜を首に書し、工に命じ、分ち繪きて圖を爲らしめて各之が贊をなす、合して之を名けて紫陽遺蹟といふ、既にして成る、以て郡の庠生楊劍、陳大用に授けて閣の四壁に掲げしむ、夫の登て之を覽るもの尊賢尙徳の心を興起して其書を讀みて其道を學ばんことを冀へば是れ或は風化の一助たらん也、楊茂元紫陽遺蹟序

炎帝陵

炎帝陵 炎帝神農氏崩して長沙茶郷の尾に葬る、之を茶陵といふ、所謂天子の墓なる者也。

鄙人言ふ炎帝陵凡そ祭告に遇へば則ち數里の内聲あり、殷殷雷の如く人皆之をきく、此の如きこと數日にして禮畢て後止む、守土春秋の祀りは則ち否らず、諸を鄙令周君仕魁に詢ふ、云ふ任に澄んで己に兩祭告に遇ふ、共に聞かざるなし、殆んど孔子の「盛饌變色」の意の如し、神聖靈爽久しくして愈々赫たる此の如し、(瀟湘聽雨録)

苗民

苗民 文字を知らず、父子遞傳、鼠牛虎馬を以て年月を記す、暗に曆書と合せり、控

苗民交易

告する所のものあらば必ず土人を借ふて代書す、性善く記し、忘るゝあるを懼るれば繩を結んで契券となし、木を刻して以て信とす、太古の意猶存せり、近ごろ苗學を説くまゝ、知命の童子あつて入學し日に雜糧數升を負ふて師傳に就て句讀を授かり、默記して歸る、其中亦甚だ聰俊なるものあり、(永綏廳志)

苗民交易 苗民市に入つて民と交易するには牛馬をかり、土物を負ひ、雜糧布絹の類の如きを携て以て集場に趨き、糧は四小碗を以て一升となし、布は兩手一度を以て四尺となし、牛馬は拳數の多寡を以て價値を定め、老少に任せず、其法竹篋を以て牛の前肋をはかり其寬仄を定め、然る後拳を以て竹篋を量る、水牛は十六拳を以て大となし、黄牛は十三拳を以て大となし、名けて拳牛といふ、馬を買ふも亦老少を論し、木棍を以て比して放鞍の處に至り、地より數へ起して高さ十三拳に至るものを大となす、齒少にして拳多きは價やゝ昂く、これに反するものは劣れり、統て比馬といふ、期に屆れば鹽と易へ、蠶種とかへ器具とかへ、以て有無を通ず、父子兄弟、伯叔甥舅と雖、利を見れば則ち争ひ、財産を争ふて相殺すものあり、(永綏廳志)

苗人打石

苗人の鳥鎗製作極めて精、又打石の一技あり、童にして之を習ひ事な
ければ則ち羣聚し、指して某樹某枝に中る者を能となす、石を送る捷にして力あ
り、能く數十丈外に於て空中の飛鳥を取る、故に接鬪の時に當り、子藥己に盡くれ
ば即ち石を拾ふて人を撃つ、其傷亦重し(永綏廳志)。

獠族

獠も亦人也、之を異視すれば則ち異なり、之を同視すれば則ち同し、其種落
一ならず、男は衣背に紅織文あり、女は頭を紅巾に裹むもの之を紅獠といふ、白
は白獠といひ、黒きは黒獠といふ、男衣に花織文を負ひ、女頭に板を頂くもの之を
花板獠といひ、女頭に箭三枚を挿し、藍布を以て之を覆ふ、之を箭簞獠といひ、隨處
に遷徙し、山に逢ふて開墾するもの之を過山獠といひ、居に定處あり、民人と雜耕
するもの之を平地獠といふ、平地は熟獠也(防務五論)。

滕子京

滕子京、大才を負ふて衆のために忌嫉せられ、慶帥より巴陵に謫せらる、憤鬱頗
る辭色に形はれたり、文正之と年を同じうして友とし、善し、其才を愛し、後に禍を
貽すを恐る、然れども滕豪邁、自負人言を用ゆる罕なり、文正之を規するの隙なき
を患へり、子京忽ち書を以て文正に抵り、岳陽樓記を求む、故に記中に云ふ、不以物

朱子勇斷

喜、不以己悲、先天下之憂而憂、後天下之樂而樂、と其意蓋しあるあり(過庭錄)。
朱子勇斷、朱子潭に帥たり、一日趙丞相の簡己に嘉王を立て、上と爲す、首とし
て經綫を開て公を召すべしといふを得たり、朱子簡を袖中に藏し、竟に獄に入り
大囚十八人をとりにて立るに之を斬る、綫に畢て登極の赦至れり、蓋し赦至て大惡
の網を脱するを恐れし也(長沙府志)。

王廷珪

王廷珪、胡澹庵秦檜を斬らんと乞ひて、澠溪に貶せらる、王廷珪字は民瞻、詩を以
て之を送て曰く、癡兒不了公家事、男子要爲天下奇、と、亦辰陽に貶せらる、鶴林玉露
岳飛書、岳武穆飛兵を領して茶陵を過ぐ、郷人尹彥德、牛酒を以て軍門に謁し、軍
を犒ふこと三日、飛曰く、汝當に詩書を以て其子孫に教ふべしと、乃親ら一經堂の
三大字を書して之に遺る、彥德其言の如くす、子伯正、仲正、後果して登第せり(湖廣
通志)。

兵飛の書

貞姬

貞姬、楚白公勝の妻、貞姬、勝死して紡績して嫁かず、吳王其美をき、輜茀三十乘
を以て大夫をして聘して之を迎えしむ、辭して曰く、白公の生時、妾幸にして後宮
に充てらるゝを得、今は不幸にして死せり、願くは其墳墓を守りて天年を終らん、金

璧の聘、夫人の位、願開する所にあらざる也。妾聞く忠臣は借るに力を以てせず、貞女は假すに色を以てせず。既に死に従ふ能はず、又去て嫁すまた甚しからずやと、吳王之を義とし、號けて貞姬といふ(舊志)

秋胡の妻

秋胡妻 魯秋胡の妻、胡之を娶り五日にして陳に仕へ、五年にして始めて歸る。婦人の路に桑を采るを見て曰く、力田は少年を見るに如かず、采桑は貴郎を見るに如かず、吾に黄金あり子に與へんと、婦受けず、胡家に還て金を母に奉ず、母妻を呼ぶ、相見れば乃ち桑閉の婦也、婦曰く、色を見て金を棄て而して其母を忘る大不孝也、君が別娶に任すと遂に河に投じて死す(列女傳)

陶公題詩

陶公題古雪居詩 陶文毅公吳を撫す、夜太湖の東山に宿して題古雪居詩あり、いふ、古翠標門妙墨留、禪房深處徑通幽、窗連樹色雲生案、洞瀉濤聲雨入樓、遠有明湖窺一角、乍來絕頂豁雙眸、思恩莫訝鴻無迹、兩夜青山借枕頭、文毅是時新開の鵬鵠工程の查勘をなし、遂に東山に至り信宿して去る、此詩は即ち異日山中の掌故たり、故に之を存す(鵬鵠餘話)

裴休碎盎

裴休碎盎 裴休古を尙ひ奇を好む、曲阜の土人田を墾きて古器を得、盎と曰ふ、腹

三斗を容る、樸素古醜、篆字あり、九邑宰能く辨する能はず、兗州の書生八體の書を能くするあり、宰召して至る、盎を出し之れに示す、曰く大篆也、文に曰く、齊桓公會合於葵邱、歲鑄と、宰大に其説を奇とし、乃釐して裴公の門に致す、公以て麟經時の物以て古を言ふべしとなして之れを寶とす、後公貢舉を掌る、出して以て諸門生に示す、離立環觀、迭辭以て賛す、惟長沙の劉舍人峴以て當時のものに非ず、近世の矯作なりとなす、公悦びずして曰く、果して説ある乎、峴曰く、某幼にして邱明の書に専ら也、具さに小白桓公の諸侯を葵邱に九合するを載す、是第八盟なり、又禮經を案するに諸侯は五月にして葬り、同盟既に至て然る後于然として卒哭す、卒哭して然る後謚を定む、則是葵邱の役は實に生前にあり、謚を以て稱するを得すと、公悟り命して擊碎し、乃ち爵を擧げ歡を盡して散す(唐闕史)

陽明の五星硯

王陽明五星硯 平江縣志にいふ、國初縣の東關に井を掘り一硯を得、正方にして石色青く白點五あり、高さ四寸、廣さ兩寸有奇、上に小篆、五星硯銘の四字を刻す、左傍に「正徳」と署し、年缺く、右に「春王正月」と署す、背面に銘を隸書す、曰く、五氣五行、五常五府、化育紀綱、無不惟五、石涵五星、上應天數、其質既堅、其方合矩、蘊籍英華、包涵今

斑竹

古、宋に王守仁識と署し、小印は陽明と曰ふ、今其井を硯池と名く、井硯は尙鍾氏に存す、想ふに正徳の初、陽明劉瑾に忤つて貴陽に謫せられ、道長沙を經たり、長沙は壤を平江に接す、此硯は其行囊より遺失せし所のものか

斑竹 竹に黒點ある之を斑竹と謂ふは非也、湘中の斑竹は生時に方り、每點の上に苔錢ありて之を封すること、甚だ固し、土人竹を斫つて水中に浸し、艸稊を用て苔錢を洗ひ去れば、則ち紫暈爛斑愛すべし、此れ眞の斑竹也、韓愈曰く、剝苔弔斑林、角黍餌沈冢、是れ也、魏泰臨漢隱居詩話

義猴

義猴 嘉慶丙寅永興縣十四都に弄猴戲者ありて死す、猴ために人を倩ふて棺を具へ、且身を以て葬に殉す、邑人馬步青爲めに義猴行を作つて以て之を弔す、猴能戲、猴有義、猴戲猴之常、猴義人所異、人仗猴戲作生涯、猴隨人兮到人家、猴忽幻作人態度、衣曳錦繡帽烏紗、人歌猴舞猴得粟、人既釜人食、猴食不自由、人遺猴兮去黃土、猴見人來、猴拜塵埃、猴牽人衣人趨起、人見人徘徊、猴向人出涕、手作買棺勢、人謂苦無錢、猴出錢盈千、錢少人弗受、猴復牽來狗、狗在昔時作馬騎、今向人家去吠守、復作手勢、頻丁寧慎母烹狗充腹口、須叟棺買至、觀者盡人類、猴以杖授、人莫解猴意、猴意依故主

李潯

死生不可棄、寧隨故主死、羞向新主媚、杖在人手人嘗嘗、猴自奮軀納棺中、人驅猴去猴復來、猴聲倍哀氣倍雄、一似俠客赴難烈、一似孤臣報國忠、嗚呼人生資猴戲、嗚呼人死賴猴義、嗚呼猴戲祇像人、嗚呼猴義人非易、梧州志

朱子二十詠

李潯 は長沙の人、篤詠甚だ著はる、水聲長在耳、山色不離門、の如き、又埽地樹留影、拂牀琴有聲、の如き、人口に膾炙す、金唐詩話

朱子和張敬夫城南二十詠 朱子張敬夫に和する詩、城南納湖、麗澤堂、書樓、蒙軒、卷雲亭、月榭、琮琤谷、聽雨舫、采菱舟、南阜の二十詠、墨迹字法俊逸にして、大に晋人の風致あり、而して詩の清遠亦宋人の及ぶ所にあらず、元尙書之を婺源に得、以て常熟錢伯廣に贈る、錢氏城南に居り、遂に城南齋を構へ、詩を其中に刻す、而して黃文獻潛之が記を爲れり、楊廉夫に至て、又敬夫の原詩を其後に録す、惜むらくは當日の張宣公の手書を待て、文公の書と合して一卷とせざるのみ、善化縣志

岳陽樓記

岳陽樓記 范文正公、岳陽樓記を作るに、對語を用ゐて、時景を記す、世以て奇となす、尹師魯之を讀て曰く、傳奇跡のみ、傳奇は唐裴鉞が著せる小説也、后山詩話

能畫者

能畫者 周鳴謙六皆畫を善くし、名一時に噪かし、嘗て謂ふ、鳴を畫く大なるもの

は易く小なるものは難しと、羣雛を池中に蓄へて日日之を玩ひ筆を下すに生けるが如し、又嘗て蒼蠅の群集團を成すを畫く、之を略觀すれば一片の青綠閉ゆるに朱點を以てす、細玩すれば頭足鬚羽一一畢露し、纖毫も混するなし亦絶技也、他の山水鬪猴の如き皆工妙を極む得る者之を寶とす、また羅定之は善く山水人物を畫く、尤も翎毛に工み也、一時の大家争ひ延て之を館に致し、或は數月にして畫一軸を成す、嘗て雞を畫けるを見る、鬪ふ者、鳴く者、啄む者、争ふて一物を啄み、相持する者、逐ふ者、飛蟲を見頭を引て向ふ者、極めて生趣あり、時に雞聲を聞く、儼として畫中より出づる也、又嘗て雀の梅梢に群集せるを畫く、立つ者、奏する者、背する者、嚮ふ者、群を逐ふて飛ふ者、飛ひ來り枝を抱て集り、未だ定らざる者、下集身を攪かし上らんと欲する者、別枝に躍過する者、梅蕊を啄み墮し俯して睇る者、鬪て地に墜つる者、駭て顧るもの、一一什什、窮神盡態、一も相似るなし、技に神なるなり、(長沙縣志)

長沙酒

長沙酒 長沙の酒古より著名なり、謝莊雷賦に所謂、飲湘吳之醇酎とは是也、近日の商賈碧湘門外の江水を以て酒を造る、吳中の佳釀に減せず、(三長物齋長説)

九江

九江 朱子謂ふ九江孔般と正に以て其吐吞壯盛浩として津涯なきの勢を見る、尋常の分派小江の當るべきにあらず、此に繼て後、夫の沱潛雲夢に及び則ち又其決して今日の江州甚だ之に遠きにあらざるを見る、下流九江といふ者は九水の所匯のみ、九河は其分を主とし九江は其の合を主とす、河は一よりして分れて九となる、故に播といふ、江は九よりして一に合す、故に段といふ、其未だ合せざるに當り、獨り九河に非ざれば江の名を冒すを得ず、即ち漢と彭蠡と亦江の名を冒すを得ざる也、洞庭にあらずんば其れ能くこの大觀あらんや、(王泉之九江攷)

舜陵

舜陵 舜陵は本尙書に始まり禮記に詳核に墨子、離騷、史記の諸書に雜見す、舜典に書して曰く、陟方乃死、禮の祭法に則ち曰く、舜勤衆事、而野死、檀弓に曰く、舜葬蒼梧之野、墨子は則ち曰く、舜道死南紀之市、史記には則ち曰く、舜南巡狩崩於蒼梧之野、葬於江南九疑、朱子注離騷九疑にも亦曰く、九疑舜以葬と蓋し三千年を歴て一異辭なきもの、唐の昌黎韓子孤り竹書紀年に據りて、帝王之崩、曰陟、因謂陟爲上升、如舜南巡、則地勢東南下、宜言下方、不應言陟方と斷じ、釋文を爲る、蔡氏尙書其説を取る、後儒又孟子卒於鳴條の一語を援き、遂に經傳中確然據るべきものなきとし、羣

な謂ふ九疑は必ずしも舜陵あるにあらず、而して陟方は斷々として南遊にあらずと、廷燦竊に謂へらく五十載と其年を書す、猶堯典の二十有八載といふか如きのみ、乃ち死して崩と書す、猶堯典に乃ち殂落といふが如きのみ、陟方の二字を錯り其の事を書す則ち是年適ま南方に巡行し苗民に事あるのみ、何を以て之を知る、呂刑に皇帝下民の鰥寡を清問し苗に僻あるを以て之を知る也、夫れ舜徒に蒲坂に垂拱し遠く洞庭彭蠡の鰥寡を徵發し、數千里外に走りて一に苗情を殿陛に問はんや、吾其の必ず然らざるを知る、蓋し苗民命を用ゐざるにより已に堯の世に三危に竄す、而して其の後留つて未だ竄せざるもの又頑として工に即かす知るべし、三苗は虞にあり、末年に至り南巡にあひて後靖きを舜時に適ま百有十歳にして死して茲に葬る、吾蓋し呂刑を讀んで舜典禹謨の通證を得、并に五十載陟方の確證を得たり、陟方の解定まれば則ち舜の陵も亦定まる、(長沙余廷燦存吾文集)

荆楚歲時記 には屈原五月五日に汨羅に投すといひ、隋書地理志には五月望日といふ、今荆襄の競渡は望日を以てすといふ、(湘陰圖志)

五月五日

圖婦生動

圖婦生動 唐の進士趙顔畫工の處に於て輓障に一婦人を圖せるを得、甚だ麗なり、顔曰く如何にしてか生かしめん、願くは納れて妻となさんと、畫工曰く、余の神畫也、此名は眞眞、其名を呼ぶ百日、晝夜歌まされは必ず應ず、應ずれば則ち百家練灰酒を之に灌かば即ち活さんと、顔其言の如くす、婦果して障を下り言笑飲食常の如し、年を逾へて一子を生む、其友曰く、此れ妖也、余に神劍あり、之を斬るべしと、其夕眞眞泣て曰く、妾は南嶽の仙也、人の爲めに形を畫かれ又君に呼はる既に君の願を奪はず、君復妾を疑ふ更に住むべからずと、其子を携へて即ち輓障に上り前に飲める、百家酒を嘔出す、其障を視れば惟一子を添ふ、(松窗雜記)

周子龍を知る

周子龍 周滌溪、合州に判たる時、嘗て人と對棋す、一老人ありて旁觀し口涎を吐き香氣人を襲ふ、公驚て曰く、汝は龍也、何故に來る、此老人曰く、何を以て之を知る、吾れ聞く龍涎極めて香し、汝か口中落す所の者はこれと、須臾にして大雨雷電、老人龍に化して溪に從て去る、公方石二十四片を取りて溪口を鎮す、今の通曉橋は是れ也、(拊掌錄)

第六編 雜纂

第一章 基督教と湖南

基督教と湖南これ尤趣味ある題目なりとす、基督教徒が長城外無人の沙漠地方に迄人を派し教會堂を建立し異教の迫害と肉體の危險をもつともせず、彼等の所謂福音の宣布に従事するや、昂めたりといふべし、然るに獨り湖南省は支那の中央部に位置しながら、曾て其侵入を許さず、各國傳道教會の牧師が愈之に侵入せんとすれば愈之れを排斥し、有名なる周瀚は排斥派の首領として、久しく各國牧師の膽を寒からしめたり、されば一八九七年迄は湖南に一の宣教師なく、又一の教會堂なかりき、一九〇〇年「支那内地教會」より發行せし地圖に由り、初めて常德に「カトリック」プロテスタントの兩教會堂、長沙、岳州、湘潭、衡山の各州縣に「プロテスタント」辰州、茶陵に「カトリック」教會堂を置く記號を附したるも、岳州を

有名なる周瀚は排斥の首領

辰州教案

基督教徒の勝利

長沙を以て根拠とす

除くの外は概ね教徒たる清國人の住居するに過ぎずして、外國牧師は一年に一二回竊かに之を巡回し、夜間纔かに街上を潜行し、一ヶ所に僅々一二日の外滞留するを得ざるの情況なりき、

一九〇一年辰州教案の起るや、英佛獨の各國敢然としてその罪を問ひ、英獨二國は河川砲艦を常德府なる現場に派し、又上海にありし英國艦隊の一部は、漢口迄溯航して之れを威嚇し、中央政府と嚴談の末、遂に犯人の處刑、都司の斬首、地方官の更迭、賠償金の交付、教會堂の再建等、あらゆる贖罪をなさしめ、全部基督教徒の勝利に歸したり、曾て日清通商條約に由りて長沙の開港せらるゝあり、又日本及英國航海業者の汽船の航通をこゝに開始するあり、機逸すべからずとなし、數十年來排斥阻遏せられたる各國宣教師等は、凱歌を奏して一時に進入し來れり、今や彼等は長沙を根據として盛に其事業を經營しつゝあり、倫敦教會は北門に支那内地教會は南門に「アレキサンダー」は西門に、又東門には信徒張某各其の居を構へ中央の良區には「ユニオン」エバンジリカル、ミツシヨン「エスレーア」アメリカン、エビスコバル、及「那威ミツシヨン」の各派出員あり、中に

外國宣教師の
名は男女四十

布教の前途

支那人中の卓
越したる人民

も、デビス夫妻、ドクトル、マクホソ、夫妻及、ユナイテット、エヴァンジリカル、チヤ、ミツシヨンの、フユースレー夫妻は市中の良好なる位置に居を占め又支那内地協會の、ドクトル、ケッラー夫妻は、壯麗なる中央會堂に住居せり、彼等は現に男女四十名に近き各國の宣教師を長沙城内に有せり、又其語る所によれば、彼等は早くも湖南内地の各州縣に其手を展ばし、現に省内六十三縣中、一縣を除くの外は各縣皆一人の宣教師を有すといへり、又以て如何に其力を此方面に用ひつゝあるかを見るに足れり、

基督教の果して今日の儘にて、湖南に成效するや否、湖南人が果して之を信仰少くとも排斥阻碍せざるべきや否やは、今日逆睹し得べからず、而かも當年周瀚の如き強有力なる排斥の首領なく、隨て其熱度も揚らざるに相違なく、而して湖南に入る宣教師の何れも、小心翼翼、湖南人を以て支那人種中の卓越したるものとなし、各自の舉動に格別なる注意を拂ひつゝあるは、事實として注目の値ありとなす、

左に掲ぐる一篇は、一九〇四年漢口に於て開會せる中央支那宗教出版協會の年

會に於ける記事の要領にして、湖北湖南地方に於る宗教出版販賣事業の成績を報告せるに過ぎざれども、亦以て如何に彼等が熱心、耐忍、屈辱、困難と闘ひて、傳道に従事せるかを知るに於て、思半はに過ぐるものあり、抑も彼等が所謂傳教の眞意義如何、其是非、效果の有無等に就ては吾人別に説あり、茲に陳ぶるの要なきも、彼等の進むあつて退くことを知らず、十年斯の如く、二十年斯の如く、三十年五十年亦復斯くの如く、努むるを知て倦むことを知らず、又其教派の複雑なるにも拘らず、能く整然として一致せるは、吾人本邦人の短處と相對して、威服の外なし、彼等は年會に於て宣言して曰く、最良の思想は集合せる考慮の結果なり、一致は乃ち天國に近づく捷徑なりと、又曰く、余、マルチン博士は、ジョン博士と共に此演壇に立ちて五十年の支那に於ける生活を思へば今日の狀態は實に欣躍に堪へざるなりと、歐米人は一の「ロバート、ハート」を誇りとするにあらず、無名の「ハート」は十百を以て數ふべし、吾人同胞亦少しく省みる所あれ

千九百四年漢口に於ける中央支那宗教出版協會の年會

祈禱週間の終る一月第二金曜日、實に此協會の會日なり、時や正に各處に散在

歐米人は一の「ロバート、ハート」を誇りとするにあらず

せる宣教師の都會に集中せるに際し、恰も此地方の傳道的勢力を一時に發現するに似て、各々相競ふて接踵來集するも亦無理ならず、

午前十時半開會し、グリッフィス博士議長席に著く、會場の廣濶なるは來衆の多數なるに相應して壯觀を呈すること一層なりき、來會者の中には一人も官吏又は實業家に類するものなく、唯多數の宣教師とマーチン博士あるのみ、此の現象は果して何れを責むべきやは疑問なれども、兎に角宣教師團體と商人とは相互に冷淡なるものなる事は事實として認むべきに似たり、

協會事業の年報はアダムス師によりて朗讀せられ、其報告する處に依れば前年の成績は實に佳良にして、乃ち出版物は二百十七萬一千六百五十五の多きに達し、寄附金額は二千三百二十七兩に登れり、元來協會は別に會費を收納せざるを以て、會のため必要ある時は會員は喜て寄附をなすを躊躇せざる也、而して收支合計に於ては収入の支出に超過するを見る、此種の會合に於ては普通支出の收入に超過するを常とすれば、此の如きは異數と謂て可なり、かくてアダムス師は書籍購入の事を謀り、終りて各所より來れる通信の興味多きものを朗讀し、各自

宣教師團體と商人

出版物の數二百十七萬餘に上る

三千五百冊の聖書と三十二萬餘冊の出版物

異教の迫害と肉體の危険

の擧げたる成績を報告して、此未曾有の好報告を終りたりき、

スパーハム師は次で立て協會の特別の事業としての「ゴルポーツル」に關する報告をなせり、此事業に就ては中央に於ける傳道會各々一定の人員を備へ之を監督するものにして、師の報告する所によれば湖北及湖南の各所に於ける「ゴルポーツル」は其數凡そ七十人にして、此等の人々は此方法により約三千五百冊の聖書及び新約全書に加ふるに三十二萬八千七百六十六冊の出版物を販賣し、年々其數を増加するの勢あり、地方官吏及人民一般に好意を表し、曾て一冊を販賣するの勞力は以て今日五冊を販賣するに足り、研究者の數は次第に増加し、この結果として地方教會堂設立を見るに至れりと、而も全然些の困難なくして進捗を見つゝありといふに非ず、時に他教徒の迫害あり、肉體上の危険あり、或は惡徒の金品を掠むるあり、著々平易に事業の進歩を見ると、斷言するを得ずと雖、之を全躰より觀察すれば、昨年の成績は實に良好にして、今後格別の障礙なくんば、今より十年の内には異常なる發展を見るを得べきが如し、

亞米利加傳道協會のルーツ氏は立て前委員の爲せる決算及報告には異議を表

清國に於ける
傳道の困難

中央支那月報

一致結合の力

信者たる土人
と共にす

第一章 基督教と湖南

四六八

せざる旨の決議案を提出し、其理由を説明して曰く、清國に於ける傳道の困難は實に非常なり、國が一種特別なる文明程度にありて其各人性質の特異なる、其宗教的信念の異なる、一として事業普及に障害を與へざるはなし、就中其思想の全然異なるは困難の最も大なるものなり、而も漸く此等の困難を排除して協會の一致は益々鞏固となり、コルボレージの事業は次第に好結果を呈し、出版物の流布は其數を加へ、百尺竿頭更に一步を進めて、中央支那月報を發刊するに至れるは實に非常の進歩にして、此事業に關係せる人々に對する感謝の辭なきに困しむ、彼等の少壯時代は全然此事業のために費されたり、而も若し彼等が個々に働作するとすれば決して今日の如き良成績は得べからず、彼の日曜學校團體、青年會、基督教青年會の如き皆一致結合力の生みたるものに外ならず、最良の思想は集合せる考慮の結果なり、一致は乃ち天國に近づく捷徑なりと、フーラン師はこの決議案賛成を表し、且英國及他の外國の聖書協會の書籍頒布と本協會の事業とを比較して協會の進歩の多大なるを擧げ、昔時は其出版物單に異教徒の改宗の目的のために出版されしも今日は改宗せる基督教信者のた

本國委員の助
力

めにも發刊さるゝに至りたるを賀し、昔時は單獨に傳道に従事せしも今日は盡く基督教信者たる土人と相合して普及に勉むるに至りたるを説き、書籍出版の基督教普及に偉大の効果あるを述べたり、ウエスレーヤン教會のワレン師は本國出版協會及其會員に對して、感謝狀を送る決議案を提出し、且曰く、從來當協會員に對し時々緩慢粗陋の言辭あるは之を認めざるを得ず、然れども本國委員は悉く繁務に従事するの人にして且つ出版物に留意する最も到れるを以て、時に緩慢となり、時に劇務のため充分注意する能はざることあるを諒とせざるべからず、況んや資本維持に就ての勞甚だ大なるは言を俟たずと、師は自己所屬教會が事業維持のため寄附金をなす先驅たりしを喜び其例を繼がんことを望みて壇を下れり、此決議案に賛成してマーチン博士は述べて曰く、一個の亞米利加人としては余は英國出版協會の寛大自由なるに驚嘆するもの也、而も協會の方針たる唯漫然之を爲すものにあらずして先づ豫め其結果を豫測して之を行ものなり、協會の事業の方法は英國人の世界に於ける最良の財政家たる特質を發揮して最も好

結果を収め得べき處に其力を用ゆるを證するものなり、此點より見れば支那は最も好望の地にして、現今風雲の暗懨たるものありと雖、前程に光輝ある將來を有するものといふべし、今や各國の視線は支那に集注して、時局頗る切迫せるもの、如しこの結果は往年日清戦争の如く傳道事業に妨害を與ふるやも計られずと雖、此老帝國も漸く巨人の醒むるか如く覺得し來り、彼日本か短日月に長足の進歩を爲せし如きを學ぶ能はざるべきも、其昏睡の状態に非ざるは之を斷言し得べし之をじて漸く眼を開て四隅を顧みしむるは書籍により開發するに如くなし、支那國民は讀書人種なりと稱すれども其讀書力淺薄にして能く文書を了解するもの甚た少し、而も政治上の變動は漸く彼等に打撃を加へ、日本より新文明を輸入して泰西の風氣漸く彼等の解する處となりしもの、如し此の如きは乃協會事業を一層進捗せしむる原因なりといふて可なりと、師は壇を下るに臨み先づ宗教上の出版物に多少地理歴史的材料を加味して宗教の起因せる處を明かにし、同時に一般教科書に宗教的分子を含有せしむるの必要を説き終りに自己がジョーン博士と共に此演壇に立ちて五十年の支那に於ける生活を

日本より輸入する新文明

支那に於ける五十年の生活

思へは、今日の状態は實に欣躍に堪へざるを説き博士も同感なるべきを述べて著席せり、

「ロンドン教會附屬のアイノルド、フォスター師は次年の役員選舉に付て謀る所あり、且支那國民を基督教民たらしめ、支那國語を外國語に翻譯するの困難の大なることを述べ、青年傳道者は最初より銳意之に注意して希臘原本と支那語聖書と相對照して研究するの必要を説き、他日其利益の大なるを斷言せり、

長沙派遣の
トソン氏

長沙派遣のダブルユー、エッチ、ワトソン師は此決議に賛成を表し述べて曰く、一年前余は出版協會委員の一員たりしことありと雖、メソヂスト派の慣例に従ひ湖南に轉任を命ぜられてより以來、基督教牧師としての効果は兎も角、出版物流布には多少の貢献をなしたるを信ず、乃ち昨年は自ら百七十五弗に登る出版物を販賣し、同派遣員たるクーバー氏は二百弗に登る發賣を了せり、湖南に於ては事物漸く其面目を改め、長沙に於ける集會には三十名の宣教師の出席を見るが如き湖南に於ける一縣を除く外は皆各縣一人の宣教師を有するが如き、盡く進歩の兆にあらざるはなし、長沙城内には十以上の傳道協會存在し、而も漸次増加

湖南布教の状

の傾向ありと師は出版物販賣を名譽ある職務なりと信する旨を述べ、未だ國語に習熟せざる間は充分に職務を盡すを得ざるも此事業は何時たりとも之を行ふを得るを説きたり、此方法は師をして直接なる關係を一般人民に生ぜしめ、他の所謂教師より學ぶよりも一層速に言語に通曉するに至る利益を得せしめたり、二三宣教師の如きは親しく出版物を販賣するを以て面目を毀損するものとなす如き愚見を有するも彼等は實に教祖基督が這般面目を裝はざりしを知らざるものなり、況んや書籍は何處までも便益にして邊陲の地、土語の困難なる所にありても能く之を解せしむるを得べく、宣教師の入りにて談話を試むるの時を得ざる、路傍の茶店の多數人民の集合する處と雖、亦其目的を達するを得、蓋し何人も片本よく多大の効果を生ずるを想像する能はざるべし、大冶縣に於ける「ウエスレーアン」傳道會は「福音なる一冊の書卷により改宗して基督教徒となりたる人々により其呱呱の聲をあげたり、師は今日の如き一般人民が競て相購ひ之を讀まんと熱望する際に當りては特に此書籍流布の效果あるを益々信するに至れりといへり、

生氣ある博士の演説

會長ジョン博士は最も生氣ある演説を以て此會の終局を告げたり、曰く、本會に於ける幾多の報告及び演説をきくもの誰か此協會の事業の有力なるに驚嘆せざるものあらんやと、次で博士は其出版物の増加せるを數字にて説明し其出版事業に他の助力を仰がざるのみならず、各自夫れ夫れ寄附金を以て其維持を計りたるを述べ、博士所屬の倫敦教會の事業に及び、洗禮を受けたる人の數及教會の建設されしを報告し、或宣教師の如き其改宗教徒等の數多きに過ぐるを訝るを駁し、今日迄の困難は果して何を意味するや、若し此數字の示す如き結果を得ずとすれば過去の勞苦は半ば水泡に歸するものなりと切言し、此好果を得たるも其原因は、即ち、コルボットル制度にあるを斷じたり、而も將來如何に發展するやは今日に於て豫言すべからず、露國の行動は或は日本と于戈を交ゆる原因たることあらん從て支那は此禍亂の裡に沒せられて傳道事業を一時杜絶せらるゝやも計り難し、希望する所は平和にあり、吾人をして今後平和なる十年間を得せしめよ以て大なる發達を遂ぐるを得べし、年と共に漸次歩を進め屈せず、撓まずんば効果期して擧ぐるを得べしと、

「コルボットル」制度ノ効果
平和なる今後
の十年間

閉會に先だつて二萬兩の集金は了せられぬこれ亦未曾有の高額なり、例年會は午前十時半に開會し、晝餐時迄休憩することなく繼續するを常とすれど當日は晝餐時に小憩をなし、午後四時三十分閉會せり、往昔牧師が沙時計にて時を計りつゝ説教をなせし時代に若しも沙時計の最後の沙片の落下し去るに際しては會衆に告げて斯くいふを常とせり、兄弟達更に他の砂時計を以て之に代へんとかくて彼は再び説教を始むるなり、當日の年會に來集せる兄弟達は實に二個の砂時計を要したり、而も其初めのものも終りのものも其全きに於て一なりき、かくて協會の年會は首尾整然、最も圓滿にその閉會を告げたり、

第二章 粵漢鐵道と湖南郷紳

粵漢鐵道に關する湖南人の爭議はその議論の堂々として運動の盛なる近時の快聞に屬せり、同鐵道に關する條約は元來米國人との間に成り、該米人たる合興公司は期限を過ぎて起工せざるまま四年を経過したる曉き清國政府の承認を

經ずしてその株券の過半を白耳義人に轉賣せるより紛議を續出し、白耳義人の背後に佛國あり佛國の背後に露國あり之れ即ち東三省の前轍を蹈むものにして、中原の腹地を虎狼の侵佔に任せ、粵漢鐵道に加るに今又本線を以てし、南北を直貫する二大鐵道を擧げて盜手に委するものなりと絶叫して湖南人の憤激躍起したるは蓋し當然といふべし、

この運動は昨年四五月の交より起り今尙ほ確然たる落着を見るに至らず、其の結局如何は頗る重大の關係を有するを以て吾人の注意を怠らざる所なりとす、本件に關する論議評論は頗る多きも今は姑く省畧に従ひ、茲にはたゞ昨三十七年六月湖南郷紳龍澆霖、王先謙、張祖同、王之春、候爵曾廣燮、候爵左念忠、馮錫仁等六十四名の連署を以て總理衙門に致したる公書を譯出す、彼等は之の書を中央政府に呈出すると同時に之を天下に發表して廣く輿論の後援を求め、廣東人も亦憤起して一致の運動を取り一時中外の耳目を聳動せしめたり、吾人は其是非成敗を問ふに先たち彼等が國權國利の保持に熱心にして深く遼東前轍の邦家の安危東洋の和平に及ぼしたる禍亂の現状に鑑み、悚然として懼れ慨然として起

ちたるに滿腔の同情を有するもの也(附錄策五參看)

粵漢鐵道ノ佛國ノ資本ニ移ラントスルヲ憤激シテ

湖南那紳ヨリ總理衙門ニ呈出シタル公書ノ大意

竊カニ查スルニ粵漢鐵路ハ癸ニ光緒二十四年ニ於テ駐米公使伍廷芳ニ依リ米國ノ合興公司ト立約シ英金四百萬磅ヲ借入レ築設スヘキ旨ヲ訂結セリ續テ光緒二十六年六月督辦大臣盛宣懷ヨリ右借入金額尙不足ナルヲ以テ更ニ米貨四千萬弗ヲ借用シテ興辦スルコトヲ約セリ該續約ハ其條項何レモ借款ノ利益ニ關シ微トシテ至ラザルナク而シテ主權ハ一ニ之レ米國公司ニ屬セリ後患已ニ勝ゲテ數フベカラズ然レドモ果シテ能ク原約ニ照シ五年以内ニ工ヲ竣リ且ツ此契約ヲ他人ニ轉與セズンバ則チ今日早ク已ニ該鐵道ノ竣成ヲ告グベキノ秋ナリ紳等亦何ゾ別ニ異詞アラシヤ今乃チ立約後四年ヲ經テ未ダ何レノ日カ起工スルカヲ知ラズ屢バ起工ヲ延期シ續約第四條ニ記載ノ十二ヶ月後起工セザレバ本契約ハ廢紙タルベシトノ條項ニ違背セリ且ツ近日聞ク處ニ由レバ米國公司ハ粵漢鐵道線路中ノ北段長沙ヨリ漢口ニ至ルヲ以テ私シニ白耳義人ニ售

レリト云フ而シテ買受人ハ名ハ白耳義人ニシテ其實ハ佛蘭西ノ資本ニ係リ去年已ニ測量ヲ行フコト二回今將サニ來ラントスル工師モ亦測量師ト共ニ同ジク佛蘭西人ナリト

查スルニ株式會社一般ノ原則トシテ株券ヲ多ク所有スルモノヲ主トナス株券ノ去ル處權利モ亦之ニ隨フ然ラハ則チ名ハ米國ニシテ實ハ白國名ハ白國ニシテ實ハ即チ佛國ナリ將來鐵道ノ通スル所ハ即チ佛國勢力ノ隨フ處兵ヲ派シテ鐵道ヲ保護シ其兵ハ永遠ニ撤退ノ期ナカラン又鐵道附近ノ鑛山ハ其開採ニ任スルカ如キ必ス遼東鐵路ノ前轍ヲ踏ムニ至ラン禍何ゾ設想ニ堪ヘン况ンヤ湖南ハ廣西ト境ヲ接ス佛人ガ長江ニ侵入セントスルニ必經ノ地タリ又其ノ雲南ヨリ貴州ニ入ルモ亦須ク途ヲ湖南ニ取ルベシ深謀詭計慮ラザルベケンヤ紳等國ノ爲メ地方ノ爲メ衆力ヲ團結シテ自ラ保全ヲ圖ラザルヲ得ズ

查スルニ光緒二十四年正月五日ノ上諭ニ曰ク粵漢一路若シ湖南北廣東西四省ノ紳商ヨリ自ラ承辦ヲ行ハハ實ニ大局ニ裨アリ命ジテ資本招集方法ヲ妥議セシム此一線ハ湖南ノ腹地ヲ貫キ武昌ニ接ス只線路ノ直線ナルノミナラズ兵ヲ

練り鐵ヲ開ク皆益アリ云々之ニ因テ之ヲ見ルニ朝廷モ亦此線路ノ緊要ヲ認メ
ラレ殊ニ湖南ハ中原腹地ト云フニ於テ尤モ容慮ヲ煩ハス湖南人士タルモノ如
何ソ感激奮發セザランヤ今幸ニ米國公司契約ノ期ヲ過グル己ニ久シクシテ
未ダ工ヲ起サズ又之ヲ白耳義人ニ轉賣シ現然條約ニ違背セリ即チ續約第十七
條ノ明文ニ由リ速カニ嚴詞駁詰契約ノ全文ヲ廢紙トナスモ該公司當サニ喋ヲ
置クベキ無カルベシ、

紳等現ニ己ニ資金ヲ醜集シ布置籌辦スル所アリ徒ラニ空言ヲ以テ抵制セント
スルニハアラズ且湖南ハ鐵ヲ産シ木材ニ富ム土地ノ人ヲ以テ土地ノ事ヲ辦ズ
經費モ亦節省スルヲ得ベシ此事關係重大湖南ノ命脈人民ノ安危此ノ一舉ニ繫
ル

王閣下速カニ盛宣懷ニ電命シテ約ニ據リ力爭セシメ必ズ廢約シテ而シテ後
ニ已マシメヨ湖南人自ラ湖南鐵道ヲ築設スル詳細ノ方案ハ紳等速カニ應サニ
妥議上陳スベシ迫切頌禱ノ至リニ堪ヘズ、

龍堪霖前ノ廣東總督以下六十三名連署

第三章 雜聞

第一 湖南開發と官民一氣

凡そ對外經營は其事業の大小に論なく官民の一致を必要とするはいふ迄もな
し、しかも條約上の權利を獲得して實益は他人に佔められ居留地を設定して空
しく狐狸の巢窟に付するの例は世に乏しからずして吾人の平素遺憾とする所
なり、聞く湖南開發の議起るや外務省は毎々領事を派遣して諸種の交渉を辨理
せしめ、海軍省は屢々人を派して水路の測量海圖の調製に従事せしめ、又政府は
創業期間補助の必要を認めて會社の未だ成立を告げざるに先づ之れを議會に
提出して其協賛を經、而して日本郵船大阪商船の二大會社は一致して創業萬般
の幫助を與へ以て能く未開の内地に未知の航路を開くを得たりと云ふ、官民一
氣の効果は忽ちにして事實の上に證せられ、長沙は開港前已に四十餘名の居住
邦人を有し諸外國に對して商業航通上の優勢を占むるといふ如き、之れを彼の

從來對清經營の不振に比し聊か慰むるに足るものにして、吾人は至難なる對清諸般の施設上範を湖南の開発に取り官民一致の必要を切言せんとするものなり。

第二 湖南汽船會社と湖南開發

歐州列強が清國主權の薄弱なるに乗じ、或は土地の租借に或は鐵道鑛山の利源に汲々として勢力範圍の擴張を努むること茲に五十年、尤大なる滿清の境土も殆んど完膚なきに近からんとす、此間に立ち嶄然として一異彩を放ち未だ會て外人の窺竄を許さず其の鎖鑰を嚴守するものを湖南人となすといふ、湖南は清國の中央部に位置し四境皆諸外國の關係交渉を受けざるは莫きに、此一地方は劃せられて封鎖國と目せられ、最近四五年前迄は諸外國人中未だ完全に洋装してその内地を旅行したるものあらざりき。

而も世運の大勢は獨り湖南のみの鎖國を許さざるべきは見易きの道理にして、此僅かに取殘されたる地方も亦早晚列強の染指を免かるべからざるは識者の夙に洞見する所なりとす、されば湖南人をして自ら進んで其門戸を洞開し二十

世紀の文化を輸入して教育に武備に農工殖産に貿易交通に彼等が其の聰明勇敢なる特性を發揮せしめ以て彼等をして退ては地方の安寧幸福を完ふし、進ては清國の衰運を挽回するに努力せしむるより良きは莫し、而して湖南人を導き幫けて之を成さしむるは同文同人種にして且つ性情相近き本邦人にして初めて之を能くすべく、彼等も亦本邦人を得て初めて相信じ相依るを得ん歟。

我朝野有力の士早く茲に觀る所あり、北清事變の後に方り設立せられたる湖南汽船會社は蓋し湖南開發の先驅なりとす、同社は明治三十二年の比より故近衛公爵を初め濫澤男爵、近藤廉平、岩永省一氏等首としてその急要を認めて之を唱導贊助せられ、嗣て加藤正義氏清國漫遊の際湖南を訪ふて歸り當路諸公も亦其必要を認められ、議遂に熟したるに由り三十五年上下兩院は補助法案を可決し、同年九月會社の成立を見るに至れりと云ふ、其發起人名は

岩永省一 原六郎

早川千吉郎 大倉喜八郎

大谷嘉兵衛 加藤正義

田邊爲三郎	園田孝吉
中橋徳五郎	南郷茂光
安田善次郎	益田孝
近藤廉平	男爵 有地品之允
馬越恭平	淺田正文
男爵 澁澤榮一	白岩龍平

等の諸氏にして殆んど民間の富豪有力者を網羅せり亦以て同會社の目的が國家的にして時勢の要求に適切なりしを證するに足れり今や湖南人士の内亦同社の趣旨及事業を賛して株主に加盟するもの侯爵曾廣變氏兄弟を初めとし前の巡撫俞廉三の息啓元氏次の巡撫趙爾巽の姪振基氏張租同朱乾益余太華王銘忠等の如き皆地方の富豪有力者にあらざるは莫く曾侯爵は推されて同社の相談役たりといふ

日清經濟同盟の議久しく朝野の間に唱導せられて而も未だ其の實を見ず吾人は湖南汽船會社の之が端緒を啓けるを多とし之れを歓迎せざる能はず同會社

の前途に屬望すると共に兩國經濟共同の必要を益す江湖に訴へんとす蓋し經濟の同盟はやがて政治の同盟にして國民の聯絡は既にして政府の聯絡なればなり

第三 湖南に遊べる人

近々兩三年の間而かも本邦人の湖南を訪ふもの踵相接するの概あり前に漢口領事たりし瀬川淺之進故山崎桂の二氏當時の愛宕艦長木村浩吉氏は何れも俞廉三氏巡撫たりし時に遞信書記官石渡邦之丞氏は三十六年の冬現任漢口領事永瀨久吉氏は三十七年三月又副領事吉田美利漢口領事館片山敏彦中畑榮の諸氏は前後何れも職務を奉じて視察せられ海軍大尉四窻孝輔氏は冬季二回命を奉じて洞庭湖及沅沅二江の水路を探險實測せられ其精細なる報告及測圖は航海業者唯一の指針となれりといふ又海軍工務監工學博士石黒五十二氏は港灣視察の爲め日本郵船會社監督茂木銅之氏は水路及造船の爲め二回何れも長沙湘潭の間に浮ひ湘江沅江の二船は多く其設計に成れりと聞く

明治三十四年十月日本郵船會社副社長加藤正義氏南北清を視察の途次湖南に

遊び翌年に至りて湖南汽船會社設立の議遂に成る。

政友會總裁侯爵西園寺公望氏は昨三十七年九月男爵高崎安彦衆議院議員横井時雄氏等と南清各地を漫遊して共に湖南を訪はる。

この他政界の名士としては佐々友房氏、實業家にして詩人たる永井久一郎、禾原氏、正木照藏、鶴山氏、工學士藤島範平氏、歌人として有名な竹柏園主佐々木信綱氏、東亞同文會評議員宗方小太郎、人類學者鳥居龍藏、工學士細井岩彌、工學博士伊東忠太、教育家としては嘉納治五郎の諸名士、亦皆前後瀟湘の間に遊び地方の當路及士大夫と交款する所ありといふ。

この他吾人の寡聞なる尙遊歴の人も多かるべし、吾人は兩國人士の來往愈頻繁ならんことを望む。

第四 湖南に住める人

邦人にして家を提げて長沙に來り住めるは湖南汽船會社の田島岩平氏を初めとす、實に去る明治三十五年の冬季なり、當時風氣未だ開けず汽船の航通なく人多く之を危みたりき、後の此土に來り住するもの忘るゝ能はざる所とす。

理學士關口壯吉氏は湖南教育界に聘せられたる第一名、明治三十五年にして氏の溫良熱誠なる時の巡撫趙爾巽氏の深く信任する所となり、爾後同省に本邦教師を聘する漸く多し。

理學士管野新一郎氏は常德師範學堂に聘せられて現に同地に住する三年、同地方在住者の祖なり、今や常德方面に聘せらるる我教育者も亦漸く多からんとす、氏の熱心篤實士林に信せらるゝに由らんか。

水野梅曉氏は僧なり、同じく三十五年の夏長沙に來り住し現に開福寺の僧學堂を管す、氏は堅忍の人、僧學堂の如き、今尙微々として振はざるも吾人は氏の志の湖南僧俗の間に諒せらるゝの一日あらんことを望む。

第五 湖南汽船會社の碼頭

長沙小西門外なる同社碼頭は數萬の資を投じて同社が經營築設する所、長江沿岸にも稀に見るの護岸工事なりといふ、この工事の設計は、東京測量社にして該社主技師磯長得三氏主任、中村新太郎氏と共に前後同地に出張して親しく其監督をなし、明治三十五年の冬より翌々年の春に跨りて之れを完成せり、當時土人

は外人を見るに慣れず往々危険の虞れあるを以て一同支那服を着して工場を指揮せりといふ。而も今日長沙港外日章旗の翻々として該碼頭に飄がへるを見て皆其の工事の堅且壯なるを稱せざるは莫し。聞く地方人士の初めより本邦汽船會社の事業に信頼したるはこれ等の工事大に其因を成せりと。

第六 湖南探險と河本荒井兩氏

河本磯平氏は白岩氏と共に大東氣船會社を創立したる人にして河本氏は明治三十一年の十一月農學士杉原龜三郎宮坂九郎の二氏と共に支那服を着け鄱陽湖に入り江西の境を出て湘潭より湘江を下りて洞庭を經、翌年の一月末日漢口に歸りて病魔の爲め忽焉として漢口の客舎に斃る。氏の一行は蓋し邦人の湖南に入る初めとす。風雪近寒水を涉り山を跋み病も亦積勞の致す所なる歟。白岩氏は氏の遺せる紀行紀事を懐ろにしその年(三十二年)十二月友人荒井甲子之助氏と共に更に第二回湖南視察の途に上りきといふ。河本氏は謹慎詳密の人。荒井氏は豪宕不羈の士。而して今や二君皆亡し惜むべき哉。

寄懷子雲在楚兼吊河本默堂磯平子年作 庚 寧齋

洞庭南去雁聲聞。今古茫茫形勢分。氣霸重瞳催楚俊。運窮長髮惱湘軍。淺沙夜吊汨羅水。寒日曉披衡岳雲。行望九疑青似雨。一天斑竹淚紛々。

莫道書生無遠謀。替他先任國家憂。韓天旋地枝枝筆。破浪乘風葉

葉舟。有湖上開航之說才士題詩龍婿井。羽衣吹笛岳陽樓。篷窓定有故人夢。

漢水何時能倒流。默堂入湘客死漢口

舟長沙に入りし朝

船長江を

さかのほり

千里洞庭

横きりて

濁れる流

十餘日

こゝに今見る

青き水

湘江 緑

色ふかく

岳麓の山

紫に

岸の帆ばしら

森なして

府城の眠り

今さめつ

佐々木信綱

水をへだて、ほのみゆる
楊むらく、家三五
水陸洲の、朝の色
我が日の本に、似たらずや

多恨の遊子、たゞ一人
異郷の旅に、さすらへて
山麗しく、水清み
故國に歸る、おもひあり

附録第一

歌人竹柏園主佐々木信綱氏一昨年の冬より昨年の春に亘り南清各地を漫遊して詩料を探らる。今其作歌數章及南清風景談を得てこゝに掲ぐ、風景談は歸朝の後氏が帝國文學會大會の席上に於ける談話の速記なり、その觀察の純詩的にして着眼の優美なる別に一天地をなし、讀むものをして坐るに其風光に觸るゝの感あらしむ、されば談話の湖南以外にわたるものも併せて茲に其全文を收め、以て覽者に飮かしむといふ、

編者しるす

佐々木信綱

阿片の香満ちたる窓にうまいして老人さめず鷓はなけども
舟やかた窓をうつ雨霏々として遊子の思ひそとる悲しさ

雁一つ江を横ぎりて江に沿へる蘆原十里蘆の花ちる
犬の聲驢馬のいなゝぎ夜は明けぬ月竹村の上へのこりて
紅の燭おのづから燃え盡きて花神閣上ひとのかげなき
つかれたる驢馬ねぎらひて山寺にやどり求むる夕ぐれの雨
木葉ちちて鳥の集めだつ枯木立木かげの道に野羊ひれ遊ぶ
詞わかぬ旅のやどりの秋の雨窓の外さむき芭蕉葉のおと
いにしへの玉のきざはし朱の廊草離々として人の影なき

名もしらぬ小さき江村の船がゝり園のいづこぞ船うたの聲
里とほみわが驢すゝまず日は落ちぬ征衣つめたき夕ぐれの風
橄欖の溢き溢りて世をなげき世を笑ふはた楽しからずや
影戯みると村人つとふ小屋のそと外面つめたき十九夜の月
眞玉賣る張氏が家の秋老いて鉢の香橙いろうるはしき
雲間もる夕日の脚に照されて眞白帆のぼる湘江の水
人拂ふ銅鑼たゝかせて官人の道ゆきすぐる木がらしの風

長江の水ひんがしに五千年國は老いたり民たゞに眠る

小羊のせなかまろめて眠りあふ門の口あたりせとめ小女履ぬふ

八百里洞庭の水みるくも天あまにみなぎる木枯の風

柳かげ羊呼ぶ子の聲くれて雨雲はしる湘江の水

窓をよせば隣の船はいまだあきすくらす江村の庭鳥のこゑ

近く呼ぶ物うり船のよび聲にふとやぶれたり故郷の夢

家鳩かたばの百千羽空にまひたちて夕日まばゆき富人あきの門

あひる追ふうなるが聲もたそがれて竹村さむし川隈にして

うちわたす長江千里いつこより雲は起らむ風は起らむ

夕風に黃龍の旅力なしあかき日いつか四方を照さむ

故郷は雲井のをちの三千里三千里外友と相見る

南清風景談

氏の遊踪

このたび漫遊いたしましたのは、揚子江沿岸の鎮江、揚州、南京、漢口、湖りまして沙市、荊州、宜昌、三峽の下峽——洞庭湖を横ぎりまして長沙、湘潭、さて蘇州、杭州等てかの彭澤縣、潯陽江、汨羅、三遊洞、秦淮、靈隱などの名勝古蹟をめぐりましたが、それについてお話致しましてはあまりに長くなりまします故、夕ばえの美しさ『岳陽樓と洞庭湖』『浮屠と風鐸』これらの題目で、いさゝか申し述べたいと思ひます、大陸の景色で最も感しましたは、夕ばえの美、夕ばえの美しくしさでありまます、漢口、沙市、芦林潭、などの平原に立つて幾十里、見る限見わたす限、人なく家なく木なく山なく、丈低き草は皆うらがれ渡つて、滿目蕭然たる夕つ方、夕陽まさに地平線に没せむとする頃、野邊に佇ずむてをりますると、秋の末の事とて、空には一點の雲もなく、たゞ眞青な空の果に夕日がやゝ黄ばんだ色になる、空の色は薄青になる、廣い野一面の草は、枯草のしづんだ色がやゝ黄ばんだ色になる、夕陽は全くまぶしい光線を失ひ、恰も紅の眞玉のやうな日か、遠い遠い野邊の果に、一分一分沈

大陸の夕ばへの美しくしさへ

華麗といふより莊嚴な美である

むてゆく、見る／＼沈むてゆく、沈みはてると思ふ、其一刹那の景が、實に美しい、日本では見られぬ一種の美があるやうに思ふ、さて四五分たつと、西の空が一面に臙脂色に彩とられる、我國の夕やけや雲の色の赤いのはちがうて、雲のない空の果が一面にあかく成るのである、其色の美はしさいかななる工の手に染めても、かはがりとは思はれぬ、其美しさは花やかな美しさではなく、おごそかなおもみのある美しくしさで、華麗といふよりは莊嚴な美である、佇ずむてじつと眺め入つてをると、其のうるはしい夕ばえの中には、けだかい尊といふ不可思議のあるものが、こもつてをるやうに感じられる、我等が理想の國、理想の宮殿が其中にあるやうに感じられる、かねて印度の夕ばえの美しくさを聞いてゐましたが、佛説に西方極樂淨土といふてあるのも、恐らくはかゝる夕ばえの美しくしいのからいひ始めたのではありますまいか、さて眺め入つてをる間に、日は全く暮れはて星がきらめきそめ、我立つてをるあたりはうすぐらく、足もとの枯草の中で、我國のこほろぎに似た虫がさゝやかに鳴いてゐる、けれども野末の夕ばえは、猶あかくうつくしい、夕ばえのうつくしい時間はよほど長い、じつと見てをる間に、段々うす

く赤くなる、暫くしてうす紫に變じる、やがて鉛の色のやうになる、さてのち夜の一般の色になる、其あいだ茫然として美觀にうたれてをりました、此夕ばえの景色は、大陸でなくては見られぬ美しくしさと思ひます、然るにかの國の詩人で、出目を觀るといふ詩は多く見うけますが、入目を眺めるといふ詩の少ないのはいかなる故でありませうか、勿論夕陽といふ題で作つた七律の類は少くないが、堂々と天地の大觀を歌つたのは無い様である、王勃は「落霞與孤鶩齊飛、夕陽同秋水一色」といひ、李商隱は「夕陽無限好、只是近黃昏」といつたのを見ても、たしかに箇中の趣味を解して居るらしいのに、何故に夕陽を賞する長篇大作が少いのでありませうか、不思議に思はれます。

岳陽樓と洞庭湖

漢口から湖南へは、把杆船といふ民船を雇うてまゐりました、風がわるければ半日も一日も碇泊する、淺瀬にすれば綱で引のぼすといふ始末、かの土佐日記の「舟も我身もなづむ今日かな」といふ歌、「朝北の出こぬさきに綱手早ひけ」といふ歌のとほりて、尤困難を極めました、漢口を出て四日目の午後、道人磯城陵磯をすぎ

支那人の服装は遠見が美しい

岳陽樓の瓦の色

て岳州府につきましたして、遠淺で船は岸を少し離れてつきました、碇泊してをる船が少なくない、見ますると川岸には極めてひくい家がこゝかしこに、其間をから人少女が歩いてをる、總躰支那の服装は遠くから見た方が美しい、上衣はあざざ、水あざざ、桃色、紫、黒などの無地で、縞物は少ない、日本の着物の如くそばへ寄つて見ねばわからぬやうのとは遠く赤いとか青いとかの極端な色で、單純ではあるが遠見が美しい。

岸の上を見ますると岳州府城はこたかい丘の上にあつて、幾千の人家を包んだ、をこそかな城壁は、高い崖の上をめぐつてをる、岳陽樓は城壁の東の隅に、鼓樓のやうな風に建つてをる三層樓である、城壁の瓦が幾百年の風霜に黒すむてをるに、建て直してまだ久しからぬ岳陽樓の金碧燦爛たる色彩の配合が極めて美觀である、——元來日本の瓦は服装の色の如く、黒く沈むだ色で遠くから見ると誠に引立たず、活氣に乏しく、一見つめたい感じが起る、支那では晴川閣、禹王廟、何宮何樓などいふ宮廟はいづれも、黄に青に、金色に彩どつた瓦で葺いて、しかも巴瓦や唐草の瓦が多く、瓦の端には麒麟、鳳凰、龍獅子などの形の大きい、丈たかい

小舟の漕手は皆若い女

瓦があるので、遠景が極めてよい。——我國では大極殿のほかには彩瓦を見ないやうに思ひます。さて上陸して樓にのぼらうと、船ばたに出ますると、划子船といふ小船が幾艘となく、我舟の傍に舟をよせて、これに召せわが舟にめせと云のてあらう、からさへづりにかしましくいふ、其舟の漕ぎ方が變つてをる、小舟のへさきに二個の櫂があつて、兩手で漕いでゐる、しかも漕手は皆な若い女で、其櫂のあやつり方の巧にうつくしい事、かの太湖船の俗語も思い出される、其女の上衣の色が例の淺黄、あるは紫などであるから、划子船の行きかふ様を遠く望みますと、あだかも冬の流に春の花を浮べたかのように思はれる、さて兩手に銀の薄い幅廣い指環をはめ、玉の耳環をつけた一人の舟子の船にのつて上陸しやうとする、男女ともに利を食るはかの國人の常で、與へた貨錢で決して満足せぬ例のうるさくねだる、服装は美くしいが心はうつくしくないと思はれる、いよ／＼上陸すると、岸邊の小屋が又珍らしい、『蘆のまる屋』と歌にあるが如く、蘆でかまぼこ形に葺いた低い家である、否家とはいひがたい、人が這つて入る程で、一二疊位の廣さの中に親子夫婦すむてをる、やゝ大きく前に桌がをいて、女の

岳陽樓下の蘆のまる屋

君山と扁山

居るは煙館、——風待の船頭らが阿片をむさぼる家である、これらの小家は減水期の間だけあるので、水がませば岸まで水が満ちる爲、とりくずして他へ移るをうである、さういふ小家の間を通りぬけて、高い石段をあがり、城門をぬけて、岳陽樓へ上つた、かなたの建築は形式よりも、色彩の方を重んじたやうで、瓦が前に申した金碧で、柱や壁が多くは赤い、色彩の建築としては美である、さて案内の僧に導かれ、壁に題した詩や聯の句などを讀むて、三層樓の上にあがりました、かの范文正公が、この記を書いて後、この樓は幾度か重修し、人は變り世は遷つても、天然の景は變遷がない、たゞ見る浩浩蕩々洞庭湖は目の前に、天地の大幅をひろげてをる、湖の門戸には、かの楚の女嬋君が祭つてあるといふ、君山が右に、扁山が左に、——いづれも江の島ぐらゐの大きさの島で、鏡が浦の沖の島、鷹の島を那古の觀音の方から見た位置のやうに並んで、さながら洞庭宮を守る獅子狗犬の如くである、其たゞ中に今や夕日は傾かうとしてゐる、天地の大觀に我を忘れ、しばしあつて樓を下り船へ歸りました、幸に風は追手、帆を張つていよ／＼洞庭湖の中に入らうとする、夕日は二つの島

の間に落ちて、見る／＼紅の眞玉が湖心にしづむ、かへり見れば岳州府城の上に
 月はのぼる、かの故漢口領事山崎梨雲君が『洞庭八百里、月照岳陽城』といふた通り
 である、日を數ふれば十二月三日、——あたかも舊曆十月十五日の夜、米南宮が撰
 んだ瀟湘八景の洞庭秋月ではないが、望月の夜洞庭を過ぎる、何といふ好因縁で
 あらふ、

夕日は遂に湖心に沈んだ、其余光が空に輝くや、空の色忽ち紅に變し、其紅の色湖
 上に映じて、畫にも寫しがたい麗しい中を、遂に一帆又一帆、風のまに／＼遠く近
 く、かつ顯れかつ消へる、其いひしらぬ風景むしろかういふ風景の中につゝまれ
 ながら、湖の底ふかく沈んだならばと思はれる、

美しくかつた夕ばえも光を失へて、湖の上は薄ぐらくなり、くらくなる、月はいよ
 く澄みのぼる、見えるものは唯こがね白かねの浪、『皓月千里、浮光躍金』といふ
 様である、廣い果知しらぬ湖の上、進みゆく我舟の近くに、二三の釣舟がをる、むか
 し卓彦恭が洞庭を過ぎた時、月下に漁りせる小舟を呼びとめて、『魚ありや否や』
 と問ひましたに、老人らしい聲で『魚はなひが詩がある』、卓喜ひて『願くは一篇を

やまと歌人望
月の夜洞庭を
過ぎる

洞庭湖上の夕
日

魚は無いが詩
がある

風月の縁に富
むこと天に富
謝しました

楊子江岸と楊
と塔

柳と楊との差

聞かむ』老人榎を蹴ちて、八十滄浪一老翁、蘆花江上水連空、世間多少乗除事、良夜
 月明收釣筒』と高吟し去つたといふ、さる風流の漁翁ありや否やを知りませぬが、
 二三の小さな釣船が大いなる湖の月夜の景趣を添へる、
 月は良く風は追手、船は帆腹飽満、一瞬千里の勢で進む、夜はふける、月はいよ／＼
 澄む、『此意無人識』といふ句の如く、いひしらぬ樂しさ、何ともいひがたき感が胸
 にみちて、我身を、ろに我あるを知らず、此隈なき月と果なき湖とに對うて居ま
 した、一昨年の初秋富士に登り、絶頂に見ました七月十七夜の月、かれは山頂これ
 は湖上、しかしあはれは同じあはれて、風月の縁に富む事を、天に謝した事であり
 ます、

浮屠と風鐸

吳淞から宜昌まで、長江を溯る事千哩、此長い廣い長江の沿岸に、楊と塔とを取り
 去つたなら、風景がいかに荒涼寂寥であらう、我國の柳とは違つて、丈高く枝
 葉がこももりとした楊、それで落葉の時期が遅い、『一葉ちり二葉流れて秋風ぞ
 吹く』とやうに、我國のは初秋に散り始める、支那のは初冬にも猶緑である、『楊子

江頭楊柳春「楊花が蝶の如く綿の如く散り亂れる比は、一しほてあらうと思はれる、楊子江から楊をとりさつたらば、櫻のない吉野山のやうであらう、楊についでいて景趣を添へるは塔である、楊と柳のちがふ如く、塔も我國のと彼方のとは大にちがふ、我國には五重もしくは三重の木造で、形が四角である、——信州別所塔の如き例外はありますが、——彼方のは七層九層もしくは十層以上の甃瓦製で、圓形が多く、愈上れば愈殺ぐといふさまで、手近に申せば淺草の淺雲閣式である、たま／＼簷角のあるが、それも八方が多い、我國のは木立の上に九輪の尖端や、上層の簷角が見えるのであるが、支那のは山の上もしくは川そひにあつて、全部露はに見えてをる、又必しも寺院の傍にあるのでない、深夜黃埔江畔を發すると、翌朝長江の岸で、まづ目にとまるは狼山の頂なる塔である、千裡の間南北兩岸にピラミッド形の山、——五千年前禹が水を治めた時、神の斧で削つたかの如き奇形の山に對して、北岸に塔がある、我船が其傍を過ぎた時、聞なれぬあやしげな聲が聞える、悲しげな寂しげな高いさけびが聞える、あやしみ見れば塔の下に幾十の野羊の群が居る、濁水の大江に沿うて黒く茶色なる

狼山の塔

山羊のむれ

白魚磯の塔と
趣味ある傳説

塔の下に、白い野羊のむれ、亡國の音ともいふべき鳴き聲、遊子の胸をさすやうてありました、湖南では汨羅に古へを吊うて湘江に入らうとした時、白魚磯の塔が殊に感をかきました、これは塔の形よりも塔の傳説が趣味がある、むかしある官人が家族を伴なうて、任地に赴かうとする時、こゝで暴風に逢つた、——洞庭湖では秋冬の比洞庭風ともいふべき一種の暴風がある、私等も歸途其風に逢つて困難しました、が、——波は高い風は烈しい、官人の船は今にも沈まむとする、そこで官人の妻が湖神に祈つてどうか風波がをさまり、わが良人の船の無事な様にと寶玉眞珠てよそほうた、吾髪を切り、それを江中へ投げ入れた、其眞誠に天も感じてか、風波静まり舟は無事であつた、幾年かの後彼の官人夫妻は轉任して故郷へ歸らうと、此處を過ぎた、此度は風もなく波もない、先年の事が思ひ起され船を磯にとゞめ、夫妻語りあうてゐると、大きな白い魚が船の中へ躍り入つた、かの武王の故事と思はれてこれは祥瑞であらうと、早速調理を命じた、然るに思ひきや其白魚の腹中から彼の髪飾りが其まゝ出やうとは、これ天が嘉納ましくたのであらう、又こ

は有名な難所此後とも船の難波があつてはといふので、目じるしに此塔を建てたとの事、昔がたりを聞いてさて塔を見てをりますと、折から船人がうたふ送郎十里亭の歌謡、ふしは卑びてをるが、あはれにきこゑました。

天下三分の煙月二分ありといはれた揚州へ、私の参りましたのは、『煙花三月下揚州』ではなくて、十二月三十一日でありました。——鎮江から長江を横ぎり杭州より天津につゞく大運河を、瓜州鎮からのぼりますので、——天下の佳麗蘇杭州にうつり、鶴駕十萬錠を腰にして遊ぶ人もなく、唯鹽業の賣買でたもたれてをる、歐陽修が荷花百朵を取り、四座に挿むて、客と酒を汲むだ平山堂、二十四美人をつどへたと云ので名を得、『二十四橋明月夜、玉人何處教吹簫』といふた橋も、朱欄碧甃今は形ばかり、夕ぐれ船を待つて運河の邊に立つて居ますと、川むかうの堤の上に崩れかゝつた甌瓦の古い塔がある、高さは八九層、風雨にさらされ一種の古色を帯びてゐる、塔の上層にはえてをる丈低き雜木雜艸が黄いろく冬がれて、夕暮の風に動いてをる、寒い冬の夕日は塔のあたりを照してをる、折から塔の上に巢くうてゐるのであらう、尾が長く羽の白い斑のある鳥が、幾百羽となく塔の上に

揚州の塔

塔の上に舞へる無数の斑鳩

西湖の景と西湖の塔

舞ひ舞うてをる、さながら畫のやうでありました。

西湖の景は日本に似寄つてをる、三方をめぐれる山は青く水も青い、其上に一碑一亭一木一石皆故事來歴あらざるはなく、白樂天の築いたといふ白堤蘇東坡の築いた蘇堤が、湖上に丁字形をなし、中島の孤山には林和靖の墓、西冷橋畔には蘇小々の墳、棲霞嶺の下には岳飛の忠烈廟があつて、千古の隱士、佳人、忠臣が湖畔に眠つてをる、文學歴史が一層此湖をよくしてをるのであるが、私は今一つ西湖の景を助けて居るのは塔であらうと思ふ、『烟光山色淡溟濛、千尺浮屠兀倚空』とうたはれた雷峰山の雷峰塔と、寶石山の寶叔塔とが、湖を隔て南北相對してをる、しかも雷峰塔は位置や、低く凌雲閣式で上には雜木がはえて其影さかしまに緑の水に映してをる、寶叔塔は筈の如き形で、山の上に高く聳えて居る、吳山の第一峰から初めて西湖の全景を見おろした時、湧金門から船を浮べた時など、此二つの塔の左右に見えるさま、たしかに西湖の景を添へて、畫龍に時を點したものと、いうてよいと思ふ。

蘇州府はわが國の西京に類似してをる、織物と佳人との産地で、『綠浪東西南北水、

蘇州の風景と
蘇州の塔
第一虎丘の塔

紅欄三百九十橋』とうたはれた如く、水が縦横に流れ、かの書舫も金陵の秦淮よりはこゝの方が数が多い、寒山寺楓橋はかの國人にはあまり知られてをらぬが我國人の蘇州にゆく者は、必ずたづねる、あたかも鳴たつ澤をばすて山、勿來の關などの類で、詩人一篇の詩、千里行客の杖をひく所となつたので、其地を踏めば、却つてさほどに感はあこらぬ、私はむしろ蘇州の景を助けるは五個所の塔であらうと思ふ、第一は虎丘の塔で、——吳王闔閭を葬つた時、五郡の人十萬人て塚を治めたに、三日目に白虎其うへに跨りをつたといふので名づけた虎丘、平田の間の高い丘で、始皇の故事ある劍池、竺道生の法を説いた千人石、吳國の麗佳古眞娘の墓などがあるが、私はむしろ劍池の上の七重塔が長髮賊の亂に荒廢したまゝ、立つてをる、其の塔の下から平野を見おろした景がよいと思ふ、第二は靈巖山の頂の塔で、是は數里の外から見える、吳王館娃宮の故地、宮には彼の西施をすまはせた所、こゝから太湖を望むだ景また絶景である、第三は北寺の塔、これは九層二十余丈規模極めて大なるもの、甌色黒くして光澤がある、一寺僧に乞うて上つたに、一層から二層への上り口は眞暗で、雜僧が小さき紅燭を點じて案内した、かの善光

第二靈巖の塔

第三北寺の塔

第四双塔寺の
双塔

第五瑞光寺の
塔

塔は風景の中
心點

寺の戒壇めぐりの類でわざと暗くしたのであらう、二層から三層四層と段々の上り口がいづれも一寸わからぬやうにしてある、これも參詣の善男善女に尊とく見せる爲であらう、一層一層皆佛像があまた安置してある、九層の上へのぼると風のはげしい日で、天風我袖を翻へし、目もくるめくやうであつたが、蘇州府を一目に見おろし、且陽城湖も野外に幽かに見えた、第四は雙塔寺の雙塔、此の形が實に珍らしい、寶叔塔よりも今少し細く、筒か筆の軸をたてたやうな細い塔が、二つ双むで高く立つてをる、我國の如く地震の多い國ではとても出来ぬ建築である、第五は瑞光寺の塔、これは府外の枯野の中に物さびた簷角の角である、遠くより望んでも近よつて見ても、上つて眺めてもいづれも景趣に富むてをるのは塔である、我國の山や丘の如く樹木が蒼鬱と繁茂しておらぬ故、一層塔がめだち山や丘を望む景の中心點となるのである、塔が支那南方の風景を助けるといふ事については、猶御話致したうございますが、餘りに長くなりますから最後にこれも塔の風鐸の話をいたします、

大晦日の夜深く揚州から歸り、鎮江で遊船といふ水中の庫船にとまりました、

萬正船の一室
に於ける遊子
の除夜の

船々長一人が日本人、他は皆支那人、船長はもと獵虎船の船長をしてをつた快活な人で、獵虎狩の話をかきながら、老酒を汲みかはし、さて船中の一室で長江の波の音を夢にして、遊子の胸に種々の感をやどしつゝ、變つた除夜を致しました、翌日は元旦、支那人が料理の錫の器にいた名ばかりの雜煮を味ひまして、庫船の上の我國旗が朝風に勇ましくひるかへるのを見ながら、轎をやとつて鎮江の町を過ぎ、金山寺へまゐりました、かの宋の高宗が『雄跨江南二百州』の句によつて名づけた雄跨亭をも見たく、かねて金山寺の寶物ときいてをつた、東坡の玉帶を見、古人の節をも忍びたいと思つて参りました、大風四起する毎に浮動するが如し、故に浮玉山と名づけたといふ金山寺、減水期で水とはいさゝか離れてをりました、さて門前で轎を下りますと丘の上の寺であるから段々に高くなつた、堂が支那寺院の常で、幾棟も幾棟も建つてをる、最も上に金碧交も輝いて人目を射る塔がある、——昔から幾度も建て直され、現時のは髮賊の兵火に消滅したのを、曾國藩が再建したのである、塔の形は簷度七層、簷角穩かに張つて、上には風磨銅の圓頂がある、我國の塔の形に近い、さて堂内に入りますと不思議實に不思議、何とも

金山寺の寶物

天上風鐸の響

地上風鐸の響

いふにいへぬ清いけだかい音楽が、雲の上に聞える、あやしむて堂をぬけて石だゝみへ出ますると、まさしく天上に音楽を奏するかの如く、微妙の響がある、人間の奏する樂器の音よりも一層けだかく響く、あやしんで見あげると、彼の高い塔の上で簷角に釣つてある風鐸が、風のまにまにうつくしい響に鳴り響くのであつた、いくつかの堂いくつかの回廊をのぼつて、塔の前まで塔守に請うて閉せる戸を開けさせ、塔にのぼつた、一層一層螺旋形の階段を、上がればあがるほど、天上の響か近づく、身はさながら一歩一歩天に近づくと、自分の身體が塵寰を離れて雲の上ののぼる心地がする、——かの金陵で晴涼山の翠微亭を訪ふべく、嚮導の人々と驢馬を乗り並べて、古き城壁の傍らを過ぎました、高さ五丈より七丈、瓦壁苔蒸して黝黒いに這ひまとうた、蔭は、半色づき半落ちて、蔓のみ高く低くからまつて居る、それを光の弱ひ冬の日が照してゐる、驢馬には皆首に鐸がつけてある、先だつた人の驢鐸の響、私が乗つてをる驢鐸の響、身は古城壁のかたはら冬の夕べ、懐古の情胸にみちて、鐸の音胸にしみ入るやうに感じましたが、彼の驢鐸のひびきは、猶地上の聲、この寶塔の上に風鐸の響きは、さながら天上の聲で

鎮江は景勝の地

あります。——さて塔の最上層にのぼりますと、耳もとに清い涼しいけだかい響が聞える。さながら天女が樂器を持つて中空に舞うてゝもをるかのやうに思はれる。最上層の眺望は非常によい。目の下には長江の流が横たはり、大江のあなたは平野千里、下流を見ますると元來、鎮江は景勝の地で、金山、銀山、北固山と江に沿うたる小山の間に、市街の白壁立ちつゞき、壑鶴銘のある焦山は江中に特立し、金焦二山遙に相望むて雄を競ひ、北固山の上には梁の武帝が天下第一江山とした甘露寺があつて、金山寺と東西相對しつゝ、鎮江を護るが如く見える。目に此好風景を見おろし、耳に微妙の音樂を聞く、いつまでもくく此まゝ此處に居たく恍然として居ました。

寶公塔

竹坡詩話に金山に遊んで、夜寶公塔に上つた時、天已に昏黒月猶出でず、風鈴鏗然聲あるを聞いて、忽ち杜少陵の詩に「夜深殿突兀風動金琅璫」とあるを思ひ出たと有ますが、實に天くらき夜など、此風鐸の響を聞いたならば、今一しほ身にしみるであらうと思ひました。

この風鐸は塔鈴とも響鈴ともさまざまに申しまして、詩文に散見してをります。

詩書に見えたる風鐸

洛陽伽藍 に「高風永夜寶鐸和鳴鏗鏘之音聞及十餘里」周書に「過浮屠三層之上有鳴鐸焉、忽聞其音雅合宮調」晉藝術傳に「天靜無風而塔上一鈴獨鳴」李遠が「風鐸似調琴」杜牧が「高塔數聲秋撼玉」蘇舜欽が「酌鐸翻天籟」孔平仲が「冷鐸數番僧舍開」鄭元祐が「閑聽松風語塔鈴」張來が「寶鐸酌天風」袁中道が「鈴塔影斜陽」など猶多數ありませう。

我國では法隆寺の塔の外に、此風鐸をきかぬやうに存じますが、かの清いけだかい天上の音樂といひつゞき金山寺の塔の風鐸、私は今も其響が耳に残つてをとなつかしく思はれます。(完)

附録第二

鳥居龍藏氏人類學研究の目的を以て明治三十六年帝國大學の命を受け、湖南貴州雲南の内地に入り苗族探險の壯舉に従はれたるは近來の快聞とする處なるが、その調査せられたる資料中より、一二を請ふて茲に抄録することゝなせり、氏の調査に由れば現時の苗族は重に貴州に住するも、湖南と苗族とは歴史上離るべからず、且氏の談話は頗る興味深きを以て、その全文を載することとせり、又、苗子の筈は氏が學術的研究の趣味饒き文字、武陵桃源は實地の探勝談にして、邦人の洞口を訪ひしは怕らく氏を以て嚆矢となす、吾人は覽者と共にこれ等の資料を社會に供せらるる勞力と熱心とを感謝するものなり、

編者しるす

苗族は現今如何なる状態にて存在する乎

鳥居龍藏

(本篇は氏が本年一月の史學會例會に於て講演せられしもの、速記なり)

私の本日講演いたし度いと思ひますものは、表題にもあります如く「苗族は現今如何なる状態にて存在する乎」と云ふのでありまして、即ち所謂「苗族」なる者は、今日支那内地の何處にて、いかなる有様で生活して居るであらうかと云ふことに就て、少し許り話して見たい考です、尤もこの講演は單に有の儘を申すので、これに對して支那の學者や、西洋の學者の説を別に附加しては申ません、私は苗族に就ては、自から其地を旅行もしましたし、又多少支那や西洋のリテラツールも調べつゝありますから、今後少しづつ、私の研究しましたアルバートを御目にかげ、且つ充分なる御批評を受けたいと思ひます、

「苗」と云ふ人種に就ては、我國の學者は昔から多少考へがあつた、これは全く「書經」の影響から來て居るものであります、されど未だこの苗族に就て、我國の學者が

精しく研究した人もなく、又當時これを専門として研究して居る人も聞かぬ様です。しかしこの入種は東亞に於ては、最も趣味ある面白き研究物で、これが解釋が出来たならば、其他の諸人種の上にも從て明かとなつて來る者が多くなり、ます。であるから苗族の研究は人種學、史學、言語學等の上から最も注意すべきものです。殊に吾人東亞の人間は尙更のことでありましやう、不肖私は聊か人種學上、この人間に就て當時研究をなすつゝある一人でありますから、史學を専門とせらるゝ諸君の御參考として、現今彼等の生活状態を一時間許り御話して見たいと思ひます。

最初に先づ起る問題は、抑も苗族なる者は現今支那の何處に住つて居るか、であります。今日苗族の中心は實に貴州省であります。すから、苟しくも彼等に就て學問上の研究をなさんと欲する者は、是非とも貴州省に至て研究せねばなりません。私はこれが爲めに貴州省に赴き、其研究に従事いたしました。

一般に世人は、苗族と申すけれども、世人の考への中には純粹の苗ならざる者も、この中に混合せられて居ります。假令ばかの裸羅(Tolos)種(Tung)猿(Yao)猴(Liao)

苗族の中心は
貴州省

苗と南蠻

黎^三等の如きが是であります。尤も是等も廣き意味に所謂『南蠻』と同一意味の下に『苗』と云ふ文字を用ひますれば、無論入れても差し支へはありませんが、狹き意味、純粹の『苗』と云ふ上からせば、是等は、しばらく取除けねばなりません。是等の人間に對しては純粹の苗族自身は固より、支那人もこれを『苗』としては取扱て居りません、一種別の者と考へて居ります。支那人も其文字の用ひ方に就ては、よく區別して書て居る。

支那人の手に畫かれたもので、『黔苗圖說』と云ふのが、これは八十二の圖畫があつて、其れに説明を短かく書たものです。坪井文學博士は曾て『史學雜誌』にホロート氏の『古銅鼓考』を譯出せられました際、この圖中より『仲家』の所の畫を出されましたものが是です。この圖畫は私を以て見れば、非學術的に苗族を見るには、一向差し支へがないけれども、苟しくも是れを學問上の好材料としてこれを引用せんとする場合には、大に注意しなければ危険であります。又これを畫た人は別に殊更苗に入つてスケッチせしものでなく、もと文の方が先に出來て居つたのを見、これに文に因て圖畫を入れたものです。そしてこの圖畫は世人は

苗の種類及其
地理的分布

一般に苗族を畫たものと御考へてありましやうが、この中には苗族ならざる『猺』『獠』等も混合して居りますから、よくこの圖を御覽になつて、これを引用せんとする方は最も御注意にならなければなりません。

然らば純粹の苗族と云ふものは、如何なる者を稱するかと云ふに、これは『紅苗 Hone Miao』『白苗 Peh Miao』『青苗 Tsing Miao』『黑苗 Hei Miao』『花苗 Hua Miao』『打鐵苗 T'ui Miao』等からなつて居ります、尙ほ多少議論はありますが、『仲家 Tehung-Kia』もこの中に入れる者でしやう、必竟苗族とは是等を總稱した名前と申てよろし

苗族の範圍は以上の如くであるとすれば、さて彼等は一體何處に住つて居るか、即ち其地理學的分布は如何、こは又諸君の御承知になる必要があらうと思ふ、以上の諸種の苗は其居住地は多少一定して居つて、餘り其分布區域が混雜して居りません、ですから今彼等に就て一種族別々に居住地を申上げましやう、

紅苗、黑苗、
花苗、青苗

紅苗は主として、貴州省の東部、銅仁にあるので、他には分布して居りません、かの清朝に於て貴州苗の暴動せしは多くこの苗でありました、黑苗は専ら同省の

白苗、青苗、
打鐵苗

東南部に分布して居つて、其著しき所は黎平、都勻等であります、花苗は貴陽府附近から西の方で、安順を經過し、雲南省の東部、廣東河の上流地方に及で居ります、又一方は貴州省の北部、遵義、大定より金沙江畔の雲南省の四川省に接近する武定に達して居ります、これは私の今回實際に旅行し、出會調査した者であるが、尙ほ Colquhoun に従ひますれば、貴州省に接した廣西省の北部にても彼等に會したさうです、白苗と青苗とは概ね貴州省の中心部に分布して居ります、打鐵苗は殊更に一種のものとして見ることが出来るや否やは知らぬが、兎に角私は八番附近に出會した、次に仲家でありますが、彼等とも廣西省の方から來たものらしく、其分布は貴陽府から以西、即ち同省の西南部で、雲南省の東部に少しく居住して居ります、こは新しく貴州省の方へ入つて來たものと見へます、又貴州省にて苗族以外の者の分布は如何と云ふに、廣西省に接近する所には猺が居ります、四川、雲南兩省に接近する所には猺が居ります、

以上にて大體苗族の地理學的分布は御承知になつたてありましやう、これにて見れば、彼等の分布の中心は貴州省で、少しく雲南省の東部に及で居ります、

苗族の分布は以上の如くであるが、次に彼等は自から何と呼て居るか、こは又大に研究すべきこととしてしやう、先づ花苗から申ましやうが、青岩地方の花苗は自らの種族のことを *Mu* と申す、安順の花苗では *Mim* であります、青苗では如何と云ふに、青岩の青苗では *Mom* であります、次は白苗では *Mom* であります、黒苗は私が郎岱附近のものに就て調べて見れば *Hm* であります、*Hosie* 氏に従ひますれば、*Mu* であります、尙ほ *バーカー* 氏の書 (*Up the Yang-tze*) によれば苗族は自から *Hmang* と申すと記されて居ります。

右に因て見れば、黒苗を除けば、他は悉く同一の發音で呼て居つて、即ち其音はエムの音で、*Mu*, *Miu*, *Mou*, *Mou* であります、さうして見れば彼等の種族名はムーとかモンとかの名稱で呼てよろしゆう御座いましやう。

青、白、紅、黒等は、何づれも、其衣服の色から、支那人が呼ぶ名稱で、花苗は其衣服に刺繡を美しくして居るから、花苗と呼ぶので、決して自からはかくの如くは云はぬのである。

茲に注意すべきは、『書經』にある苗 *Miao* であります、『山海經』によりますと、この

今日の苗族は
昔日の三苗と
同一なるか

苗は、又三毛とも記してあります、この毛は *Mio* です、次に支那人は南部支那の支那人以外の民族を總稱して、南蠻と云つた、この蠻は *Mim* です、尙ほ福建省に昔居つた民族を閩 *Mim* と云ひ、其他かの莫徭の *Mong* 等も注意すべきものです、尙ほ雲南省から以西南の民族に *Mou*, *Moi* 等の名ある者の現今住つて居るのも又注目すべき事です、以上に因て考へて見れば昔から南部支那に居つた人間を、何づれもエムの音の名で呼て居るのは面白い事實で、是等は彼等民族の呼だ種族名を其儘支那人が用いたものと考へられます。

是等のエムの發音は、今日の苗族も又これで呼て居ります、果して然らばこは最も大切な事實と考へます、今日南部支那に居ります苗族は、昔日の『三苗』の苗族と同一のものであるか、否やは一大疑問です、されど私はこの二者は同一のものであらうと思ふ、其は色々の點で證明も出來ましやうが、第一其名稱の互に同一なるは大に注意すべきことと存じます、即ち『書經』の苗 *Miao* と『山海經』の毛 *Mao* とは今日苗族の自から云へる *Mu*, *Miu*, *Mou*, *Mou* と似て居るてはありませんか、そして其位置と云ひ、其状態等も又これを證します。

最初に先づ彼等の體質に就て一寸申上ましやう、彼等は身長小、想ふに世界中の人間としても、最も身長短小なる方です、皮膚の色は黄色、頭髮は黒く、直毛で、顔は圓顔ですが、寧ろ扁平で、鼻は中等、眼は中等、眼式にモンゴロイドアウゲンを具備する者もあります、眼の光彩の色は黒褐色、口は中等ですが唇は厚い者があります、ヒゲは殆んど絶無と云ふ有様で、體部にも下肢を除く外ヒゲを認めません、眉は太く、殊に眉尻の極めて太く下つて居るは、彼等の一種キャラクター、スチツクの所です、體は中等の筋肉を具備して居りますが、胴長く、下肢は比較的短かく、俗語で申せば、横平たき感がある、この點に於ては日本人とよく似て居る所があります、私に彼等に就て少しく測定もし、又觀察もいたしました、が、あまり専門に渡りませんから、此處では申上げません、たゞ苗族とはかくの如き體質のもの、と御承知下さればよろしい、若し精しく御研究なさらうとなれば、私の集めた事實材料を御覽に入れましやう、市村助教の御著述になつた、『支那歴史』によりますと、苗族は長身で、毛の多い人間の様に記してありますが、私は不幸にしてかくの如き體質のものを見ません、これと全く反對の結果を得ました、即ち苗族

は身長最も小、顔面部、體部にヒゲはありません、

言語は如何と云ふに、私は多少この材料を苗族自身の口から聞きまして採集して居ります、そして今これを他の言語と比較中であり、ますから何とも申されませんが、要するに彼等の言語は支那語や、インドチャイナ語や、西藏語に類似するもので、殊にインドチャイナ語系中、安南暹羅の諸民族の言語と類似して居る様です、このことに就ては、すてにかの Laouperie 氏はかく申て居ります、*The Languages of before the Chinese*、則ち氏は白苗、花苗、黒苗を Mon-Lai 語派に入れ、青苗、安順苗を Thai-Siam 語派の中に入れました、又 Edkins 氏は *The Mind Tsi Tribes*、苗族の言語に就て記する所では、其言語の性質及び單語から云へば、ヒマラヤ種族に似て居ると申されました、

さて風俗から申上ますが、史記や漢書などを御覽になると、『推髻民』と云ふことが出て居りますが、苗子の頭髮は所謂推髻て髪を結んで居つて、其の髪は一言で言ふと朝鮮人の髪に結ひ方、琉球人の頭の結ひ方と同じやうな趣きで、圓に描くと斯様に額の上に圓く束ねるので、男も女も同じやうな風俗ですが、婦人

は又弁を差して居る者もあります、それ故に南蠻として見れば支那の漢時代か



苗族の髪結

ら今日まで頭髮は變らぬものと言ふて宜いのです、是が一般ではありますが、併ながら取除けの場合があつて、安順に居る花苗の有様は是とは多少異なつて居ります、男の方から言へば



花苗男子の髪結

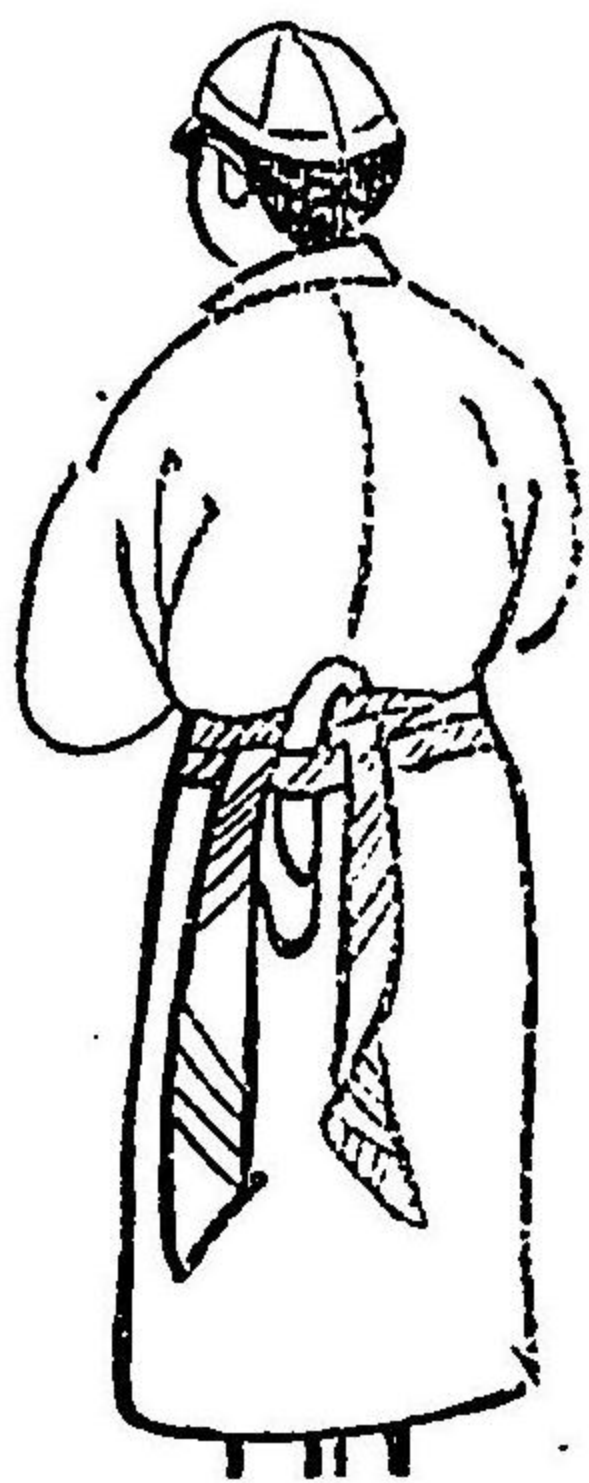
斯様に突出した髻を鉢巻をして居ります、是が男子の方で女子の方は妙な風で上の方から見ると斯う云ふ風です、此様に大な櫛に巻きつけて居るのです、前の方には人の毛を燃つたものを入れて居ります、それから耳朶に銀の耳飾りをして、頸には頸輪を嵌めて居ります、衣

服裝飾の方はどうであるかと云ふと男は馬の毛で編だ鳥打帽子のやうな



花苗女子の髪結を上方に見る

冠つて居ります、衣服は此所に持て来て居りますが、斯う云ふ鼠色の衣服で之を右前に袷せて着て居ります、袖は長いから何か用をするときは袖の先を裏返し、ます、帯は前から廻して後背で締める、圖で描くと



花苗男子の衣服

斯う云ふ風て是も歴史上御注意を願ひたいので、是は男の風てありますが、この風俗はかの『石索』やシャバンヌ氏 *La sculpture sur pierre en chine.* 中に圖する山東

省の武陵の石壁中に圖せる兵士などの人物の其れとよく似て居る、これは餘程注意すべき點であつて、是は全く漢民の風俗であるか、苗族の風俗であるか、私には判断がつかぬので、此等は十分に研究の價値のあるものと思ひます、是に由つて觀ても苗族の中に支那の古い風俗が遺つて居ると云ふことを考へることが出來やうと思ひます、足は主に跣足で偶々草鞋を穿て居るのもあります、下の方に股引などは穿て居りませぬ、是で首飾りをして耳輪を嵌めれば男の風で、女の風はどうかと云ふと多少の相違はありますけれども衣服の風は一通りサウ云ふやうなものに過ぎぬので、斯様に半體衣で胸から下のない半分の半體衣を着るのです、下は所謂長裾でこれに細かな襷を取て居ります、之を腰に廻せば宜いのです、是で婦人の風が出來たのですが、外出の時には刺繡裝飾の小さな布を胸と脊に掛けて出るのです、是は寫眞がありますからあとで御覽に入れます、それから今の安順の花苗ですが、彼等の風は少し違ひます、其れはこんな様です、女子の衣服は其男子と同様であります、が踵の隠れる位な長い物を着て居ります、サウして裾までの長さの前垂をして居る、其前垂は麻で織つた者です、是が婦人の風

でそれに首飾りと耳飾りをすれば宜いのです、安順の苗族の事を花苗と申して居ります、是は支那人がつけた名であります、が、刺繡の綺麗な着物を着て居ると云ふ所から花苗と云ふ名が出來たのです、茲にある此衣服が(衣服を)其會長の細君の着る物ですが、斯様な綺麗な刺繡のあるものです、是で苗族の趣味や、キャラクタールスチックの研究も出來ます、此模様などが餘程隋唐時代の影響があると云ふことに御注意を願ひます、申までもなく支那の文化は後漢の頃からソロソロ西の方から支那人以外の文化の潮流が來て居るのですが、これが合一した時は南北朝隋唐であります、是等の時代のクルツルは支那固有のものでなく今日の言葉で申せばハイカラ的であります、これは日本の法隆寺や正倉院何かに就ても見ることが出來ます、然るに今日の支那人は寧ろ其固有のケヤラクテルスチックに歸て居ります、否な段々以前の雷紋時代に戻つて來て居る様であります、然れども苗族の風を見ると支那人が曾て西の方面から受けた潮流を尙ほ今日受繼で居ると云ふことが此等に依つて見ても分るので、此事は何か模様を分析し何かに精しく書て見たい考ですが、是は餘程注意すべき點と思ひます、それ

苗族の染物と奈
類
真朝時代の蠟

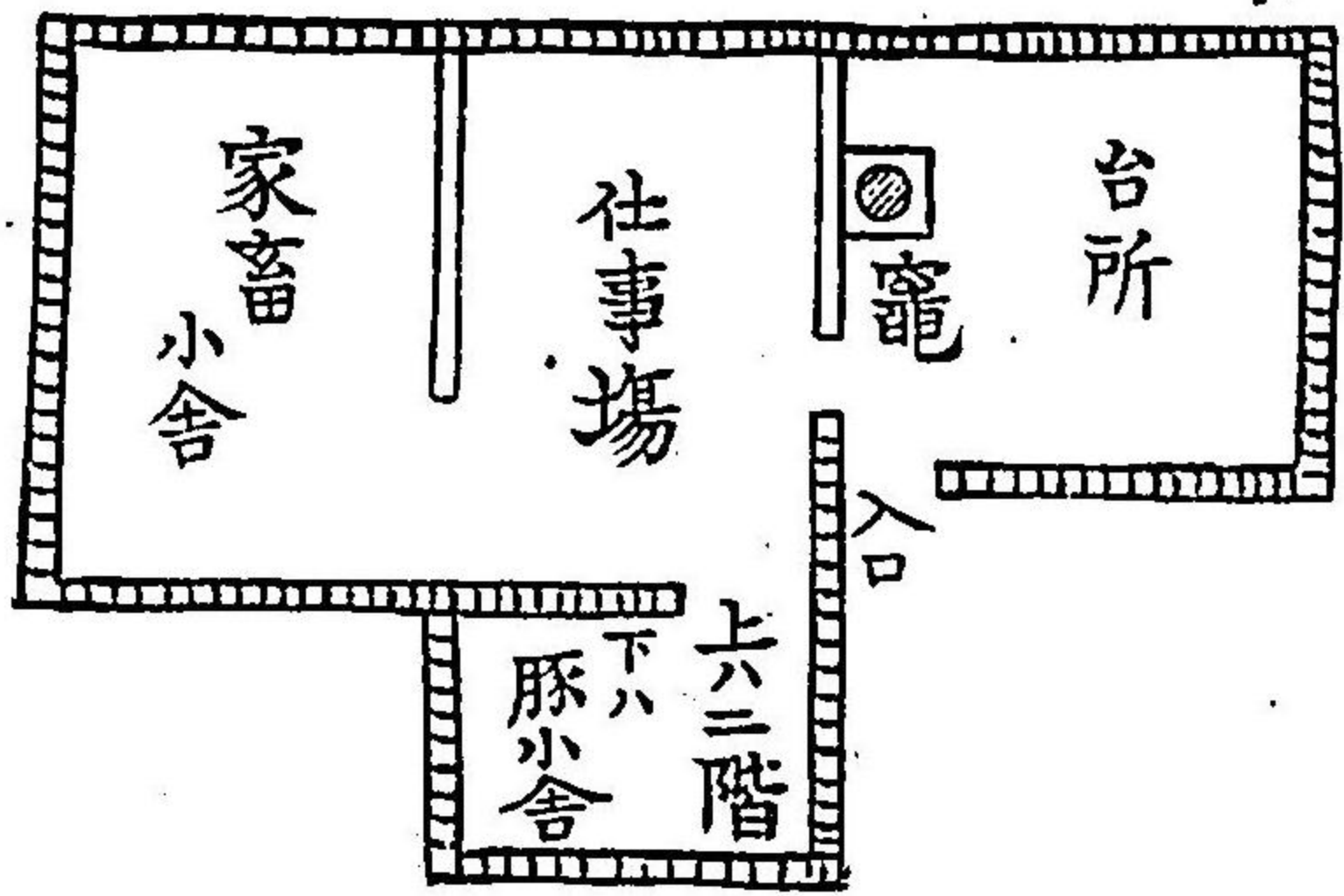
から今一つ衣服に付て注意すべきことは仲家(Taijong-Kie)であります。仲家の着て居る衣服の模様は除程注意すべきことでは、是は一體仲家には限りませぬ。一體に苗族は染物を自分々々でするので、それは蠟を色々の形に流して染める。奈良朝の日本人の『蠟緞』は支那の影響を受けて盛になつたのですが、今日では支那の方では却つて分りませぬが、それを苗族では今もやつて居ります。殊に仲家に於ては巧にやつて居ります。是は婦人だけに付て申しますが、仲家の婦人の着て居る上衣、長裙には渦紋、雷紋の連続紋様が染め出されて居る。この渦紋と同じく、又雷紋は古代支那人の其れと同一で古銅器を感想いたさせます。是は御注意を願ひます。支那では既に捨てられたる「クルツール」が苗族に存して居ると云ふことが分るのであります。古い支那の銅器などにも



苗の家屋

斯う云ふ雷紋の出で居る物が多くあります。斯様に古き支那民族の影響が傳はつて居るので、是は將來研究すべき點と思ひます。仲家は御承知の銅鼓を使用して居るものです。先づ衣服の方は此位にして措きませう。それから家屋の有様はどうであるかと云ふと貴州と云ふ所は多くはライムストンの地盤からなつて居て餘り樹木がありません。樹木が少いから家を建てるに柱棟木は木を用ひて居ります。けれども其他は大概石材を以て壁や何かを築いて居ります。サウして不完全ながらも二階造で、其二階は丁度自分の身長が届する程の窮屈な高さに於て造られて居ります。此處は作物の稻とか豆穀のやうな物を納むる所となつて居りますが、又夜間人の寝る所ともなつて居る。丸て鳥の栖のやうな有様で、サウして楷子をかけて上るやうにしてあります。下は身長大よりも高く、間取は臺所とか仕事部屋のやうなものからなつて居ります。仕事部屋は中央に設けられ、其一方の室は臺所で竈が据てある。又一方の室には水牛とか豚を入れて置く所としてある。屋根は主に茅を以て葺て居ります。雲南の方の苗族になると樹木が多いものです。ですから木を非常に多く用ひて居ります。殊に

廣東河上流地方に屬する部分の雲南苗族の最西部と思ひますが、此の方面は臨安附近であります。臨安はマルコポロの所謂 *Amu* であります。而してこの邊



安順花苗家屋の平面圖

の風俗は今日と其當時とあまり違はぬ様です。しかしこれは裸糺で裸糺の御話は何日別に致しますが、兎に角これだけ茲に申して置きます。この臨安附近に苗族が居ります。これは苗族の分布として最終です。其中に彌勒 *Mila* と云ふ所の苗族の家の方と間取方などは變りませぬが家の材料が違つて居ります。家の材料はどう云ふものであるかと云ふと、前から見ると斯様な構造で全く釘を以ないで丸太の木を切組んで拵へてある。或は此上に土を塗つたのもあります。屋根は茅で葺き其上には「千木」を置てあります。遠方から見ると一見我國の古代の有様があります。

それから苗族一般の生活はどうであるかと云ふと現今は決して自然的の生活と云ふ状態ではありませぬ。彼等の多くは農業の民であつて、農に依つて生活をして居るのであります。彼等の耕作する田は水田で稻を植て居りますが、畑の方は唐黍其他の物を植て居ります。家畜は多く水牛を飼養し、尙ほ鶏豚の類を飼つて居ります。これまで彼等は甚だ開けて居らぬやうに思はれましたが、是は苗族が非常に暴れた時の有様からサツ思はれたのです。内部に入て見れば必ずしも開けて居らぬと云ふことは言へぬのです。殊に苗族の如きは極めて古き時から支那民族に接して居つて其文化を多く輸入して居る。殊に彼等の或者は銅鼓すら自から作つて用ひて居つたものであります。から決して開けぬと言ふことは出来ません。ですから彼等は決して未開なる野蠻人とは申されませぬ。尙ほ彼等が古代に於て楊子江河畔に三苗の國を建て居つたのでも知れます。それで苗族は決して野蠻ではないと云ふことを申して置きます。随つて食物の如きも米や唐黍の如き物を常食として、野菜も取り、菜物も食ひます。或は祭日の様なときには豚も食して居る。先づ彼等の食物の状態から言へば支那の百姓の下の

者と大差はないと云ふことを申して置きます、それから次ぎにキャラクターとして精神的の方も申して置きます一體昔日の苗族は支那人に向つて抵抗を爲し頗る頑固な者であつたけれども今日の苗族は決してサウ云ふ者ではありませぬ、之を裸糞に比較すれば、頗る溫和であります、要するに彼等の氣質は陰鬱であつて快活でない、極めて沈靜であつて敏捷でない、其邊が彼等の精神上のキャラクターとして注意すべき點と思ひます、種々の點に於て彼等の性質が表現されて居りますけれども、最も注意すべき點は音樂であります、其樂器に就て一例を申さうと思ひますが、是は曾て國華第六十九號に「苗族の笙」と云ふことに付て書たことがあります、笙などに付て見ても能く分るのでありますが、聲樂もさうであります、殊に樂器に付て言ふと陰氣な笙とか笛のやうなものが好まれる、銅鑼とか皮太鼓のやうな極く喧しい物でなくして靜かな笙とか笛のやうなものが行はれ居るのであります、樂器に付て餘り詳しい事は申しませぬが、兎に角此音聲に付ても分るだらうと思ひます、極く陰鬱な沈着な氣質を能く現はして居る、獨り音樂ばかりでなく他の衣服の色合等に於ても其風が現はれて居ります。

す、サウして笙を用ひるのは主に男子に限つて女子は用ひませぬ、又これを歌に合唱することなく唯だ音を出すだけです、而も男女の戀愛などの上に於て樂器が非常に媒介をなして居るので支那人の詩に、曉妝斜挿木梳新、斑駁花衣緊裹身、吹動蘆笙鈴響處、陌頭踏月暢懷春」と歌つてあります、月夜男子が戀ふ婦人の許へ往つて門邊に佇立み此笙を吹く、サウすると婦人が出て来て相逢ふと云ふやうな一種面白い思想の状態も此笙が示して居ります、謠ふ所の歌も戀愛を主として、悲哀な調子を謠ふので決して勇壯活潑と云ふやうな歌はないのであります、此等は餘程御注意を願ひたいので苗族と言ふと何か亂暴者のやうな殺伐極まる者のやうに是まで私共も考へて居つたのですが溫和な氣風があつて踊のやうなものにしても今日南洋諸島でやつて居るやうな風のものとか其他の野蠻人のやつて居る踊のやうに忙がしい踊ではありませぬ、極く靜かに笙に合はして踊つて居る位のもので、尙ほ御注意を願ひたいのは苗族の用ひたと云ふ銅鼓でも決して支那の銅鑼のやうな物と違ひまして極く沈靜な音のものとしてある鳴らした音響は梵鐘のやうな、至極サブライムの所があります、此等の物

に依つて見ても分るので苗族の性質は略ぼ是で御分りになつたと思ひますが、今日に於ては氣質から言ふても極く沈着で濫りに人を殺すと云ふやうなことはないのであります、而して生活の程度は農業で支那下等の農民位の所と御考へになれば宜いと思ひます、是が苗族の大體の有様であります、次ぎに申て置きますが、一躰貴州省と云ふ所は清國の中に於て最も遅く漢民族が征服をした土地ですが、是に付て少し御話します、一時此の苗族が非常に亂暴をして其の鎮撫には甚だ困難をしたのであります、貴州省の支那人は全く其状態が他と異なつて居ると云ふことを申上て置きます、それはどうかと云ふと大概支那を御歩行きになつた方はサウ云ふ考は起るまいと思ひますが、貴州省には支那人の一小市街と云ふものが所々にあります、それが一の城郭の如きものになつて居るので、而して其小市街と云ふものは各々武裝をして居ると申して宜いと思ひます、どう云ふ譯かと云ふと屢々苗族から襲來を受けたので、それを防禦しなければならぬ所から武裝をした一種の城郭的の中に生活して居るのであります、サウして夜間は門を堅く鎖して居ります、此邊の支那人の村落も其様な有様になつ

て居りまして決して他の各省で觀るやうにバラバラにあつちこつちに家が建つて居るのでなく、一箇所に集まつた形になつて居ります、是も苗族がいつやつて來て侵害するかも知れぬと云ふ必要から起つたのであります、故に貴州省を歩行くと此現象を見るので、是で漢民族と苗族とが相和して居らぬと云ふ現象が能く分るので、現今はさうではありませぬが尙ほ其状態があるので幾分昔時の面影を遺して居ります、茲に注意すべきは貴州省の支那人は半分兵卒で半分は農民から成立つたもので、明の時に苗族を征服すると同時に屯田組織で貴州省に轉住したもので、サウして暴民が害を爲すときは直ちに劍戟を執つて兵士となり、暴民が害を爲さぬときは農民となる、さう云ふ風で貴州省の支那人が出來たのであります、それが明朝が清朝の爲めに滅亡された後は清朝の兵卒が此所に續々入込んで來るやうになつて、以前明朝に屬して居つた兵隊即ち屯田をして居る農民的兵卒と後に來た清朝の兵卒との間に多少の軋轢が出來たのであります、それが爲めに妙な結果が起つたと云ふものは、最初に移つた移民は多く揚子江の下流の南京附近の人であつて、南京附近の兵卒が多かつた尙

ほ其他に四川省の人廣西あたりの人が多いのです、それが清朝のために滅亡された爲めに南京附近から來て居る者は、どうしても深く清朝の人間に従はぬと云ふ風があつた、又清朝の兵卒も彼等は亡國の民であると云ふやうに互に睥睨すると云ふ風で遂に疎遠になつたものです、前の明朝に屬して居つた兵卒を恰も穢多非人のやうに見てしまつた、遂に通常の交際も出来なくなつた、此部落は最も貴州省の貴陽から安順の間に多くあります、此等の人間が一見鑑別のおつのは風俗が違つて居ります、殊に女子は頭の鬘を風風の羽翼を張つたやうに結つて居ります、それ故に此部落を稱へて『風頭鷄』と言ふて居ります、それから今日此所に居る清朝の兵卒全部明朝の者と雖も多少どころではありませぬ、半分以上と申して宜しうございませぬが苗族と雜種になつて居る譯でありますから眞の漢民族と觀ることは出来ぬのであります、サウして到る所に苗族が居ります、兎に角貴州省と云ふ所は人種學とか人類學などの方から見れば餘程趣味がありますので一寸中華の土地を歩行いて居るとは思はれぬ程であります、それから苗族の地理學上の關係はどう云ふことになつて居るかと思ふと、一體

今日の支那人は苗族を殆んど穢多乞食の如く見て相手にせぬと云ふ風であります、私共が苗族の部落などへ這入つて往くと、支那人は何の爲めに金を使つてあんな乞食のやうな者を觀に來たかと云ふ風で、地方官なども其様に考へて居ります、支那人は一體苗族の事情を知るなど、云ふことは役に立たぬこと、見て居るのです、而して現今に至つては殆んど清國政府が支那化したと言ふて宜い、サウして私が参りました時、即ち一昨年であります、十年以來支那の命令が能く行はれて大抵の苗がソロ／＼辮髮になりかゝつて來て、清朝の天下泰平を謳歌するやうになつたと云ふことであります、故に苗族征服は昨今に至つて成効と謂ふて宜い譯です、併し言語は違つて居りますから今之を研究するのは最も宜い時期であります、それから苗族が最も長く生命を保つた所以は、奥深い高い嶺の頂上に居つたからと申しても宜いのですが、支那人がどうかして苗族の巢窟を討伐して絶滅しやうとしたのですけれども容易にかなかつたのです、御承知の通り貴州省に這入るには餘程山が多いのです、一の嶺を越へると又向ふに山があると云ふやうな有様で登つて來ることが甚だ困難であつた、故に支

那民族が貴州省を明朝の末頃まで残して置たのは是が第一に關係したのであります。

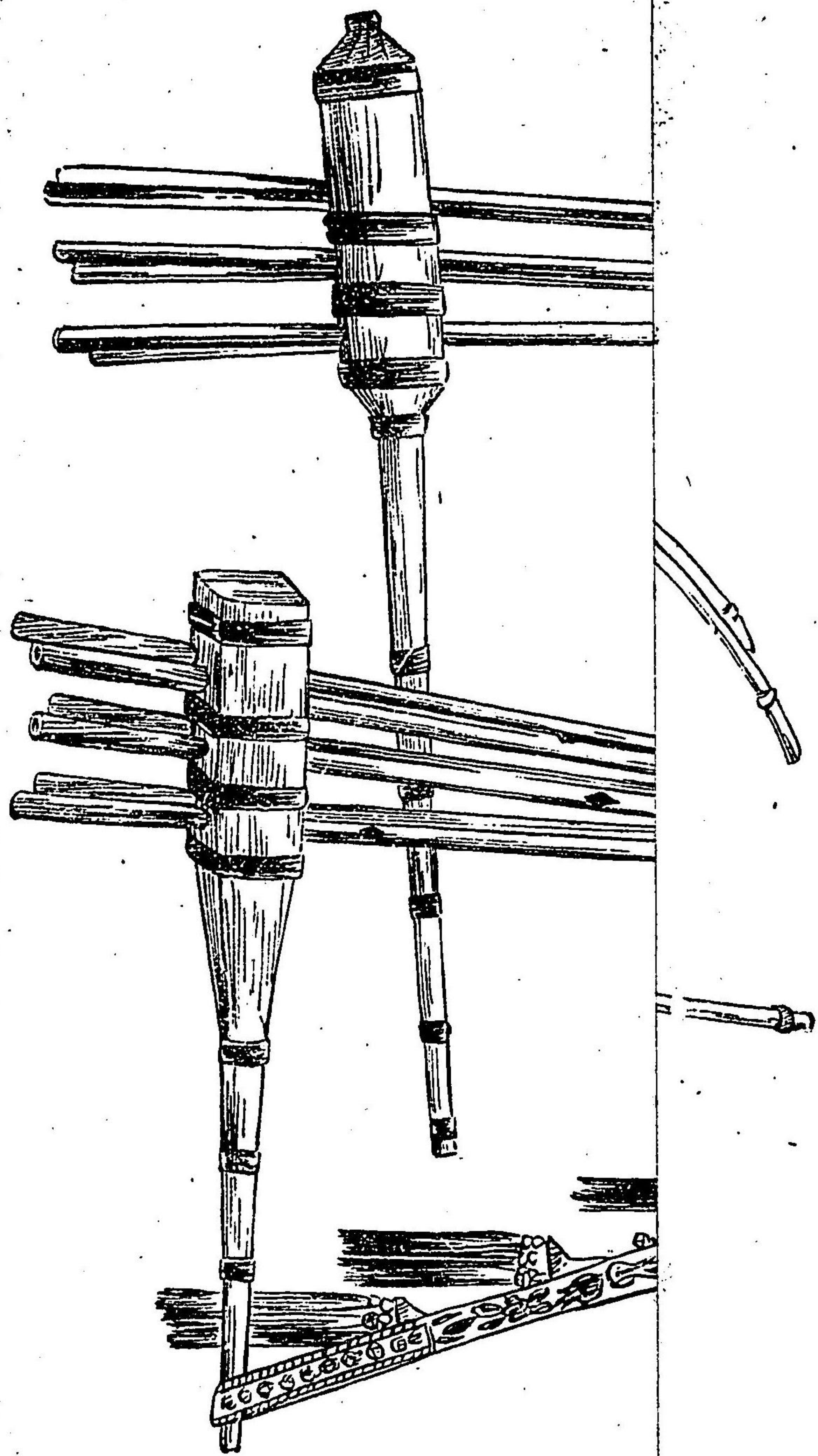
馬援が征服したる苗族

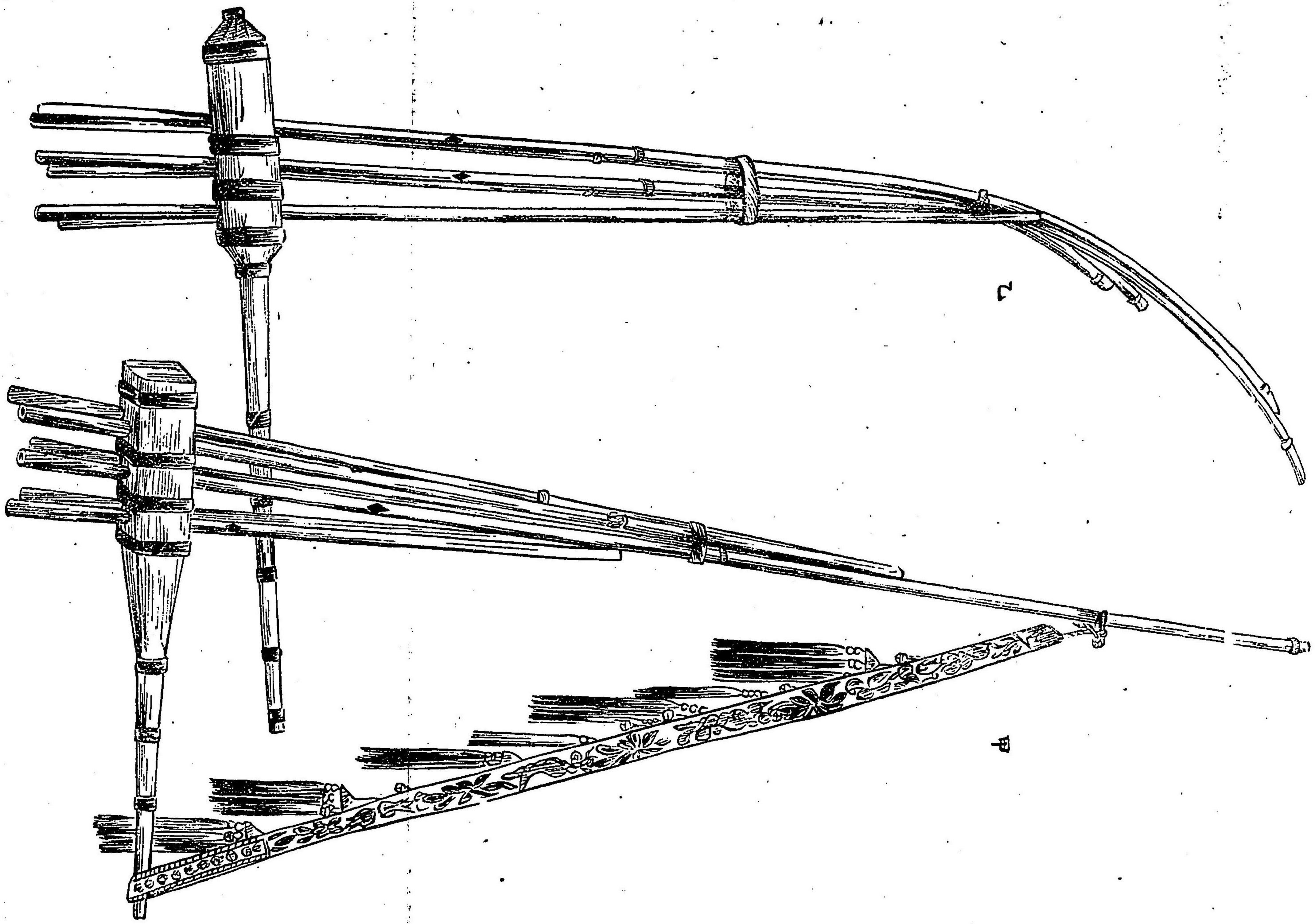
李白の流されたる夜郎

御承知の如く後漢の時分に馬援が苗族を征服する爲めに湖南省青浪灘で討死したこの所は武陵桃源附近洞庭湖に流れる沅水の溪畔ですが、後漢の時分などは此所が境であれから内へ入ることは出来なかつたのであります。又一方では唐代李白などの流された夜郎で、即ち今日の遵義であります。同時代には此方面は支那人が此處より奥に入ることが出来なかつた、それ故に當時支那人のことを研究するには遵義と云ふ所は最も趣味のある所であります。貴州省に於て府志が所々に造られてあります。遵義府志が最も多く賣れるので、それは李白などが参つて居た所であるし、漢民族が多くの人を配流した所であつて、其中に豪い人が碑文などを遺して居る所から有名になつたのであります。兎に角支那では志を得ぬ其朝廷から厄介者視せられた人は多く貴州省の苗地附近に左遷されて居る、即ち縣知事と云ふやうな名目でやられて居るので、王陽明の如きもやはり貴州省に流された一人であります。斯様な有様であつたから貴州省は

後まで残つたのであります。是は地理上山又山を越へ嶺を幾多越へなければ貴州省へはどつちから往つても往けぬ、それが爲に後まで残つたと云ふことは、支那の歴史を御覽になつても地理を御覽になつても分るのであります。然るにそれが段々後になつて明朝の末に僅かの時間に滅亡したのは如何なる所以であるかと云ふことは大に研究すべき價があらうと思ひます。私を以て考へればやはり此土地が然らしめたものと思ひます。なぜなれば貴州省と云ふ所は登つて往くには深い谷を越へ山又山を越さなければ往けぬのですが、其地の山へ登れば即ち其頂巔に達すれば一體平原の地になつて居ります。是が支那人の苗族を征服するに大に便宜を得たことと思ひます。なぜなれば貴州省は土地が平坦で水利もよし既に水田などが作れるのですから、苗族は水田などを作り泰平を謳歌し武陵桃源を夢みて居つたので容易く征服せられた譯であります。是は餘程御注意を願ひたいと思ひます。尙ほ其他に人文地理などに付て貴州省の貴陽からかけて安順府附近一帯の地は苗族が皆な居つた場所、最も水利の便があるのて、斯様な所を支那人が奪つて貴陽府、安順府と云ふものが出来たのですが、恰

も咽喉を取られたやうな譯になります。それから今日斯様な城郭のある府縣の近傍一里位の所には必ず苗族が居ります。支那の役所のあるやうな所には、其附近に苗族が居るのであります。斯様な風に今日苗族は存在して居ります。それから終りに苗族の研究に付ては漸々盛んになることを望むのであります。前に白鳥先生が大學の講義で支那南部の民族が古代に日本に居つたと云ふことを言はれました。これは私も同意であります。サウ云ふやうな事から又益々支那南部の研究は盛んにならうと考へます。又必要であります。苗族に付て西洋の學者は研究したものは至つて少いのですが、今日此處には持ては参りませぬが御参考として書類だけを御紹介致して置きます。支那の書籍に付ては他日再び申上げる考であります。





笛子之笙

苗子之笙

鳥居龍藏

天地中聲自在人心。荒裔遠屈。截竹干鳴。亦自成聲。應節。豈非莊生所謂天籁乎。異時采白狼慕義之歌。試以蘆笙吹而進之。當編入鞞鞮之科。俾此盛事也。支那南部地方。即貴州、廣西、雲南の諸省に住居せる苗子(Miao-sons)てゝ種族の間に樂器として一般に笙を用ゆ。こは古來漢人間にも普く知られたる者の如く、古き書にもあまた其記載見ゆ。今時代の順序を追ひて示さば左の如し。

先づ湖南省の辰、沅、清州蠻を記したる老學庵筆記(一)によれば、
醉即男女聚而踏歌。農隙時至。一二百人爲曹。手相握而歌。數人吹笙在前導之。貯缸酒於樹陰。饑不復。惟就缸取酒恣飲。已而復歌。夜疲則野宿。至三日未厭。到五日或七日方散歸。元則怒其歌有曰。小娘子葉底花。無事出來喫盞茶。蓋竹枝之類也。溪蠻叢笑(二)によれば、

潘安仁笙賦。曲沃懸匏。汝陽瓠篠。皆笙工材。蠻吹葫蘆笙。亦瓠餘意。但列管六。與說